宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書　第55集

宇治市街遺跡発掘調査報告書

（宇治里尻５他）

－ＪＲ宇治駅前市民交流プラザ建設に伴う発掘調査－

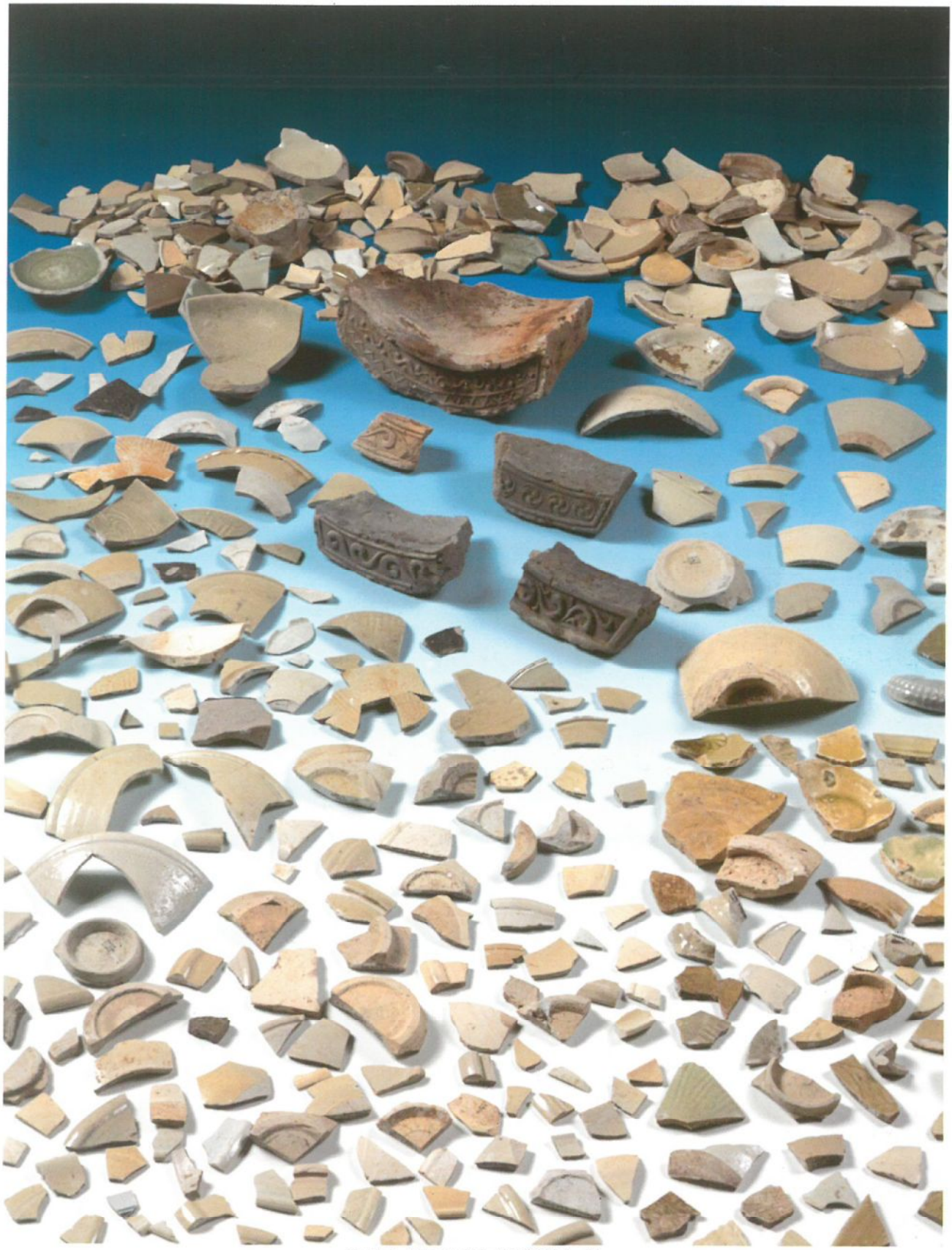
2004

宇治市教育委員会

巻頭図版 1

1．調査地全景（東から）

2．園地SG14全景（東南から）



出土した瓦と貿易陶磁器など

序

宇治市では、現在、「源氏物語のまちづくり」をテーマに総合的な街づくり事業に取り組んでいます。これは、宇治に残されている恵まれた文化財を核にして、歴史と文化に薫る「ふるさと宇治」の創造を目指すものです。

このような、現在の宇治のまちづくりイメージは、宇治がその舞台ともなっている平安王朝時代の文学作品『源氏物語』宇治十帖をメインシンボルとしながらも、具体的には現在に伝えられる平等院や宇治上神社などの世界文化遺産や国宝に指定される文化財があり、さらには白川金色院跡や数多くの藤原氏別業跡などの平安時代の遺跡に代表される、この土地の豊かな歴史性がバックボーンにあることは間違いがありません。

今回、発掘調査しました宇治市街遺跡は、現在の宇治の市街地であり観光中心地でもある中宇治地区のほぼ全体に埋蔵される遺跡であり、いわば現代に至る宇治の発展の軌跡がそのまま遺跡化したものともいえます。

発掘調査成果は、本書に詳しく報告したところですが、古墳時代から室町時代に及ぶこの土地の変遷が明瞭に発掘されました。特に注意すべきは、平安時代後期の邸宅跡と考えられる遺構が確認されたことです。中宇治地区には、藤原氏によって構えられた平安時代の別業が数多く存在したことは、いくつかの記録にとどめられているところです。このたび、その遺跡の一部が確認できたことは、平安時代に宇治で花開いた、平安王朝時代の歴史と文化を具体的に解き明かしてくれる先駆けになるものと期待します。

今後は、この成果を広く社会に発信し、歴史と文化に薫るふるさと文化の創造につなげてゆかなくてはならないと考えています。

末筆になりましたが、この発掘調査の実施にあたってご理解とご協力をいただきました関係各位に心より御礼を申し上げます。

平成16年3月31日

宇治市教育委員会
教育長　谷口道夫

例　　言

1．本書はＪＲ宇治駅前市民交流プラザ建設に伴い実施した、京都府宇治市宇治里尻５他所在の宇治市街遺跡発掘調査の報告書である。

2．本書は、宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書の第55集にあたる。

3．従来、当該シリーズは「宇治市埋蔵文化財発掘調査概報」として1982年の第１集以来、54冊の刊行を重ねてきたが、今号以降は「宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書」というシリーズ名に変更することとし、号数はそのまま踏襲することとした。

4．本書は、発掘調査の記録である基本的な図面と写真を図版として後半に取りまとめ、本文中の挿図と表は発掘調査成果の説明に必要な２次的な資料を主に収録することとした。

5．本書収録の遺構図は、現地で実施したデジタル測量からの打ち出しを下図とし、整理作業によって変更を必要とした部分に修正を加え、トレースによって仕上げた。

6．本書収録遺物の実測、遺構･遺物の製図については下記のものが行った。

　杉本　宏、足立千春、畑　陽子、黄　基玉、北澤英子、志村みどり、久保千恵子。

7．本書の図版に収録する遺物写真は、寿福写房（寿福　滋）に撮影委託した。

8．本書の執筆は下記のとおりである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章 …… 杉本　宏

第Ⅳ章第１節、第２節Ａ、第２節Ｃ …… 杉本　宏

第Ⅳ章第２節Ｂ …… 杉本　宏・足立千春・黄　基玉

第Ⅳ章第１節Ａ …… 杉本　宏・足立千春

第Ⅳ章第１節Ｂ、第２節、第３節 …… 杉本　宏

付　　章 …… 中井　淳史（大阪外国語大学非常勤講師）

9．本書の編集は宇治市歴史資料館文化財保護係が担当し、実務を杉本　宏が行った。

宇治市の位置

本 文 目 次

第Ⅰ章　序　　言 …… 1
第1節　発掘調査の経過 …… 1
第2節　発掘調査の実施方法 …… 3

第Ⅱ章　宇治市街遺跡の歴史的環境 …… 8

第Ⅲ章　検　出　遺　構 …… 11
第1節　層　　序 …… 11
第2節　検出遺構の概略 …… 12
第3節　主要遺構説明 …… 13
第4節　遺構の時期区分 …… 17

第Ⅳ章　出　土　遺　物 …… 21
第1節　出土遺物の概要と年代の基準 …… 21
第2節　主要出土遺物説明 …… 22

第Ⅴ章　考　　察 …… 27
第1節　遺物からみた上層遺構の特色 …… 27
第2節　遺構の変遷 …… 33
第3節　総　　括 …… 37

付　章　宇治地域出土の中世土師器編年 …… 41

挿　図　目　次

Fig. 1　試掘調査風景 …… 2
Fig. 2　発掘調査風景 …… 2
Fig. 3　現地説明会風景 …… 2
Fig. 4　完成した「ゆめりあ　うじ」 …… 2
Fig. 5　発掘調査地現況図 …… 4
Fig. 6　発掘調査実施範囲と地区割図 …… 5
Fig. 7　主要遺跡と古代の地形想定図 …… 9
Fig. 8　ＳＧ14池底の礎石状況 …… 14
Fig. 9　ＳＧ14池底の礎石材 …… 14
Fig. 10　古墳時代後期～奈良時代の土器出土柱穴 …… 19
Fig. 11　根石を持つ柱穴 …… 20
Fig. 12　近世土器 …… 24
Fig. 13　焼けた壁土（上塗） …… 26
Fig. 14　焼けた壁土（中塗） …… 26
Fig. 15　貿易陶磁器の割合 …… 27
Fig. 16　貿易陶磁器器形別出土分布図 …… 28
Fig. 17　北野社の棟甍建物（「慕帰絵詞」） …… 29
Fig. 18　瓦を出土した遺構 …… 30
Fig. 19　焼けた壁土を出土した遺構 …… 31
Fig. 20　平等院軒瓦編年 …… 32
Fig. 21　遺構変遷略図 …… 35
Fig. 22　「慕帰絵詞」に描かれた庭園 …… 37
Fig. 23　中宇治地区の道路と地形 …… 39
Fig. 24　宇治地域中世土師皿編年図 …… 47

表　目　次

Tab. 1　遺構略号一覧表 …… 12
Tab. 2　主要遺構時期別一覧表 …… 18
Tab. 3　中世前期（11～14世紀）における土師器と共伴瓦器椀 …… 45
Tab. 4　報告書掲載遺物一覧表 …… 50
Tab. 5　遺構別出土平瓦型式一覧表 …… 58

第Ⅰ章　序　　言

第1節　発掘調査の経過

A．本書の目的

この発掘調査報告書は、宇治市宇治里尻５番９、５番12、宇治妙落182番７(以後、宇治里尻５他とする)において宇治市が計画した、ＪＲ宇治駅前市民交流プラザ(ゆめりあ　うじ)の建設に先立ち、宇治市教育委員会が平成14年度に実施した宇治市街遺跡発掘調査の内容と成果を記録するものである。

B．通知書の提出と試掘確認調査の実施

通　知　平成14年４月30日付で宇治市長より、中世の集落遺跡である宇治市街遺跡に該当する宇治里尻５他における開発行為に関して、文化財保護法57条の３第１項の規定により通知があった。開発計画の概要は、敷地面積1524,2㎡内に建築面積726,41㎡の鉄筋コンクリート４階建ての施設を建築しようとするもので、基礎掘削は現地表面からマイナス1800ミリから2700ミリが予定されていた。当該計画地は、もとは国鉄奈良線宇治駅ホームに南接して引込み線が存在した場所であり、後に宇治市が取得して簡単な整地を行い西南角に鉄骨造の駐輪場が建てられていた。

試掘調査　このような状況からは、引込み線建設に伴って遺跡がすでに損壊している可能性も想定されたため、まずは遺跡の存否を確認する試掘確認調査を行い、その結果に基づいて具体的な対応を判断することとした。試掘確認調査は同年５月15日から21日まで実施した。試掘トレンチの幅は１m、長さ10mである。この結果、砂質土を基盤とする遺構面が地表下1.8mのところで確認され、柱穴跡や土坑が複数認められた。土層的には、遺構面の上に土器包含層があり、その上に近世から近代にかけての茶畑耕作土、その上に引込み線造成の盛土となっていた。出土した土器は、古墳時代前期から室町時代に及ぶものであり、コンテナバット１箱分が採取された。すなわち、引込み線は茶畑を大きく改変せずに構築されており、これら駅に関係する造成によって遺跡は破壊されていないことが明確になった。

この調査結果をもとに、直ちに宇治市担当部局と協議を行い、当該計画工事の基礎掘削によって地下に遺存する遺跡が消滅することは明白であるため、事前に建物建築範囲において記録保存のための発掘調査を実施することを申し合わせた。発掘調査の期間は平成14年６月から９月とし、発掘調査費用2000万円は宇治市が負担することとした。

C．発掘調査の実施

準　備　発掘調査の実施にあたっては、隣接するＪＲ奈良線に対する安全確保に関してＪＲ西日本と協議を行い、線路との境界壁から３m以上離して掘削を開始すること、掘削に伴って境界壁の沈下が引き起こされていないか、調査側が日々水準調査を行うことを申し合わせた。また、地元町内会とも土砂搬出や掘削に伴う振動や騒音に関する協議を行った。このような準備協議を終えた後、現地調査を開始した。

平成14年６月14日に現地の発掘調査に着手し、文化財保護法第58条の２第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の着手通知については６月25日付で行った。

発掘面積　発掘調査面積については当初780㎡を予定したが、前述のような電車運行に対する安全確保や隣接建物への安全対策などによって、発掘対象である計画建物範囲より調査範囲を少し狭める

Fig. 1　試掘調査風景

Fig. 2　発掘調査風景

Fig. 3　現地説明会風景

Fig. 4　完成した「ゆめりあ　うじ」

必要が生じたために、調査面積は上法で660㎡となり、さらに調査区の掘削深度が２ｍ近くなったことから労働安全衛生法による法面傾斜を確保したため、実効発掘調査面積は500㎡となった。

発掘実施　発掘調査は、詰所や安全柵設置などの準備作業、機械力による表土除去作業、遺構検出作業、遺構堀削作業、記録作成作業、補足撤収作業の順で行った。まず表土除去作業については、後の建築工事との関係及び発掘場内仮置きに関する問題回避のため、発掘調査で生じる掘削残土はすべて場外搬出処分とした。処分にあたっては事前に土砂の分析検査を受け、(財)城陽山砂利採取地整備公社の埋め立て処分地に搬入処分した。処分量は約1200立米である。

遺構検出作業はもっぱら人力で行った。表面検出終了の後、遺構輪郭のオルソ画像を作成し、遺構管理番号を与え、人力による遺構掘削を慎重に行った。遺構掘削については、まず、基本的な遺構面である中世を主体とする上層遺構面を全体にわたって掘削し、古墳時代の下層遺構については、存在範囲のみを掘り下げることとした。上層遺構検出段階で、膨大な柱穴が重複して存在することが明らかとなったため、掘削と並行しながら埋土の類別を詳細に行い、時期的な並行関係の手がかりとなるように計画したが、掘削の進行とともにこれらの類別作業が困難なものとなっていった。結果的にこの類別が効果的にできなかったことにより、遺物量の少ない柱穴の同時性については、具体的な判断がますます難しいものとなった。

実　測　検出遺構の実測作業については、全体遺構図・土層図を光波式トランシットと電子平板の組合せで行い、部分的図面については手測りで行った。電子データはＣＤ１枚と遺構図・土層図のマイラーへのプリントアウトとして保持している。遺構実測の基準は、国土調査法に基づく平面直角座標第Ⅵ系を使用し、調査地内に仮設測量基準点を打設した。調査地のグリッド方眼は４ｍとし、国土座標に即して設定した。したがって、座標北に対して磁北は６度37分西に偏し、真北は７分東に偏する。表記は、座標のＸ軸に数字、Ｙ軸にアルファベットを用い、Ｘ＝－123.396、Ｙ＝－17.912を原点とした。

写　真　写真記録については、45判、67判、35㎜の白黒とカラーを使用して撮影した。数量は45判アルバム１冊、67判アルバム１冊、35㎜スライドアルバム５冊、35㎜白黒アルバム１冊、35㎜カラーアルバム１冊である。その他にメモ的な写真としてデジタル写真がある。日々の経過と記録について

は調査日誌がある。

終　了　発掘調査の終了は9月20日であり、翌日付で発掘調査終了届を提出した。

D．発掘調査の現地公開

当該地はJR宇治駅前広場に隣接しており人通りも多いため、調査地と駅前広場との間のフェンスには発掘調査の実施掲示や発掘状況の案内掲示を行い、市民がフェンス越しに日常的な発掘調査状況と進行経過が見学できるように配慮した。調査終盤の8月15日に報道発表を行い、17日(土)に現地説明会を開催した。

現地説明会は、発掘調査現地オープンデーとし、午前10時から午後4時まで作業中の発掘調査現地の見学開放と出土遺物の現地での展示を行った。現地見学に際しては、宇治市歴史資料館職員と委託業者とで見学者の応対をした。見学者は1000名ほどを数え盛況であった。

また、翌年3月8日に宇治市中央公民館で開催した宇治市発掘調査報告会では、本件発掘調査の成果を参加200名の市民にスライドをまじえて報告した。

E．出土品の措置

今回の発掘調査で出土した遺物は、調査終了時の収納状況でコンテナバットに土器と瓦が40箱分の数量であった。発掘調査終了後、出土遺物は宇治市歴史資料館に搬入した。

遺失物法に基づく埋蔵物発見届は9月26日付で宇治警察署に提出し、京都府教育委員会に対する保管書も同日付で提出した。これら出土遺物については、11月14日付で文化財認定された。

F．発掘調査終了後の措置

発掘調査終了後は、埋め戻しをせずに現地を撤収した。建設工事は予定通り実施され、平成15年4月に鉄筋コンクリート造4階建のJR宇治駅前市民交流プラザ「ゆめりあ　うじ」が完成した。

G．発掘調査報告書の作成

整理作業　整理作業と発掘調査報告書の作成は、宇治市歴史資料館が直営で平成15年度に行った。整理作業にあたっては、遺跡・遺構の時期や特徴の判定にかかる遺物、あるいは遺存度が高く時代的特徴を良く示す遺物で、当面の報告書作成にあたって必要であるもの（A）と、遺存度が低く分析対象としては情報量が少ないため今回の整理作業では特に要しないもの（B）とに分別した。数量的にはAとBはほぼ同量である。ただし、整理収納状態では前者がコンテナバット25箱分、後者が17箱分となっている。Aに該当する箱数が多いのは、接合や復元を行って容量が増加したためである。

印刷部数　報告書の印刷部数は600冊であり、通常の印刷数より100冊多くした。これは、宇治市街遺跡がこのようなまとまった面積で発掘調査されたのは初めてのことであり、かつその成果も宇治の歴史的発展過程を具体的に把握する上で重要な報告書であると判断したためである。

配布先　報告書の配布先は、近隣地方自治体の教育委員会、図書館、資料館あるいは文化財や考古学の専攻を持つ大学であり300冊を無償配布した。残数については宇治市歴史資料館で一般頒布している。この発掘調査で作成した記録類及び出土品については、宇治市歴史資料館で収蔵し公開している。

第2節　発掘調査の実施方法

A．発掘調査の実施主体

本件発掘調査は、宇治市長の依頼にもとづいて宇治市教育委員会が実施したものであり、宇治市歴史資料館が実務担当した。

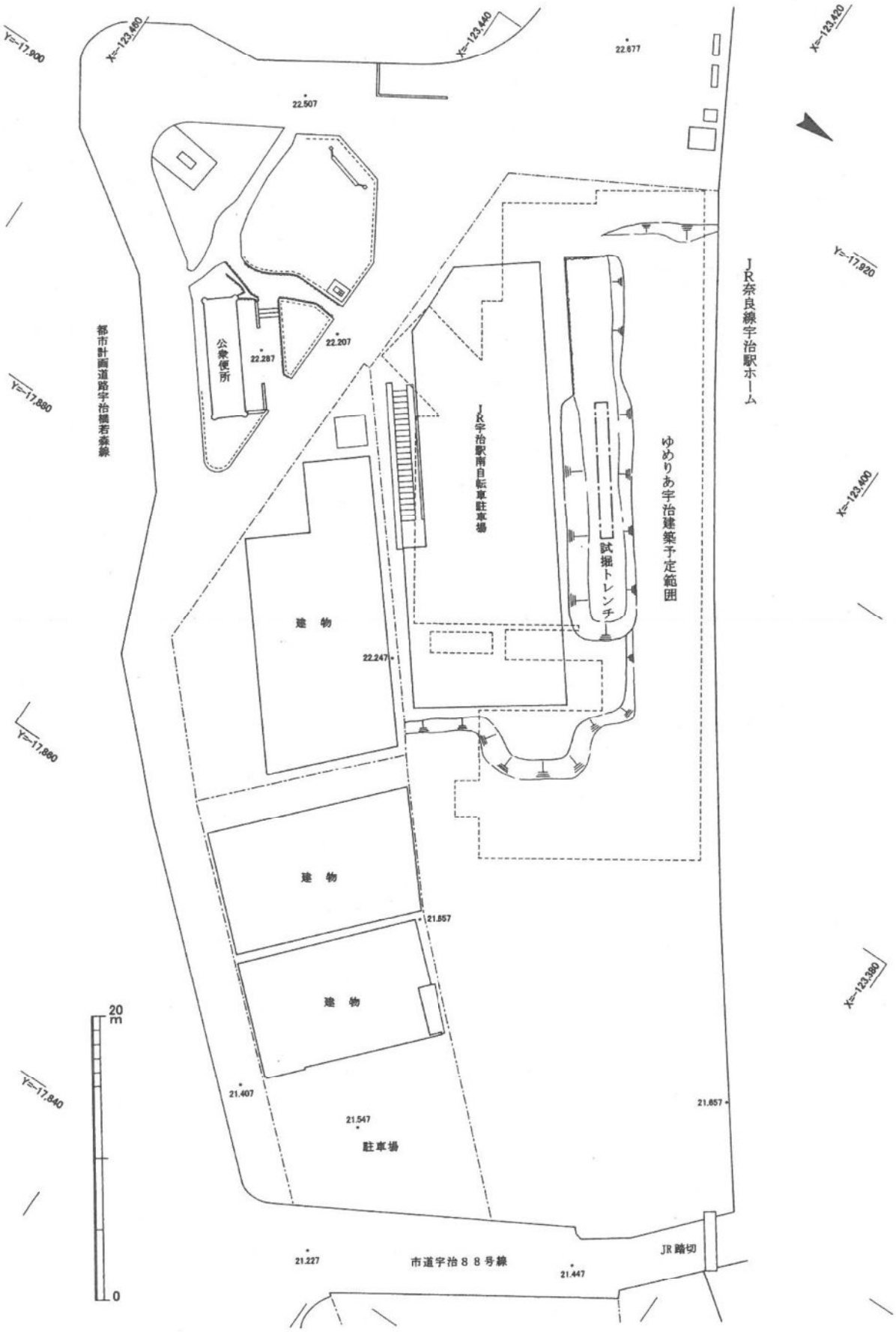


Fig. 5　発掘調査地現況図

Fig. 6　発掘調査実施範囲と地区割図

B．発掘作業の実施方法

現地の発掘調査については宇治市歴史資料館が直接担当し、発掘調査の土砂排除にかかる作業や記録作成作業など、発掘調査に必要な標準的な発掘作業及び作業の運営管理全般を、競争入札で落札した専門業者に委託した。

発掘作業は発掘担当職員の指示監督の下、委託業者が組織した発掘技術員（大学で考古学や文化財を専攻するか、日本考古学協会員の資格を持ち、発掘調査員としての現場経験を有す者）１名、実測技術員（測量に関する専門知識を持ち遺構実測の経験がある者）１名、発掘技術員補助数名、発掘作業員長（３年以上の発掘作業歴を持つ熟練作業員）１名、発掘作業員10名程度の人員体制で行った。

C．発掘調査の体制

発掘調査の体制は下記のとおりである。

（教育委員会）

発掘調査責任者：宇治市教育委員会　教育長　　谷口道夫

専門指導：宇治市文化財保護委員会　委員長　　上原真人（京都大学大学院教授）

発掘調査事務局：宇治市歴史資料館

教育委員会参事・資料館長　　五艘雅孝

教育委員会主幹・文化財保護係長　　吉水利明

発掘担当者：歴史資料館　文化財保護係　主任　　杉本　宏（主担当）

主任　　荒川　史

主事　　浜中邦弘

資料館係　　嘱託　　吹田直子

発掘補助員:足立千春、畑　陽子、北澤英子、志村みどり、久保千恵子、黄　基玉

（発掘作業委託）

委託業者名：株式会社発掘建設リンク

発掘技術員：同社文化財サポート室　仲道　裕

発掘技術員補助：　同　　堀　良平、加賀屋　央

実測技術員：　同　　浅川永子

作図補助員：　同　　石光芳康、井上真紀、小池智美、中井勝次、三宅　智

発掘作業員長：　　福島　洋

（協　力　者）

本調査の実施にあたっては、次の方々からご協力・ご教示いただいた。感謝する。

機関：株式会社ＪＲ西日本、宇治第一ホテル、六番町町内会、第三連合町内会。順不同、敬称略。

個人：上島　亨（京都府立大学）、大澤伸啓（足利市教育委員会）、朧谷　寿（同志社女子大学）、久保智康（京都国立博物館）、小泉裕司（城陽市教育委員会）、大洞真白（八幡市教育委員会）、増渕　徹（橘女子大学）、南出眞助（追手門学院大学）、西山良平（京都大学）、山口　博（京都府教育委員会）、若原英弌（宇治市文化財愛護協会）。順不同、敬称略。

D．本件発掘作業実施方法の効果と反省点

従来方式　本市の一般的な発掘調査実施方法は、文化財担当職員が発掘調査計画策定のみならず、調査工程の管理や調査の品質管理を逐一現場で行いながら、発掘調査作業を進めてきた。発掘に伴う土砂掘削・除去作業や遺構測量作業は、専門業者に作業を委託するのが一般的であるが、これら作業の工程管理や品質についても、細部まで担当職員の直接的な現地指示に基づいて行ってきた。

今回の方法　今回の実施方法は、このような職員による専従的直接担当方式とは少し異なり、前述のように掘削から実測に至る発掘作業自体を一括委託し、担当職員は委託業者の発掘技術員に調査の進め方を指示し、発掘技術員が現場を具体的に進めてゆくものであった。担当職員は、これらの発掘作業進行の監督業務が主な職務であった。

実施理由　このような発掘作業委託方式を導入した理由は、一つには、文化財担当職員の専従的直接担当方式による発掘実施が、本件について人員的に難しかったこと、もう一つはJR宇治駅前市民交流プラザの建築工事が急がれており、すみやかな発掘調査実施が求められていたことによる。

効　果　本方式による効果としては、専従的直接担当方式と同水準の発掘作業が、半分ほどの担当職員の現場専従率で実現できたこと、また発掘期間に関しては、実績として通常設計の３分の2に短縮できたことがある。期間短縮については、遺構上面確認時に行う遺構番号管理をデジタル撮影によるオルソ画像から、直ちに管理用遺構平面図を作成したことにより、膨大な個別遺構への番号付与が極めて短期間で可能となり、遺構精査からすみやかに遺構掘削へ移行できたことがある。また遺構実測では、熟練した実測技術者が電子平板などのデジタル機材で効率的に実施したことをはじめ、委託会社の努力が大きかった。

しかし、かたやシステムとして考えた場合には、発掘作業全体を一括委託している関係で、掘削作業と実測作業とを現地で細かく調整しながら同時に並行して行えたことが大きい。これによって本発掘工程では、遺構実測という単独の工程を省くことが可能となり大幅な期間短縮へとつながった。

反省点　反省点としては、このような方式によって発掘現場での作業効率は上がったものの、必然的に担当職員が取得すべき当該発掘内容に関する具体的な情報量が低下したことがある。このことについては、発掘現場遂行上は特に問題化しなかったが、整理・報告書作成作業においてはずいぶんと顕在化し、整理作業全体の進行に少なからず影響を及ぼしたことは否めない。

記録保存を目的とする緊急発掘調査において、発掘から得られた情報の効率的な整理と集約度の高さは、発掘目的自体にかかる大切な要件である。いかに担当職員の細かい情報取得を担保しながら発掘作業の効率化を進めるかは、このような委託方式を今後行う上では、当初段階から十分に検討かつ工夫され克服されるべき課題であると考える。

今後、今回の実施方法については、その評価を慎重に行い、より効率的に高い水準の発掘調査が実施でき、整理・報告書作成作業にスムーズに移行できるよう検討と工夫をしてゆきたい。

第Ⅱ章　宇治市街遺跡の歴史的環境

A．遺跡の概要

宇治市街遺跡は、宇治市大字宇治の古くからの宇治市街地に重複して広がる、古代末から中世期を中心とする集落遺跡で、かつての宇治郷が遺跡化したものである。現在、周知の埋蔵文化財包蔵地として認識されている範囲は、宇治川を挟んで東西に1,500mほど、南北に500mほどであり、面積54万㎡を測る広大な遺跡である。

この遺跡が広く周知されたのは、昭和58年に刊行した『宇治市遺跡地図』においてであり、現在までに11回ほどの開発に伴う緊急発掘調査[1)]が実施されている。また、当遺跡内には平等院旧境内地や縄文時代後期から奈良時代に至る集落跡である塔ノ川遺跡が重複しており、重複遺跡の発掘調査[2)]を含めると過去に通算20回ほどの発掘件数が実施されていることになる。

しかし、これらの発掘調査は、市街地の制約要件からいずれも発掘調査面積がさほど広いものではなく、個々の地点における遺構変遷を順次明らかにし情報の蓄積を図りつつも、当該遺跡全体にかかる具体的な変遷過程や遺構の展開状況など、総合的な評価に結びつく考古学的な分析成果を導き出すには未だ不十分な中にある。今回の発掘調査は、過去の発掘調査に比べると比較的まとまった面積となっており、かつ後述するように遺構・遺物の密度も高く、宇治市街遺跡の具体的な内容解明に確実な一歩を留めた注目すべき発掘調査であったと考えている。

B．遺跡の地理的環境

宇治の範囲　現在、一般的に「宇治」と言われる地域は宇治川を挟んだ広い地域として認識されている。しかし国郡制においては、宇治川西岸域は久世郡宇治郷、東岸域は宇治郡宇治郷に編入されていた。今回の調査地が位置する川西地区は「中宇治」と通称され、本町通り、宇治橋通り、県通りの三本の古道が直角三角形の辺状に結節しながら通り、これによって作り出された空間に古くからの宇治の町並みが形成されている。いわば古くからの宇治市街地の中心である。

当該地域の北に接して、かつて巨椋池（昭和16年干拓）があった。この大きな淡水湖は、山城盆地を南北に分断した自然の障壁であり、宇治は巨椋池と宇治川によって遮られた陸上交通の要所となっていた。川東の橋寺に伝わる重要文化財宇治橋碑によれば、ここに最初の橋が架けられたのは大化二年（646）のことであったという。

地　形　当該地区の地形は、南側丘陵部から流下する折居川あるいは塔ノ川などの小河川が形成した扇状地と宇治川が形成した河岸段丘とが複合したものとなっており、概ね北と東に向かって下降する地形となっている。基盤となる土層は、これら小河川の沖積作用によって堆積した黄色の砂層あるいは砂礫層であり、南側に広がる折居丘陵の基盤的土層でもある。塔ノ川が扇状地形成を止め、現況に近い流路に固定されたのが縄文時代後期以前であることは、平等院境内の発掘調査によっておおむね理解できている。また、当該地区のもっとも広い範囲に沖積作用を及ぼしていた折居川の扇状地形成の終息が、古墳時代中期以降終末期までの間である可能性が推定できるようになったのは、今回の発掘調査の成果による。

1　主な発掘調査の報告書としては、宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』の第1集（昭和57年）・8集（昭和60年）・12集（昭和63年）・16集（平成2年）・18集（平成4年）・29集（平成7年）・44集（平成11年）などがある。

2　主な発掘調査報告書としては、宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』の22集（平成5年）・24集（平成6年）・26集（平成7年）及び宗教法人平等院『平等院境内発掘調査報告書』平成12年などがある。

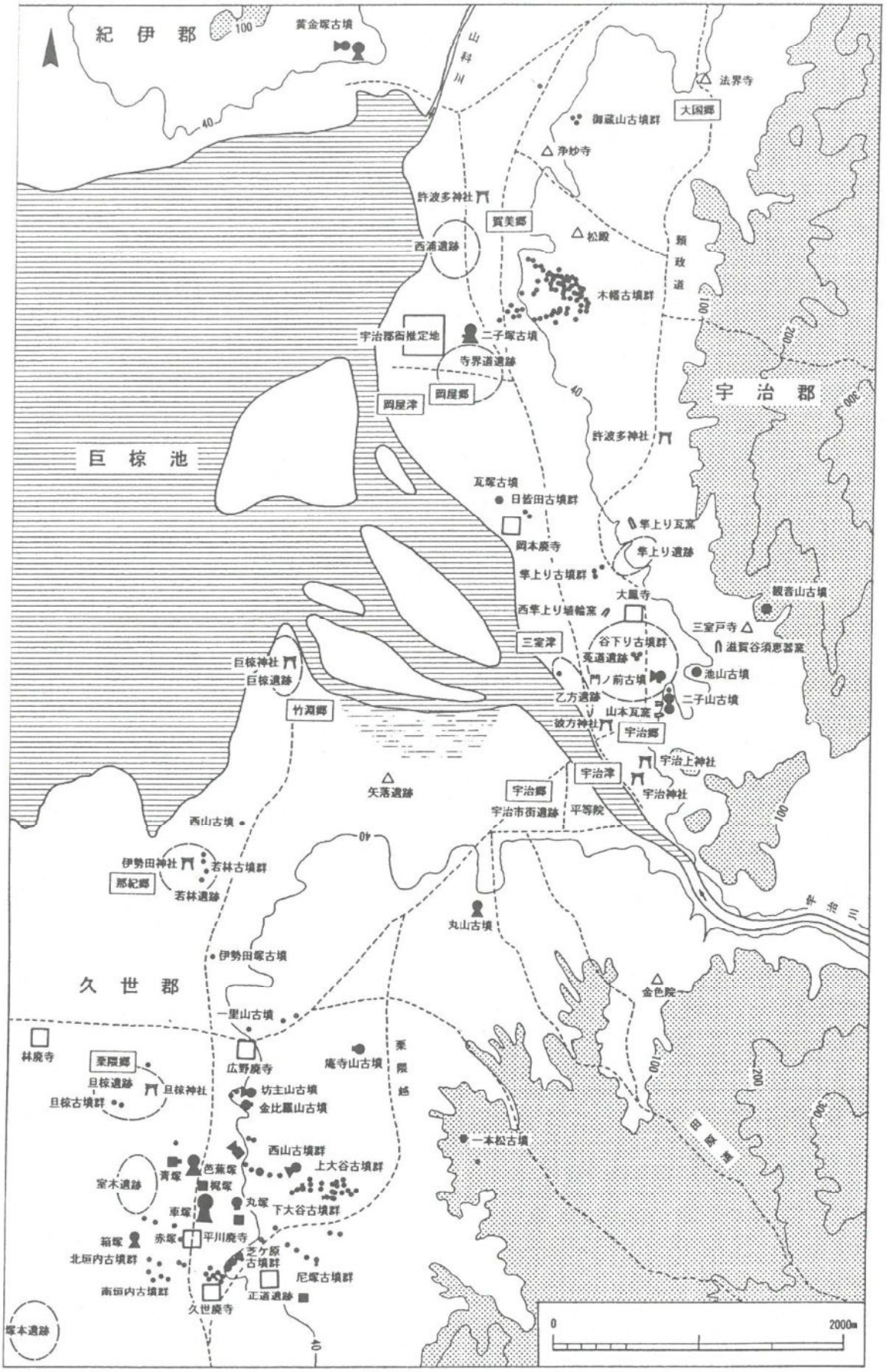


Fig.7　主要遺跡と古代の地形想定図

川西地区で標高的に最も高い部分は南西部で31mほどを測り、かわって最も低いのは北辺や東辺部で15mから16mほどである。直線距離にして700～800mで15mほども下降しており、宇治市街地はわりあいと傾斜地形に展開していることになる。なお、調査地付近の現況地盤標高は22mほどである。ただし、この辺りは明治29年（1896）に開設された国鉄奈良線宇治駅の造成に伴って広い範囲でかさ上げがされており、旧地形に大きく変更が加えられた場所である。

C．遺跡の歴史的変遷

古墳以前　川西地区で、最も古い時代の遺構が集中して見つかっているのは、平等院境内下層に存在する塔ノ川遺跡であり、縄文時代後期後半の遺物が比較的まとまって出土している。弥生時代から古墳時代にかけても集落は継続している。今のところ、この時期の遺構が集中するのは川岸の塔ノ川遺跡に限られている。古墳としては古くに消滅した宇治市役所の西側の全長37mの前方後円墳、宇治丸山古墳[1]がある。ここからは国産四獣鏡や鉄製武器が出土しており、前期から中期にかけての古墳と考えられる。今回、ほぼ同時期の土器が自然流路から出土したことは、丸山古墳と関係する集落を窺う上で興味深い。

飛鳥・奈良　川西地区の比較的広い範囲で遺構・遺物が散見されるようになるのは、概ね飛鳥時代ころからである。奈良時代の遺物も各地点で散見される。しかし、当該期の遺跡の具体的展開状況はなお明らかでない。宇治橋の存在は『日本書紀』天武元年（672）条の壬申の乱関係記事で確認できる。

平　安　平安遷都に伴って宇治には貴族の別業が建てられ始めている。平等院も藤原道長の別荘宇治殿をその子頼通が寺院としたもので、道長がこの別荘を源重信夫人から取得したのは長徳四年(998)のことであったと伝える。このような藤原氏による平安期の別業については、他に小川殿・小松殿・西殿・池殿・沢殿などを記録に見ることができる。このような諸別業の場所については現時点では明らかにしえないが、いずれも川西地区に造営されていたものと考えられている。宇治妙楽162や169番地の発掘調査で検出された12世紀の木組井戸や礎石建物跡などは、これら邸宅に関係する遺構である可能性が高く、市街遺跡で散見される平安後期の河内系瓦の存在も、これら別業の存在を予見させるものである。

町　割　当該地区の町割は、現在、大きく二つの方位が認められる。一つは直行する本町通りと県通りを軸とする東西南北の碁盤目町割であり、もう一つは宇治橋通りを軸とするこれに斜交する町割である。前者の町割については平安期に遡る可能性[2]が指摘でき、後者については中世に新たに作られた町割である可能性[3]が指摘されている。

中　世　平安後期から中世にかけては、宇治に町屋が成立しある程度の町屋住人の居住が諸種の記録から推測可能である。また発掘調査においても、当該遺跡の各地点からよく見つかる遺構の年代は、やはり13から15世紀に至る時期のものであり、この頃に町屋が一定の規模に展開していることは首肯できる。このような宇治の町の変遷を、どのように緻密に跡付けできるかが宇治市街遺跡発掘調査の課題であり、その成果は単にこの土地の発展を窺う情報にとどまらず、広く古代末から中世にかけて激動した政治・経済の実像解明、あるいは地方都市の成立過程に関して、重要な情報を提供するものと考えている。今回の発掘成果はこのような当該遺跡の歴史的環境をめぐる中で、評価されるべきものであろう。

1　京都府「宇治丸山古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』6、大正12年。
2　杉本　宏「宇治橋架橋位置変更と宇治街区の成立」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第24集　宇治市教育委員会　平成6年。
3　浜中邦弘「院政期宇治の情景」『同志社大学考古学シリーズⅧ　考古学に学ぶⅡ』松藤和人編　平成15年。

第Ⅲ章　検　出　遺　構

第1節　層　　序

A．基本的な層序

当該地の基本的な層序は、下層から基盤層、遺物包含層（漸移層）、近世耕作土層、旧宇治駅引込み線ホーム造成土層、現代整地土層の順となっている。

基盤層　基盤層すなわち地山は、折居川の沖積作用によって堆積した黄色系の砂質土を基本とする層である。この層位はシルト質の層と砂礫質の層とが互層状に堆積しており、トレンチ西端の断ち割り部や井戸跡の土層から2m以上の厚みを持つことが分かっている。堆積上面から1mほど下位には褐色系の砂礫層の間層が認められ、断続的な沖積作用によってこの基盤層が形成されたことが理解される。遺物は、最上面で検出された自然流路ＳＤ49内で古墳時代前期末葉の土器が出土している以外は、断ち割り等においても特に確認できなかった。

包含層　基盤層の上に厚さ20cmほどの黒褐色の砂質土が堆積している。本調査においては、一応、遺物包含層として表記している。断面を観察すると、この層位は基盤層の上に新たに堆積した層位とは考えにくく、基盤層が安定した地表面となったことにより、その上層部が漸移層化したものと判断された。また、当該層位上層部は上位に堆積する茶畑の影響を強く受けていることから、上下の層位境はわりあいと不明瞭となっている。中世期の遺構の多くは、この層位上面から穿たれていることが確認できるが、古代の遺構の掘り込み上面がどこであるかは確認できていない。層中に古墳時代後期から室町時代の土器片を包含する。ただし量的には多いものではない。漸移層化の過程で混入したものだけではなく、土色では判断ができなかった遺構の遺物も含まれていると考えられる。

茶畑層　包含層の上位に灰味を帯びた黒褐色の耕作土が存在する。この耕作土層は明治29年に当該地に国鉄宇治駅が建設されるまで存在した茶畑にかかわるものである。この辺りが茶畑となったのは、近世の古絵図などの資料から江戸前期までは遡れるようで、今回の発掘でもこれを裏付ける近世遺物が出土している。なお、この層位には古墳時代後期から室町時代の土器片も含まれている。掘削中は遺物包含層として取り扱っている。

駅造成土　旧宇治駅引込み線ホーム造成土層は明黄褐色のまさ土の単層である。重機掘削は、基本的にはこの造成土以上を表土として取り扱ったが、実態的には下位の耕作土上面にも掘削は及んでいる。この段階で出土した遺物は表土出土として扱われている。

B．遺構検出の層位

上記のように、当該調査地での中世以前の遺構検出が実施可能な面は、層序的には遺物包含層（漸移層）上面と基盤層上面の、上下に20cm程度はなれた2面が存在する。しかし、実際の発掘調査において遺構検出を実施した面は、下の基盤層上面の一面だけである。理由は、遺物包含層（漸移層）上面での土色による遺構確認が、実態としてきわめて困難と判断したからである。前述のように、遺物包含層はそもそも基盤層が漸移層化したもので、そこに上位層の茶畑からの影響をさらに受けているため、上面精査では濃淡の褐色系の土が一面に不規則な斑紋を描く状況であった。この状態からでは、遺構の正確な輪郭や重複を確認することが極めて難しいため、表土排除後直ちに遺物包含層（漸移層）も慎重に機械で削りこみ、下位の基盤層上面で遺構検出を行うこととした。したがって発掘調査での

遺構面は、トレンチ西端で標高20.3m、東端で標高19.7mを測る、1.7%勾配の東下がり面として検出されているが、本来の中世期遺構面はこの20cm程度上で形成されていることになる。

なお本書では、「上層遺構」・「下層遺構」という用語を使うこととなる。これは前述の層位上の上下関係を示すものであり、下層遺構とは基盤層上面から穿たれている遺構、上層遺構とは包含層上面(あるいは層中)から穿たれている遺構を指すこととなる。

第2節　検出遺構の概略

A. 遺構の表記方法

遺構の略号は『発掘調査のてびき』[1]に準拠して、下記のような遺構の性格別アルファベット略号を用いた。表記の仕方については、「遺構性格名＋略号＋番号」を正式なものとし、「略号＋番号」も併用することとした。Ｓで始まる遺構番号については全区通番とした。pitについては各区毎での通番とし、例えばＡ１区のpit１の場合「Ａ１Ｐ１」という略し方をした。発掘中に遺構が統合され消滅した場合は、番号の繰上げは行わず、欠番として処理した。また、発掘中に付与した全区通番の遺構番号は49までであり、それ以降は整理段階で付与したものである。

Tab. 1　遺構略号一覧表

略　号	対応遺構	備　考
ＳＡ	柵、塀、築地など	柵、塀、築地などの区画施設。今回、一定の距離をほぼ等間隔の柱間で直線的に並ぶ柱穴列を一応柵と認定した。
ＳＢ	建　物	ほぼ等間隔の柱間で長方形に配置される柱穴列を掘立柱建物と認定した。全体が発掘されていない場合でも、同様に予測できる場合は掘立柱建物とした。建物の形式、性格は問わない。
ＳＤ	溝、流路など	細長く掘削された遺構を溝とした。今回は自然流路も同略号とした。
ＳＥ	井　戸	井筒型式を問わない。今回、深い素掘り穴も井戸と認定した。
ＳＦ	道　路	基本的には並行する溝の間の空間を道路と認定する。
ＳＧ	園　池	人為的に掘削され整備された池状遺構を園池と認定した。
ＳＫ	土　坑	井戸、溝、園池、柱穴に当てはまらない一定の大きさの掘り込みを土坑とした。
ＳＸ	性格不明遺構	pit及び上記以外の遺構に当てはまらないもの。
pit（P）	柱穴、杭跡など	柱あたりの確認できたもの、根石を持つものは当然のこととして、小型の円形掘り込みを含め柱穴とした。ＳＫとした小型土坑とpitとした大型柱穴との区別には、現実的に不明瞭な部分が存在することは否めない。

1　文化庁文化財保護部監修『発掘調査のてびき』第一法規　昭和41年。

B．検出遺構の層位面

検出遺構は、大きく上層遺構と下層遺構に二分される。下層遺構はトレンチ西北部で検出した自然流路ＳＤ49のみであり、他は上層遺構となる。

上層遺構　上層遺構の検出数量は、園池跡１、溝跡９、井戸跡３、土坑35、柱穴583を数える。柱穴はいずれも円形を呈し、根石を用いるものも少なからず認められた。柱穴から認定可能な構造物は、現時点で掘立柱建物３棟、柵１条となっている。遺構は発掘範囲全体に満遍なく広がっており、検出密度も高い。後世の攪乱をこうむっている範囲はわずかであり、全体として遺構の遺存状況は良い。遺構の埋土は、いずれも黒褐色系の土である。埋土の中に黄色シルトブロックや炭を含むものも認められたが、これらが直ちに何かのまとまりを示していると確認するにはいたらなかった。なお、検出柱穴数から考えれば、かなりの棟数の建物跡が当該地で累積していることは疑う余地もない。これら累積しているであろう建物の析出が、今回の報告書では課題として残されたことは否めない

上層遺構の時代は、出土遺物から判断すれば、古墳時代後期後半（６世紀末葉）から室町時代後期（16世紀初頭）に及んでいる。中心となる時期は、平安時代後期から鎌倉時代にかけての時期と室町後期との二時期である。しかし、井戸跡や土坑などの大型遺構は別として、柱穴のような小型の遺構には時代判定が可能な遺物が包含されている事例が多いとは言えず、全体として、明確な時期を示すことが難しい場合が多い。また近世の遺構が若干認められるが、いずれも茶畑の耕作に関係するものである。

下層遺構　下層遺構は、古墳時代前期末葉あるいは中期初頭の自然流路だけである。上層遺掘削時に、この自然流路の南肩を上層遺構と誤認し、細い溝として掘削した。遺構番号はＳＤ04である。本書の遺構平面図にはこのＳＤ04は点線で示した。

なお、調査地は方位に斜交するが、便宜上、宇治駅側の長軸トレンチ壁を「北壁」として説明する。

第３節　主要遺構説明

遺構の主要なものについて、種類別に説明する。なお、下層遺構としては自然流路ＳＤ49のみであり、他は全て上層遺構である。

A．建物跡、柵跡、柱跡

掘立柱建物ＳＢ101　調査地東半部で検出した建物跡で、全容が理解できる。規模は梁行三間、桁行五間で、梁行5.45m、桁行10.35mを測る。建物方向は、真北より西へ51度７分程度傾く。間仕切りの柱穴列が北東の桁行と南東の梁行内側に配置される。ただし、これが母屋の間仕切りなのか庇を示すものなのか判然としない。柱穴は直径30から40cmの円形で、中に25cm程度の扁平な砂岩質川原石の根石を持つものが多い。時期を特定する遺物に恵まれないが、他の遺構との重複関係では、ＳＤ35→ＳＤ36→ＳＢ101となっており、上層遺構群のなかでは新しい一群に置かれる。中世後半期の可能性が高い。

掘立柱建物ＳＢ102　調査地中央部で検出した小型の建物跡。東西棟で、梁行一間、桁行二間の規模で、梁行2.83m、桁行3.95mを測る。建物方位は東西棟で真西より８度７分程度南に傾く。建物範囲内に土坑ＳＫ22から24、井戸ＳＥ25が存在する。南桁行中間柱がＳＫ22から24の下層土坑によって破壊されていることから、ＳＫ24の下層遺構であるＳＥ25と同時期と考えられ、12世紀中頃のＳＥ25に伴う井戸屋形である可能性が高い。

掘立柱建物ＳＢ103　調査地の南東部で建物の北西の一角を検出した。確認できるのは東西方向に三間（5.8m）、南北方向に二間（4.4m）である。建物の方位は、真北より３度７分程度西へ傾く。年代

を決定する遺物に恵まれない。状況的にＳＡ104と同時期と考えられる。

柵ＳＡ104　調査地北東部を東西方向に横切る柱列であり、柵とした。現状で五間分、15.8mにわたって検出した。柱掘方は円形で直径は50から60cm程度である。柱間は2.9から3.4mを測る。柵の方位は真西より南に２度７分程度傾く。年代を決定する遺物に恵まれない。しかし、12世紀末から13世紀にかけて埋没した溝ＳＤ43との接点部の様子からは、両者が並存していた可能性を推測できる。

柱穴Ｄ５Ｐ16　直径25cmほどの不整円形を呈する。小型土坑とした方が適切な評価であろう。中には古墳時代後期の須恵器甕（329）の破片がかたまって入っていた。

柱穴Ｅ６Ｐ14　長径1.2mほどの楕円形を呈する。小型土坑とした方が適切であろう。ここから出土した磁器片は土坑ＳＫ51出土磁器と接合する。

柱穴Ｇ４Ｐ３　一辺50cmほどの角丸方形の柱掘方を持つ。柱跡は直径25cmほどで、中から火を受けた粘板岩破片と半分ほどの白磁碗（340）が出土した。

柱穴Ｈ４Ｐ31　長径約１m、短径60cmの長楕円形を呈する。土坑とした方が適切である。上層部から完形の土師器の蓋（362）が出土した。

柱穴Ｉ１Ｐ２　北壁に接して検出したため、正確な範囲は不明。中央部には上向きに積み重ねられた4枚以上の土師皿（367～372）、その周りにも土師皿破片が密集していた。土師皿には煤が付着したものがあり、状況的には柱跡への土器埋納を想起させる。11世紀後半。

Ｂ．園池跡、溝跡

園池ＳＧ14　調査地の南東部で検出した素掘りの小型の池である。規模は南北5.1m、南北4.6mを測る。深さは検出面から60cmほどである。南側に溝ＳＤ09、北側に溝ＳＤ21が取り付く。溝底の高さからＳＤ09が給水、ＳＤ21が排水を担ったと考えられる。これは遺構面傾斜とも整合する。満水時の水深は50cm弱に算出できる。出土土器の中心時期は15世紀末葉から16世紀初頭に比定できる。

この池の平面形状は丸みを帯びた台形状であり、東岸のみが直線的になっている。池底の南東隅には、長辺35cmで上面が平らな緑色の川原石を中心に10個ばかりの小石が埋められていた（Fig.8・9）。池中への張出し縁礎石の可能性が考えられる。また底部で漆器塗膜が出土した。

上面検出時、埋土にはＳＤ09が取り付く南側を除く三辺側には数多くの礫（拳大から人頭大）が乱雑に混入した状態にあった。これらの状況を整理しながら掘り下げを行ったところ、表面で認められた多数の礫は、おおむね上層部だけに存在するもので、その下に西辺側から大振りの川原石が、さらに多数池中に落ち込んでいる状況が看取された。この下層の川原石群は、池底部で検出した帯状の部分においては、端が弧状を描き岸様を呈していたが、断ち割ったところ基本的には石同士が特に組み合うものでもなく、礫と土と遺物が混入する状況にあった。西岸の斜面にあたかも護岸状に検出された川原石群も同様の状況であった。この検出状況からは、これらの川原石は、元は園池の西岸に築山

Fig.8　ＳＧ14池底の礎石状況

Fig.9　ＳＧ14池底の礎石材

状に造成された庭園意匠に使われたもので、園池廃絶時に削平され池の埋め立てに用いられたものであると想定するのが、最も妥当性が高いと考えられた。埋土は暗褐色系の砂質土が基本である。池底に有機質の堆積は認められなかった。

川原石の検出個数は106個であり、法量的には長辺が30cm以上のものが９個、最大が長辺55cm、大半が長辺15から25cm程度のものである。岩石種としては、灰色系の砂岩が８割、あとはチャート、頁岩、緑色泥岩などである。割石はほとんどない。宇治川河床に見られる川原石と類似する。

以上のような状況から、この園池の眺望視点は東側にあり、池越しに築山、左右に遣水を配置した景観構成であったと考えられる。東岸がＳＤ21の一部を含め直線的であるのは、この直近に岸に並行する建物が存在したことを窺わせる。ただし、現況で確認できている柱穴からは建物復元は難しい。仮にこのような建物を想定した場合、その方位は真北より東へ12度ほど傾くものとなる。

溝ＳＤ04　前述したように、下層遺構のＳＤ49の東肩を誤認して掘削したものである。出土した土器は、本来、範囲内のいずれかの遺構に含まれるものと考えられる。

溝ＳＤ09　ＳＧ14の南に取り付く素掘りの蛇行溝である。幅80cmほど、深さ20cmほどで約７ｍを検出した。溝勾配は２％弱で北下がりである。ＳＧ14の給水用遣水である。

溝ＳＤ21　ＳＧ14の北東角から流れ出す素掘りの溝。５ｍほど北流し、西に折れる。溝幅は80cmほど、西に折れた後に広がっており最大で3.8mほどとなる。深さは20cmほど、勾配は２％ほどで北下がりである。ＳＧ14の排水用遣水である。埋土のところどころに長辺30cmほどの川原石が数個含まれていたが、この石があしらいとして使われていたかどうかは確認できなかった。土師皿、瓦器、青磁の破片など16世紀初頭に比定できる遺物が出土している。

溝ＳＤ31　調査地中央部北壁よりで検出した素掘り溝。溝幅30cmほど、検出長４ｍほどを測る。端がＳＫ30と重なる。溝の方位は真北より西へ51度程度偏しており、ＳＢ101と概ね並行する。遺構の新旧関係としては、ＳＤ21・ＳＫ30より新しい。出土土器から考えて、16世紀前半に比定できる。

溝ＳＤ35　調査地東部北壁よりで検出した素掘り溝。東端はＳＫ46と繋がる。溝の方位は真西から35度5分ほど南に偏する。溝幅50cmほど、長さ６ｍ。12世紀中頃から後半の遺物が出土している。

溝ＳＤ36　調査地東部で検出した素掘り溝。溝幅30cmほどで６ｍ分検出した。深さ10から15cmほどで、方位は真北から40度ほど西に偏す。溝勾配は２％弱、北壁方向に下がる。時期は特定できない。遺構の重複関係は、ＳＤ35より新しくＳＢ101より古い。

溝ＳＤ43　調査地の東北隅部で検出した素掘りの溝。溝幅は1.5から3.5mほど。深さは40から55cmほどで北下がりである。ＳＫ44･45と重複しており、遺構掘削において各遺構の埋土区別が難しかった。ＳＫ45については、ＳＤ43の埋土変化の可能性がある。12世紀末葉ころに比定される土器が出土している。

溝ＳＤ50　調査地西部で検出した素掘り溝。溝幅50cmほど、長さ８ｍほどを検出した。埋土には拳大の礫を多く含んでいた。近世茶畑層と同質同色の埋土であり、近世から明治にかけての茶畑の土地区画に関係する溝と判断できる。溝の方位は真西より52度ほど南に偏している。

Ｃ．井　　戸

井戸ＳＥ25　Ｇ・Ｈ５区で検出した井戸。井戸掘方は直径２ｍ弱の円形を呈し、中央に直径１ｍほどの円形の井筒痕跡を持つ。深さ1.9mほど。井筒痕跡は土層断面において最上層から確認でき、井筒本体の遺存はないが、おそらくは曲物などを使用したものであったと考えられる。掘方は検出面から1.5mのところにある黄色粘土層まで掘り込まれており、そこから下へは井筒部分だけ40cm程度さらに掘り込まれていた。湧水層はこの厚さ15cmほどの黄色粘土層下に存在する黄色砂質土層であり、現

在も湧水が認められる。井筒埋土からは12世紀中頃を中心とする土器が多く出土している。遺物の中には、焼け割れした土器・瓦が比較的多く含まれており、火事場整理時に埋め立てられた可能性が高い。またＳＢ102はＳＥ25の井戸屋形と考えられる。遺構の重複関係はＳＫ22～24の方が古い。

井戸ＳＥ32　Ｈ・Ｉ５区の南壁で検出した素掘り井戸。規模不明。検出範囲での深さ1.2mほど。時期がはっきりしないが、11世紀後半期に比定できる瓦器を含む。焦げ跡を持つ凝灰岩部材が出土している。

井戸ＳＥ52　トレンチ北西角で一部が検出された井戸。深堀りによって平面検出はできておらず、壁の土層断面で掘方を確認した。状況的には、比較的大型の井戸と考えられる。遺物がなく時期不明。

Ｄ．土　坑　ほか

土坑ＳＫ01　Ｃ６区で検出した不定形土坑。白磁、瓦片などが出土している。中世期。

土坑ＳＫ05　Ｃ・Ｄ７区で検出した細長い土坑。わりあいと深く、最深で検出面から50cmほどを測る。調査中はＳＤ05としていた。土師器、瓦器、瓦片が出土している。12世紀末葉ころか。

土坑ＳＫ07　Ｅ７・８区で検出した不正円形の土坑。ＳＤ09によって南辺が削られている。白磁片や瓦片と伴に13世紀に比定できる土師器の皿が比較的まとまって出土している。

土坑ＳＫ10　Ｅ６区で検出した直径1.8mほどの円形土坑。深さ20cmほどの皿状で、埋土中層に黄色粘質土層の堆積が認められた。土師器の皿、白磁、羽釜、瓦片が出土している。遺構の重複関係としては一番新しい。時期不明。

土坑ＳＫ12　Ｅ５区で検出した直径1.8mほどの不整円形土坑。深さ10cm程度。中世期。

土坑ＳＫ16　Ｇ７区の南壁で検出した土坑。規模不明。土師器以外に瓦器、青磁が出土している。13世紀前半。

土坑ＳＫ22・23　ＳＫ22はＧ５区で検出した東西2.4m、東西1.3mの方形土坑。深さ20cmほど。底部に長辺20から30cmほどの川原石が集まっていた。ＳＫ23はその北に接して存在する長方形土坑で、上面には小石が円形状に認められた。埋土の状況から土坑ＳＫ22と23は前者が新しい重複関係にあるものと判断して調査を進めた。しかし、ＳＫ23を掘削したところ、底部にＳＫ22に認められた川原石が続いて存在する状況が検出されたため、基本的に両遺構は一辺２ｍほどの同一遺構であるものと考えられた。ただし、上面の埋土の差異や円形小石範囲の関係が不明であるため、表記上両遺構番号は存続させることとした。上層遺構図はＳＫ23の上面小石を残し、ＳＫ22の底部川原石を検出した状態となっている。15世紀末葉から16世紀に比定できるＳＫ24やＳＤ21よりも新しい遺構である。

土坑ＳＫ29　Ｈ５区で検出した方形土坑。長辺2.2m、短辺1.5m、深さ15cmほど。土師器、瓦器、青磁、瓦が出土している。埋土には炭を含む。13世紀前半に比定できる。

土坑ＳＫ30　Ｇ３・４区で検出した方形土坑。一辺２ｍほどの正方形を呈する。深さ20cmほど。土師器、瓦器、白磁などが出土している。12世紀後半代か。

土坑ＳＫ33　Ｆ・Ｇ３区で検出し長辺2.2mほどの不整円形の土坑。大型の柱穴が重複する。土師器、瓦器、白磁、青磁、瓦が出土している。12世紀末葉から13世紀ころ。

土坑ＳＫ34　Ｇ３・４区で検出し長辺2.2mほどの不整円形の土坑。土師器、瓦器、白磁などが出土している。12世紀前半。

土坑ＳＫ44　Ｊ１・２区で検出した土坑。検出幅2.6mほど、深さ30cmほど。土師器、瓦器、白磁、青磁、瓦などが出土した。12世紀末葉。遺構の重複関係としてはＳＤ43より新しいが、時期的には同じである。

土坑ＳＫ45　Ｉ・Ｊ１区で検出した土坑。ＳＤ43と重複し、実体的にはＳＤ43の一部である可能性がある。底部から土師器皿がまとまって出土した。土師器、瓦器、白磁、青磁、瓦、砥石などが出土

した。時期は12世紀末葉ころ。

土坑ＳＫ46　Ｈ・Ｉ３区で検出した土坑。ＳＤ35と連結する。土師器、瓦器などが出土している。12世紀中頃から後半。

土坑ＳＫ48　Ｉ３区で検出した不整円形の土坑。土師器、瓦器、青磁が出土しており、13世紀前半頃と考えられる。ＳＢ101の柱穴と重複する。時期的な関係ではＳＢ101の方が新しいが、調査では対応する柱穴の土色判別ができないまま掘削している。

土坑ＳＫ51　Ｅ６区で検出した長径75cm、短径50cm、深さ20cmほどの楕円形の土坑。調査時はＥ６区Ｐ30としたが、整理時にＳＫ51に変更した。土坑内には渥美の甕底部が正位置で置かれ、その中に白磁・青磁破片が入っていた。調査では、当初このような埋納に気づかず、磁器の破片をある程度取り上げた後、出土状態の記録を作成することとなった。渥美甕（318）は完形であれば60から70cmほどの丈が想定でき、完形の甕使用であった場合、下半分を埋めた状態に復元できる。この甕の口縁部片は確認できていない。同遺構から出土した甕口縁（319）は別固体である。中に貯められていた磁器等の破片数量は白磁・青磁が70片であり椀・皿16個体分、壺３個体分となる。青磁は椀３個体分であり他は白磁である。他に外面を墨塗りした須恵器の壺が１個体含まれていた。これら破片間の接合は余り進まず、また遺存度合いも全体の50％に至らないものが大半である。

白磁・青磁19個対中の15個体に被熱による釉薬の沸騰が確認できた。この釉薬の溶け出しは破断面においても認められる。明らかに火事などによるものである。これらと同一個体と判断できる破片は、磁器類ではＥ６Ｐ14から10個体が出土し接合している。また渥美甕ではＥ６Ｐ14、Ｅ６Ｐ19、ＳＧ14、包含層から同一個体と判断できる破片が合計17個出土している。このような状況から、12世紀後半から13世紀前半あたりの火事によって焼損した磁器破片を渥美甕に貯めたものがＳＫ51であり、後にこの遺構が破壊された段階でＥ６Ｐ14、Ｅ６Ｐ19、ＳＧ14、包含層などに破片が２次移動したものと考えられる。

Ｅ．河川、自然流路

自然流路ＳＤ49　調査地北西部で検出した河川跡。基盤層の上面で確認できる。唯一の下層遺構。２％勾配の地形にそって東北に流れる。ただし長期にわたって安定的に存在したものとは考えられないため、自然流路とした。西壁の土層で観察すると、流路幅は６ｍほど、深さは40から50cmほどであることが分かる。埋土は基盤層と同質の黄褐色砂質土系のもので、砂礫の包含量が多いため基盤層と見分けがつく。有機質の痕跡は確認できない。古墳時代前期末葉から中期初頭ころの土器は、少し深くなっている南肩沿いで点在して出土した。いずれも完形に近いか大破片で、さほど２次的移動をしているとは考えられない。小型丸底壺(299)は底部に穿孔が認められ、祭祀行為に使われたことが理解できる。ＳＤ49は基本的には古墳時代前期末葉から中期初頭における折居川の旧流路の一部と理解され、当該地付近の扇状地形成の実態を示すものと位置付けられる。

第４節　遺構の時期区分

二つの中心時期　前節で説明した主要遺構の所属時期を柵・建物を除きTab. ２にまとめた。この表から理解できるように、主要遺構の大半はいわゆる中世に所属するものであり、しかも11世紀後半から13世紀中頃と16世紀前後の二時期に峻別されることがわかる。すなわち当該地は、下層遺構で検出した自然流路ＳＤ49から想定できる古墳時代中期までの土地の不安定性を脱却した後、近代に至るまでの間に、上記二時期での際立った集約的土地利用が特徴として指摘できるのであり、この点は、宇

治市街遺跡の特質を考えてゆく上で重要な視点となる。

小型遺構　さて、このような主要な遺構とは違い、上層遺構のうち特に小型遺構に関しては個別時期をそれぞれに特定することは難しい。これは前述したように検出遺構の特徴として柱穴が多く、そこに含まれる遺物量が少ないことに原因がある。しかし、遺構のあり方や含まれる土器片を詳細に観察する中で、おおまかな傾向は読み取ることが可能である。この点について、二つの図を提示する。

奈良以前　Fig. 10は柱穴の出土遺物を悉皆的に観察し、遺物の中に古墳時代後期から奈良時代に相当する遺物が含まれるものを示した図である。目安となった遺物は主に須恵器である。ただし細片が多く、時期特定が難しいものも多い。また、これらの遺構が直ちに当該時期に所属するとも即断はできない。プライマリーなものか混入かを判断する上でも遺物の少なさは影響している。このような点を踏まえた上でも、当該時代の遺物を含む柱穴が50個程度調査地全体に広がっている状況は、基本的にはこの時間幅の中で、一定の生活が営まれていたことは理解できよう。注意すべきは、これら古墳時代後期から奈良時代に所属する可能性がある柱穴を除いた残り530個ほどは、中世期に所属すると考えられることである。主要遺構がそうであるように、柱穴などの小型遺構においても、中世と他の時代とが際立ったコントラストを見せているとしてよい。

根石柱穴　Fig. 11は、柱穴の中に根石持つものを示した図である。根石は、長辺が10から20cm程度の扁平な川原石を用いているのが普通である。柱穴の中には、複数の根石を持つものがあり、建て替えが想定できる。これら根石を持つ柱穴は調査地全体で50個程度が認められ、調査地西部の方がやや規模が大きい傾向がある。建物ＳＢ101の柱穴は、根石を持つものが多い。遺構の重複関係のなかで、ＳＢ101は中世期遺構の中で最も新しく置かれるものであり、この点は中世期柱穴遺構の時期を分けていく上で、一つの目安になるものと考えられる。

Tab. 2　主要遺構時期別一覧表

世紀	井戸	溝、園池	土坑他	流路	備考
4～5	—	—	—	SD49	自然流路
6～7	—	—	D5P16	—	小土坑、柱穴
8～10	—	—	—	—	小土坑、柱穴
11	— — SE32	— — —	— — I1P2	— — —	当紀後半から遺構が顕著となる。SE32に被熱凝灰岩片が含まれる点は注意。
12	— SE25 —	— — SD35.43	SK34 SK46 SK30.33.44.45	— — —	主要遺構の中心時期。SE25に火災痕の遺物が含まれる点は注意。
13	— — —	— — —	SK16.29 SK07.50 —	— — —	当紀中頃を境に急速に無遺構化する。SK50に火災痕の遺物が含まれる点は注意。
14	—	—	—	—	無遺構・無遺物
15	—	—	—	—	無遺構・無遺物
16	— — —	SG14.SD09.21 — —	SK24 — —	— — —	前紀末から当紀前半に遺構。庭園の存在に注意。

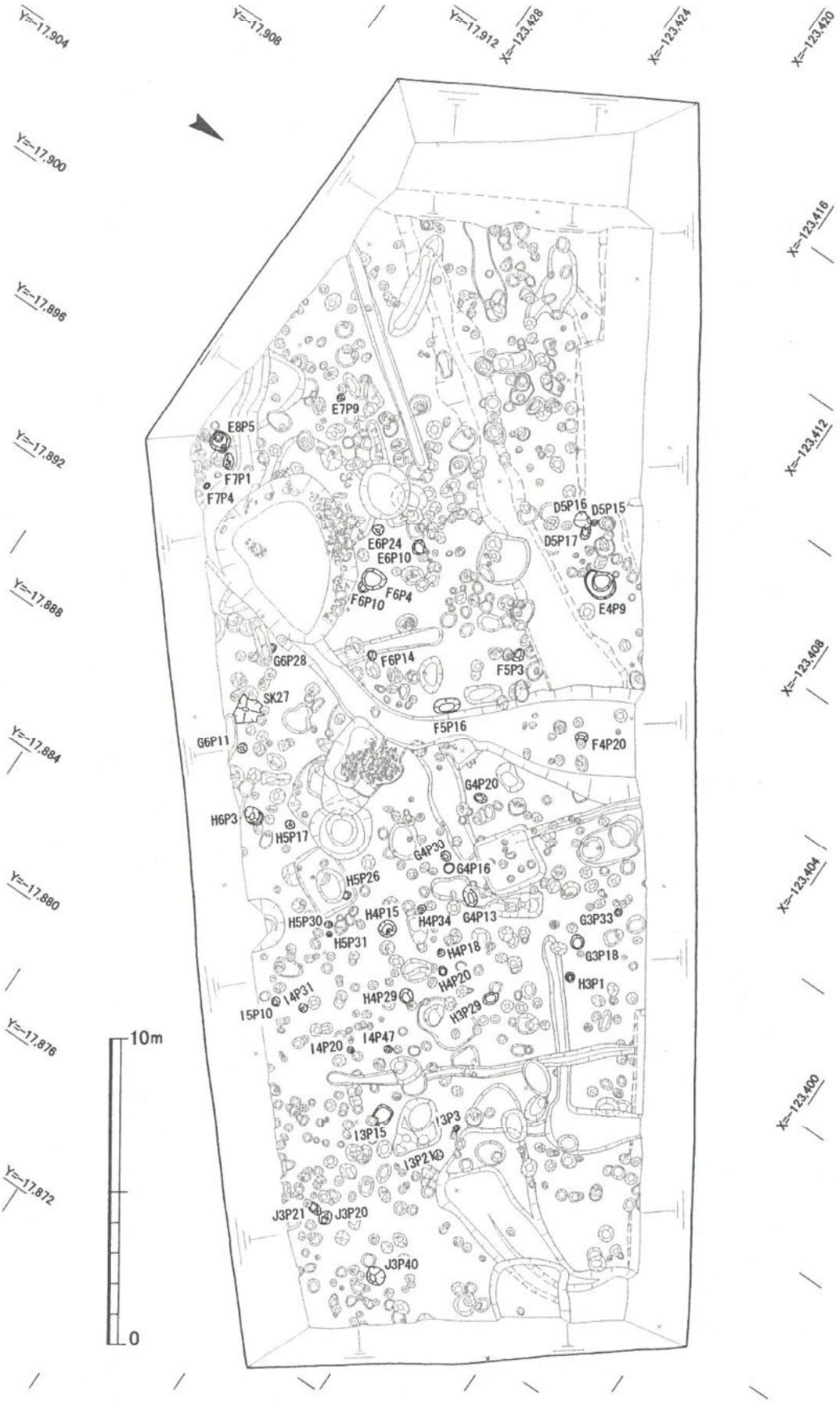


Fig. 10 古墳時代後期～奈良時代の土器出土柱穴

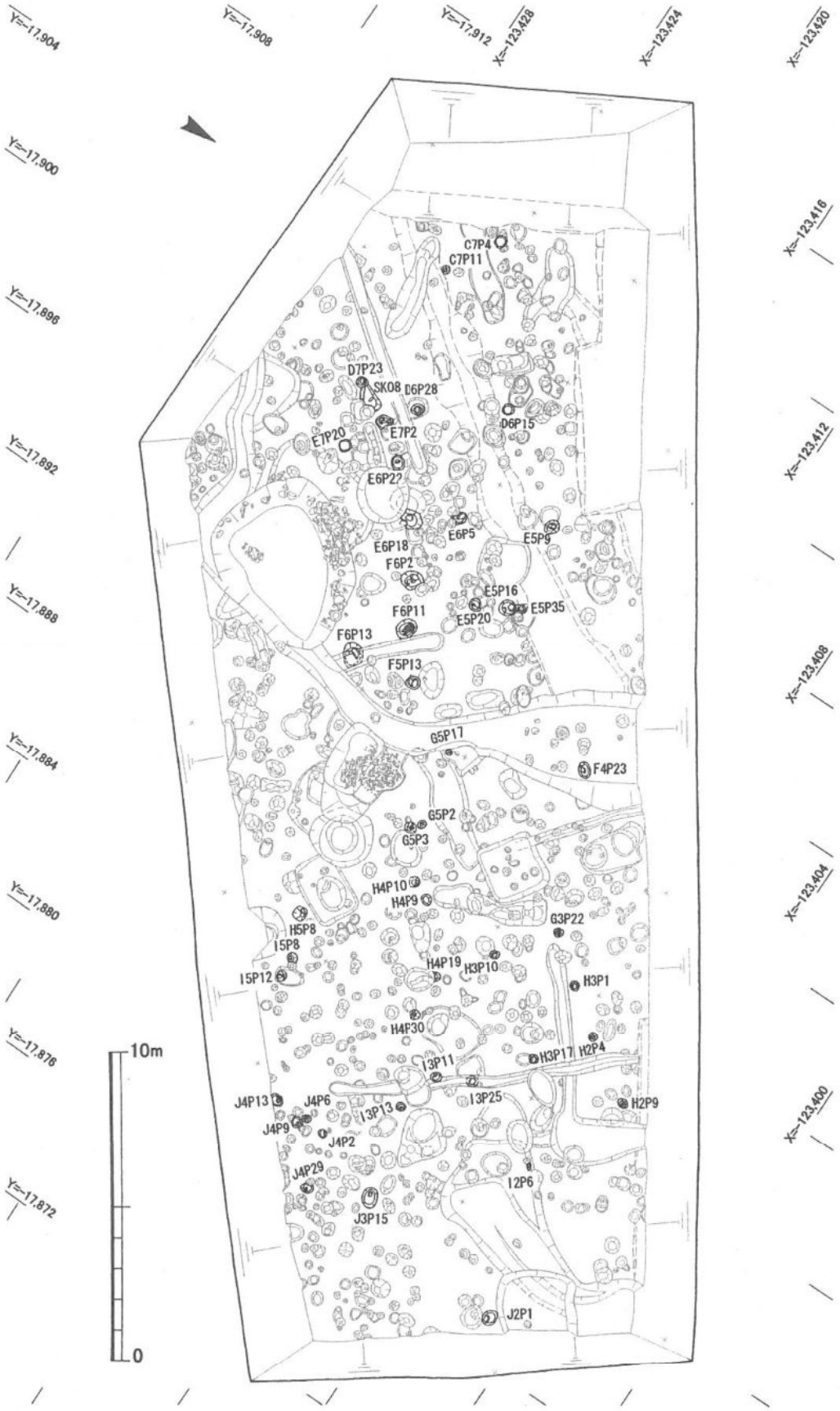


Fig. 11　根石を持つ柱穴

第Ⅳ章　出　土　遺　物

第１節　出土遺物の概要と年代の基準

A．出土遺物の概要

今回の発掘調査で出土した遺物の総量は、出土時点においてコンテナバットに40箱である。種類としては土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、瓦、石製品、鉄製品、その他である。有機質の出土遺物は基本的にない。主体を占めるのは土師器であり、ついで陶器、瓦器、磁器、瓦他の順である。瓦や石製品はコンテナバットに８箱程度である。時代としては中世に所属するものが圧倒的であり、土師器の皿がその中心である。また貿易陶磁器が目立つ点、平等院と同笵瓦の存在は注意に値する。奈良時代以前あるいは近世の遺物はコンテナバットに数箱程度である。

遺物は、園池、井戸、溝などの上層の大型遺構から比較的まとまった量が出土し、それぞれの時期や性格を知るうえで良好な資料群となっている。柱穴や小型土坑では、一部を除き大概が小破片の少量出土であり、その個体の全形推測や時期判定が難しいものが多い。遺物の遺存状態自体は、風化・摩滅などが少なく、全体として製作技法や使用の痕跡をよく残す。

B．報告する遺物の選択

出土土器類の報告書掲載にあたっては、遺構の時期や性格を判断する上で重要なもの、時期的特徴を示すものを基準に選択した。具体的には、園池、井戸、溝などの主要遺構出土土器の提示にあたっては、器種構成に注意しながら時期的特徴を示す遺物を選びだし、椀・皿などの同種同類のものが多数存在する場合は、残存度合いの高い個体を一定数選択し全体を代表させることとした。柱穴や小型土坑では時期的特徴を示しかつ遺存度の高い土器、あるいは希少な器種・器形を選択した。包含層については、古墳時代から奈良時代の土器、磁器類、希少な器種・器形を主体に選び、中世期の土師器皿や瓦器椀などは掲載を控えた。掲載した土器類は413点であり、出土総量の２割から２割５分ほどにあたる。

瓦類は、軒瓦については全点を示し、丸瓦・平瓦については型式別の主要個体示した。石製品は基本的に全点を提示した。鉄製品は鉄鍋を提示し、器形不明の断片・鉄釘は割愛した。

C．中世土器の型式と年代観

宇治地域の中世土器の年代観は、従来から平安京域での土器編年、特に土師器皿（かわらけ）の編年が援用されてきた。これは、宇治と平安京との距離的な近さ、藤原氏と宇治との結びつきの強さなどの土地柄と、現実に宇治で出土する土師器皿が、平安京内のものと類似するという認識からである。しかし、近年の中世考古学の進展は、土師器皿の生産・流通圏はわりあいと小地域に限定されることを明らかにした。すなわち、宇治の中世遺跡の検討にあたっては、地域独自の中世土器編年の構築と、それに基づく遺跡の年代評価が求められるようになってきた。本書ではこの認識に立って、付章に「宇治地域出土の中世土器編年」を提案し、現時点での宇治地域の中世土器を概観するとともに土師器皿の編年を示した。今回の発掘調査した中世遺構の年代は、基本的にこの編年による。また、瓦器椀・皿の型式と年代観ついては中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』1995年 真陽社発行、貿易陶磁器については太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV』「太宰府市の文化財第49集」2000年を参考にした。

第2節　主要出土遺物説明

以下に、主要な出土遺物について、土器類、瓦類、石製品、その他の順で説明する。

A．土　器　類

土器類については、図版に掲げたもののうち、主要なものを選択し遺構単位で説明する。以外はTab. 4出土遺物一覧表にゆずる。

土坑ＳＫ07出土土器（ＰＬ．６）　土師器、瓦器、陶器、磁器などがコンテナに半分ほど出土している。土師器小皿は口縁端部が面取り気味のもの（11・12・17・22・24）と内湾するもの（15・16・18～21・23・25）、外反気味のもの（13・14）とがある。大皿は内湾気味のもの（26・28・29）と二段ナデのもの（27・30・31）とがある。瓦器椀は小破片であるが、大和型第Ⅲ段階Ｂに考えられるもの、楠葉型Ⅲ－３期に相当するものがあり、13世紀に比定できる。磁器では青白磁の薄手の皿（32）が１個体出土している。陶器では東播系鉢の破片がある。

園池ＳＧ14出土土器（ＰＬ．７）　土師器、瓦器、陶器、磁器などがコンテナに２箱ほど出土している。遺構の時期を示す遺物としては土師器皿（63～67）、信楽すり鉢（73・74）、備前すり鉢（72）などがあり、瓦製の香炉（84・85）もこれらと伴出するものである。土師器皿にはへそ皿（63・64）や、薄手で口縁端部を少しつまみ上げ状にするもの（66・67）が存在する。年代的な中心は、15世紀末から16世紀にかけての時期であろう。

信楽すり鉢73は４条単位のすり目を持つもので15世紀後半代に、74は３条単位でそれよりやや古く比定できる。完形に近い状況で出土した、玩具と思われる素焼きのミニュチュア土器（70・71・81～83）も15世紀末から16世紀に比定できよう。土師器皿の一部（68・69）あるいは白磁・青磁・中国陶器（75～80）は12世紀から13世紀のものであり、後述する瓦類と同じく当遺構を埋め立てる際に混入した遺物と考えられる。

溝ＳＤ21出土土器（ＰＬ．６）　土師器、瓦器、磁器などがコンテナに２箱ほどある。土師器皿はＳＧ14のものと類似し、16世紀前葉の特徴を示す。45はロクロ成形の土師器皿であり、同類のものは他遺構を含め５点ほど確認できる。磁器は12世紀から13世紀のものであり、混入遺物である。ＳＧ14出土土器と基本的には同一時期のものである。

井戸ＳＥ25出土土器（ＰＬ．８）　土師器、瓦器、陶器、磁器がコンテナに３箱ほど出土している。土師器小皿は口縁部が外反するもの（116・120）、二段ナデのもの（117～119・121）、ての字形のもの（122）、コースター形のもの（123）など変化に富む。大皿の口縁部は内湾するものが多い。瓦器椀（129）は大和型第Ⅱ段階Ｂに相当し、12世紀中頃の年代が与えられる。磁器類には白磁の皿、椀、壺が総数15点ほど、青磁椀の破片が１点確認できる。白磁椀はⅡ・Ⅳ・Ⅴ類が中心である。

138・141は灰釉陶器の大型の長頸壺である。141は破片化し火を受けており、火事による破損が考えられる。同一破片が周囲の包含層とＳＤ43から出土している。10から11世紀ころのものと考えられ、伝世品であった可能性が高い。ここからは焼けて煤が付着した瓦類（407・416）をはじめ被熱した土器片も散見され、火事あとの整理によってこの井戸が埋められたことが想定できる。

土坑ＳＫ30出土土器（ＰＬ．９）　土師器を主体に、瓦器、磁器などがコンテナに半箱ほど出土している。土師器小皿は口縁が内湾しておさめられるものが多い。大皿には内湾するもの（157）と二段ナデのもの（156・158・159・160）が共伴する。瓦器椀は大和型第Ⅲ段階Ａに相当するもの（162～165）が中心である。166は楠葉型の可能性がある。年代的には12世紀後半に比定できる。磁器は白磁

椀・皿が6点、椀はⅡ・Ⅳ・Ⅴ類が認められる。

溝ＳＤ43出土土器（ＰＬ.10）　土師器、瓦器、陶器、磁器がコンテナに3箱ほど比較的まとまって出土している。土師器小皿は口縁端部を内湾状にするものが基本である。ての字形のもの(211)、コースター形のもの（209・210)、ロクロ成形のもの（237）が少量伴出する。大皿は口縁が内湾するもの(214・221～223)、外反するもの（212・213)、二段ナデのもの（215～218)、面取り気味のもの（219・220）など変化に富む。瓦器椀は235が楠葉型Ⅲ－1期、236が大和型第Ⅲ段階Ａの新相に比定でき、12世紀末葉の年代が与えられる。241・242は大和型の土製羽釜、238・239東播系の須恵器質の鉢であり、年代的に大きな齟齬はない。磁器は白磁椀・皿・壺が計21点、青磁椀が1点である。白磁椀にはⅡ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ類が認められる。

土坑ＳＫ44出土土器（ＰＬ.9）　土師器、瓦器、陶器、磁器がコンテナに1箱半ほど出土している。土師器小皿は口縁端部が内湾するものと、面取り気味のもの（180）とがある。大皿はやや面取り気味である。瓦器椀は186、188、189が大和型第Ⅲ段階Ａ新相に相当し、187は楠葉型Ⅱ－3期に相当する。年代的には12世紀末葉に比定できる。193は東播系の小型の鉢である。磁器は白磁椀のみ6点が出土している。Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類が認められる。

土坑ＳＫ45出土土器（ＰＬ.11）　土師器、瓦器、陶器、磁器がコンテナに3箱ほど出土している。土師器小皿は口縁端部がての字形の退化したもの（267)、内湾するもの（244・246・247・249・250・252・253・254・256・258・260・261・262・264)、面取り気味のもの（245・248・251・255・257・259・263・265・266)、コースター形のもの(243)など変化に富む。大皿は、内湾するもの(269～271・273・275・276)、面取りするもの（272・274・277～280）とがある。瓦器椀は289・290・294が楠葉型Ⅱ－3期に相当し、292・293が同じくⅢ－1期に相当する。291は大和型第Ⅲ段階Ａ新相に相当するものと考える。年代的には12世紀末葉ころに比定できる。磁器は総数19点中白磁壺4点、白磁椀が11点、白磁皿が3点の計18点、青磁の同安系の椀が1点である。白磁椀はⅡ・Ⅳ・Ⅴ類が認められる。

自然流路ＳＤ49（ＰＬ.12）　古墳時代前期末葉から中期初頭の土師器甕が3点、小型丸底壺1点、高杯1点が出土している。301は布留式の甕で、当型式の中でも新相を呈する。300・302は単純くの字の口縁を持つもので、内面を荒くヘラケズリする。共に粗雑な感じがする土器である。299の小型丸底壺は型式的に新しいもので、301と並行関係に想定できる。底部に二つの焼成後穿孔がある。298は高杯の杯部断片である。全体としてさほどの時間差を持つ土器群ではないと考える。

土坑ＳＫ51出土土器（ＰＬ.12）　白磁椀・皿16個体分、壺3個体分、青磁は椀3個体分の計70点の磁器破片、須恵器壺1個体、大甕底部1個体、大甕口縁部14個体が出土している。白磁椀にはⅣ（313）・Ⅴ類（309・314・315）が認められ、白磁皿（303～308）は総てⅣ類である。このうち306～308は、青白磁の薄手輪花皿で、内面見込みと輪花部に白堆線の模様がある。青磁椀は同安系Ⅰ類（311・312）と龍泉・同安系0類と考えられる大碗（310）がある。磁器はいずれも破片化しており、熱を受けて釉が沸騰し肌が荒れているものが多い。

317は大き目の平底を持つ薄手の須恵器壺で、内面にはロクロ水引きの痕を残す。墨状の黒色塗料が漬け掛け風に外面に施される。318は磁器の破片を納入していた大甕で、渥美産と考えられる。319は須恵器系中世陶器の大甕口縁部である。口縁の半分ほどが残り、肩部内面辺りに焦げ痕をとどめる。状況的にこの破片は、おおむねこの状態で、口縁部を下にして五徳がわりに使用されていたものと考えられる。混入品と考えられる。

ＳＫ51の年代については、青磁の同安系Ⅰ類の椀が標識となる12世紀後半を上限とし、遺構が希薄

となる13世紀中頃を下限とすることが妥当性が高い。

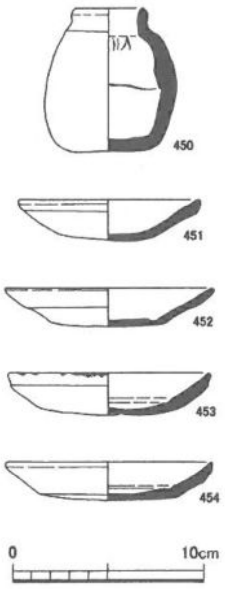


Fig.12　近世土器

各柱穴出土土器（ＰＬ.13・14）　柱穴（小土坑含む）からはコンテナに合計８箱ほどの土器類が出土している。出土の土器類の中で古い時期のものとしては、陶邑ＴＫ217新段階[1]に相当し７世紀中頃の須恵器杯蓋（326）、８世紀段階の須恵器杯（373）があり、須恵器甕の329もこの頃と考えられる。330は大和型土馬の首部破片であり、ナデで鞍表現をする。８世紀前半に比定できる。土馬はこの他にＥ４Ｐ９と包含層から別個体同士の足が４本出土している。

ついで見られるのが、黒色土器や瓦器椀の古い一群である。348は黒色土器Ａ、354は黒色土器Ｂであるが時期的には10世紀後半代に想定できる。364は須恵器の椀であり、ほぼ同時期であろう。365も黒色土器Ｂであり、11世紀中葉ころと考えられる。瓦器椀では、335と339が楠葉型Ⅰ－２期、357が大和型第Ⅰ段階Ｂに相当し、11世紀後半の年代が与えられる。また、349が楠葉型Ⅰ－３期、341が楠葉型Ⅱ－１期、376が楠葉型Ⅱ－２期に相当し、12世紀中葉から13世紀にかけての年代幅におさまるものである。土師器皿や輸入磁器などを見ても、12世紀代から13世紀前半ごろにおさまるものが多く、11世紀代のものはさほど多いとはいえない。Ⅰ１Ｐ２の土師器小皿（367～372）は11世紀後半ころに年代比定できよう。

包含層出土土器（ＰＬ.14・Fig.12）　包含層出土土器の中で古いものは、陶邑ＴＫ209の新相に比定できる須恵器杯の400・401であり、６世紀末葉の年代が考えられる。同型式の個体は他に４個体ほどある。403は７世紀末葉から８世紀前葉の須恵器杯、402は８世紀代の同じく杯である。このころの遺物は、細片を含めると整理箱１箱程度はある。381から397は輸入磁器の破片であり、圧倒的に白磁が多い。405は瓦器のすり鉢、406は瓦器の茶釜である。後者は胎土が精良で、把手には鉄輪の錆が残る。16世紀ころのものである。450から454（Fig.12）は近世茶畑の耕作土から出土したもので、17世紀ころの焼塩壺（450）と17世紀から18世紀にかけての土師器皿である。

Ｂ．瓦　類

瓦類としては、軒瓦、丸瓦、平瓦などがある。瓦の遺存状態は全体に破片化が進んでいる。以下に種類別の概要を説明する。また、平等院と同笵のものがあれば、その型式[2]を示しつつ説明する。なお軒平瓦についてはTab. 5に型式別出土一覧を示した。

軒　瓦（ＰＬ.15）　軒平瓦が６点、軒丸瓦が１点出土している。ただし軒丸瓦は瓦当が脱落した丸瓦部である。軒平瓦407はＳＥ25から出土したもので残りがよい。平安後期南都系で薬師寺[3]に同笵がある。火を受けている。408は平安後期河内向山系のもので、平等院ＮＨ059とおそらく同笵である。包含層からの出土で破片化が進んでいる。２次的に焼けている。409は平安後期河内向山系のもので、下居遺跡[4]に同笵、白川金色院[5]に同文（平等院ＮＨ056型式）がある。ＳＧ14から出土した。煤が付着している。410は平安後期河内向山系のもので、平等院ＮＨ057と同文である。ＳＫ44から出土したもので、２次的な火を受けた変色が見られる。411は平安後期河内向山系のもので、平等院ＮＨ063と同笵である。平等院出土例より笵傷が進行している。包含層より出土。412は近世のものである。412

1　平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群Ⅰ』1966年。
2　宗教法人平等院『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書』2003年。
3　奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第45冊　1987年。
4　宇治市教育委員会「下居遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第35集　1996年。
5　宇治市教育委員会『白川金色院跡発掘調査報告書』宇治市文化財調査報告第６冊　2003年。

を除き、他の軒平瓦は11世紀末葉から12世紀前葉に年代比定できるもので、多くが平等院と同笵・同文関係にある点、２次的な火を受けた痕跡が認められることを注意点として指摘する。

平　瓦（ＰＬ.15・16）　平瓦は147点出土しており、凸面の成形・調整痕跡によってＡ～Ｅの５型式に分類できる。平瓦Ａは長辺に並行する縄タタキを持つもので、縄タタキの密度によってさらに５～７／cmのＡａ（413～415）、３～４／cmのＡｂ（416・417）、１～２／cmのＡｃ（418）に細分類できる。出土片数は88点であり平瓦全体の55％を占める。詳細はＡａが52点、Ａｂが32点、Ａｃが４点である。ＡａとＡｂの一部については、作り方と胎土からみて平安後期河内向山系のものと判断できる。平瓦Ｂは幾何学系の文様のもので、格子状のＢａ（420）、波状のＢｂ（421）、粗い格子状のＢｃ（422）、有芯格子状のＢｄ（419）、平行タタキのＢｅ（423）に細分できる。出土片数は11点で、Ｂａが５点、Ｂｂが３点、他は３点である。いずれも平安後期から中世前期に所属すると考えられる。Ｂａ・Ｂｂ・Ｂｄは平等院に類例がある。平瓦Ｃは離れ砂を使用するもの（424）で、６点出土している。平瓦Ｄは凸面をナデ調整するもの（426・427）で、39点が出土している。この型式に関しては、軒平瓦の平瓦凸面にはナデ調整をするものがあるため、破片では区別ができない認定上の限界がある。所属年代についてはTab. ５からも分かるように、ＳＧ14、ＳＤ21、ＳＫ22・23のような16世紀初頭期の遺構から集中出土しており、中世後半に比定できるものが当型式の基本であることを示している。平瓦Ｅは糸切り痕跡を明瞭にとどめるもので（425）、３点が出土している。なお、平瓦Ａ～Ｃ型式ではほぼ半数、平瓦Ｄでは７割ほどに煤付着や変色などの焼損の痕跡が認められる。

丸　瓦（ＰＬ.16）　丸瓦は57点あり、確認できるうえでは総て玉縁式である。全体として破片度合いは高い。凸面の調整により、縄タタキを残す丸瓦Ａ(428)、縄タタキの後にナデ調整する丸瓦Ｂ(429・431)、ナデ調整の丸瓦Ｃ（430）に分類できる。型式別出土点数はＡが２点、Ｂが18点、Ｃが37点である。丸瓦Ｂ・Ｃは平瓦Ｄと同じく、軒丸瓦の丸瓦部にはナデ調整が多用されるため、破片では型式認定上の限界がある。丸瓦Ｃの出土場所を見ると、平瓦Ｄと同じ傾向が読み取れ、この型式には中世後半期に所属するものが比較的多く含まれていることが理解できる。全体の約半数ほどに煤付着や変色などの焼損の痕跡が認められる。

不明瓦（ＰＬ.16）　用途が不明な道具瓦が２点出土している。432は瓦塼状の破片である。433は円形のレリーフを持つ板状の瓦である。後者は二枚の粘土板を合わせて厚みを出していることが、剥離痕跡から理解できる。あるいは組合式の獅子口の部分かとも考えられる。

Ｃ．石製品・鉄製品など

砥　石（ＰＬ.17）　砥石が８点ほど出土している。形態的には自然石を利用したもの（434～437・440・441）と方柱状に加工されているもの（438・439）がある。使用石材は砂岩を中心に泥岩・頁岩・チャートがある。目の細かさから、荒砥（434・437・441）・中砥（438）・仕上砥（435・436・439・440）に分別できる。

石　鍋（ＰＬ.17）　滑石製の石鍋破片（442～444）が５点ほど出土している。444は石鍋破片を再利用して模様を刻んだものである。他に破片を切断した痕跡を残すものもある。

鉄　鍋（ＰＬ.17）　449は鉄鍋の破片である。鉄鍋かと思われる断片は、他にＳＤ31からも出土している。今回の発掘調査地では、土製・瓦製の鍋・羽釜の出土は少なかった。その理由の一端は、このような鉄鍋の存在に求められるだろう。

硯（ＰＬ.17）　硯が２点出土している。445は平瓦Ａｃ型式を転用した瓦硯の破片である。凹面に墨が付着する。中世後半に所属するＳＤ31から出土。446は頁岩製の石硯であり、堤をもたず板状を呈する。片辺寄りに円形の海をもつ。表面に墨が付着する。包含層出土。

凝灰岩部材（ＰＬ.17） 二上山産と考えられる凝灰岩部材片が出土している。447・448はＳＥ32から出土したもので、六角柱状部材の破断片と考えられる。包含層中にも凝灰岩の小破片が散見された。

壁　土(Fig.13・14) 焼けた壁土が出土している。上塗の破片が10点ほど、中塗が30点ほどである。上塗は厚さ８㎜ていどの板状のもので、片面には塗りの痕跡や漆喰を残し、片面には中塗の圧痕を残す。中塗は大小様々な塊となっておりスサの痕を残す。一部に小舞の痕をとどめるものもある。瓦土が一部含まれている可能性は否定できない。

Fig.13　焼けた壁土（上塗）

Fig.14　焼けた壁土（中塗）

第Ⅴ章　考　　察

第１節　遺物からみた上層遺構の特色

すでに述べてきたとおり、今回の発掘調査地では、11世紀後半から13世紀前半と16世紀前５の二時期に遺構・遺物が集中する特徴がある。すなわち平安時代後期から鎌倉時代前期と室町時代後期という時代において、当該地が居住地として積極利用されていたのであり、この特色を貿易陶磁器と瓦のあり方から垣間見ることとしたい。

Ａ．貿易陶磁器

白磁の優勢　今回の調査地の特徴は、貿易陶磁器類が多いことである。井戸や土坑から状態の良い個体が出土したわけではないが、調査地の全体からこれらの破片が出土している。出土分布状態については、Fig. 16に示したとおりである。貿易陶磁器のうち、大半を占める磁器については総てカウントしており、総数は373点を数える。白磁と青磁の比率は９対１ほどであり、圧倒的に白磁が優勢である。

白磁の構成　白磁331点の器形別内訳としては、椀・皿が９割以上を占め、ついで壺が９％となっている。壺の存在は比率的に決して低くはない。椀･皿の型式別内訳としては、椀では出土点数215点のうちⅡ・Ⅳ・Ⅴ類が主要型式で７割を占め、皿では78点中主要型式Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ類で８割を占める。このような白磁椀・皿の型式構成は、大宰府での貿易陶磁器の編年における11世紀後葉から12世紀中葉の標識群と同じである。

青磁の構成　青磁は42点のうち35点が椀であり、壺・皿は数点である。椀の型式では龍泉窯系Ⅰ・Ⅱ類、同安窯系Ⅰ類とで型式認定が可能な個体の６割を占める。これらは前述編年の12世紀後半の標識群である。龍泉窯系Ⅲ類が３点ほど出土しており、一応青磁では13世紀前葉ころまでの標識群がそろっている。ＳＧ14からはヘラで簡単な蓮弁を刻んだ青磁椀が出土している。これらが中世後期に相当するものであるが、このころの青磁を型式不明青磁破片から析出することは難しい。ただ、Fig. 16を見ると、ＳＧ14辺りに青磁がやや集中する傾向が認められるのは、これら16世紀前後の遺構の集中と連動していると読み取れる可能性があろう。

白磁の日常使用　以上のように、今回出土した貿易陶磁器のほとんどが、遺構や他の遺物の上から

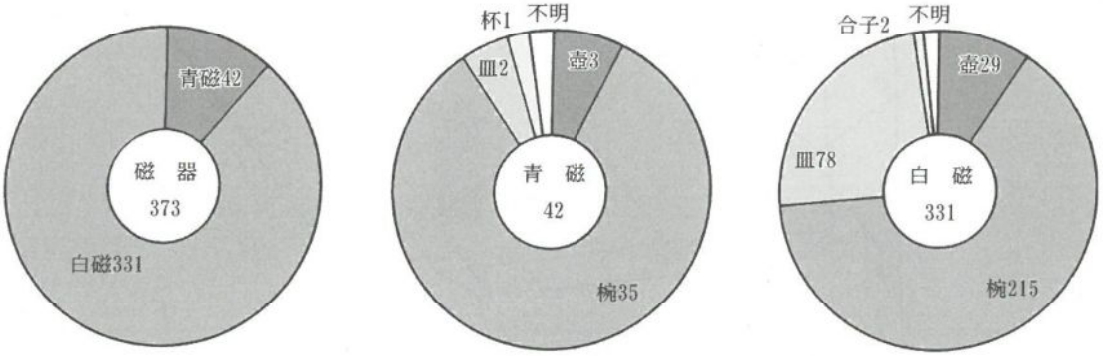


Fig.15　貿易陶磁器の割合

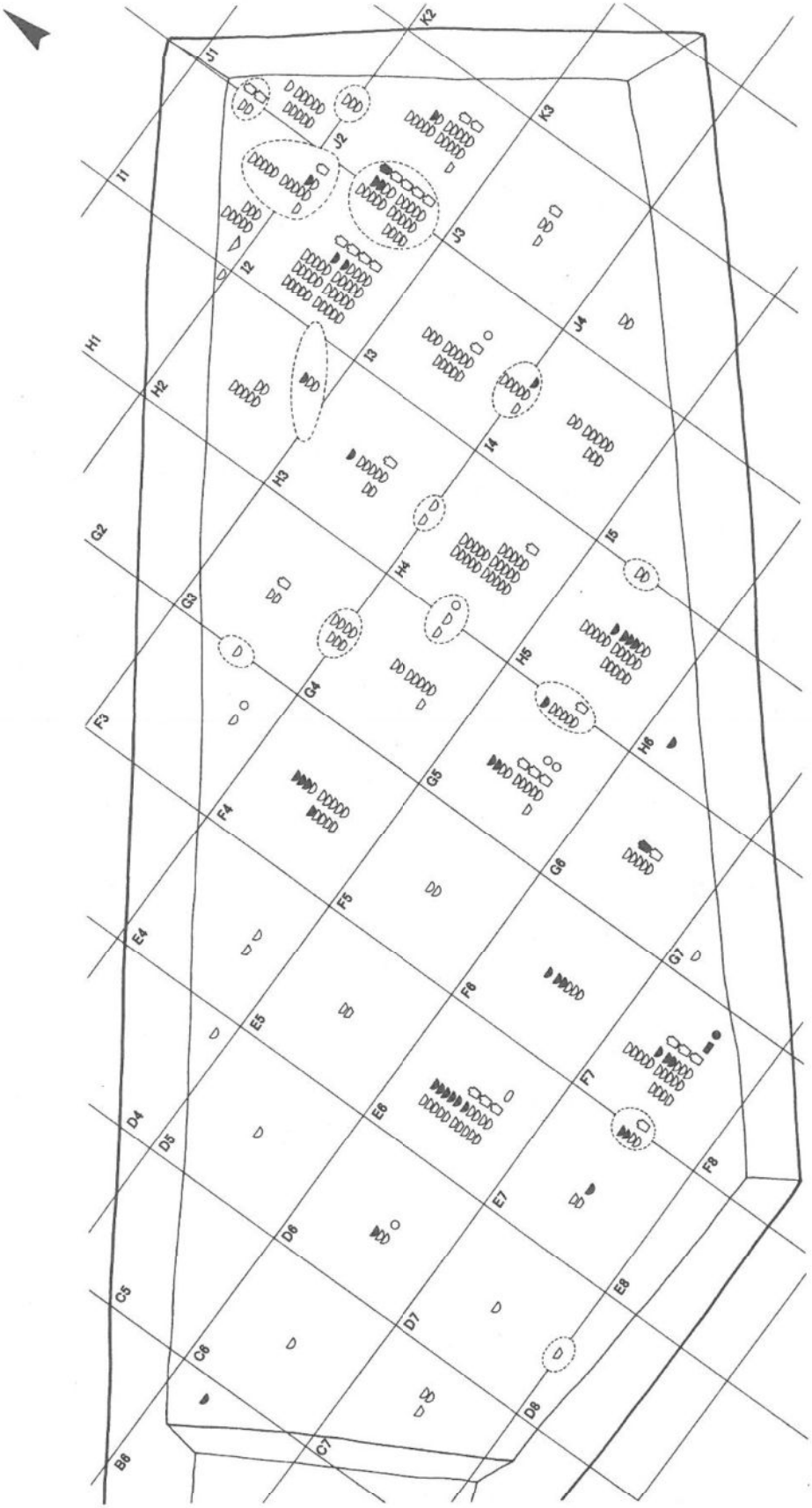


Fig.16　貿易陶磁器器形別出土分布図

も一つのピークとして指摘できる11世紀後半から13世紀前半に納まるものであることが理解できる。

白磁の質は、壺やおそらく水注と考えられる破片、あるいは青白磁の皿などに薄手で釉調が美しい高級品が含まれるが、全体としては一般的な品質にある貿易陶磁器であり、特に多数の白磁椀・皿類の存在は、これらが日常的に使用されていたことを窺わせる。

B．瓦と壁土

檜皮葺棟甍　今回、平安後期から中世に至る瓦が、少なからず出土している。量的に見れば、総瓦葺建物ではなく、部分的な瓦使用建物を想定できる。いわゆる棟甍である。Fig. 17に「慕帰絵詞」北野社の場面に描かれた棟甍を示した。中世の絵画資料を見ると、当時の住宅建築の屋根には一般的に板葺と檜皮葺とが見られる。この中で棟甍は檜皮葺と組み合って表現され、板葺に棟甍が組み合う例は認められない。すなわち今回出土した瓦の評価は、大枠として檜皮葺を用いる邸宅などの格の高い建物の存在を示すものとみてよいだろう。Fig18・19に瓦と壁土の出土分布状況を示した。この図を基に状況を整理する。

平等院と同じ瓦の平安期邸宅　瓦は調査地全域の主要遺構から出土しているが、Tab. 5からも分かるように比較的まとまって出土している遺構は、ＳＧ14・ＳＤ21・ＳＫ22・ＳＫ23・ＳＫ24・ＳＥ25・ＳＤ43・ＳＫ45に限られる。このうち、16世紀に下るものを除き12世紀中ごろのＳＥ25と13世紀前半のＳＤ43・ＳＫ45出土の平瓦型式組成は、基本的には平瓦ＡａとＡｂを主体に少量の平瓦Ｂあるいは平瓦Ａｃが伴うものとなっている。平瓦ＡａとＡｂは技法と胎土から河内向山系としてよいもので、平瓦Ａｃは南都系の可能性が高い。すなわち、平安後期の特色として河内向山系の主用が挙げられる。これら河内向山系平瓦のより具体的な時期については、他の遺構出土であるが408から411の河内向山系軒平瓦の年代観をあてるのが適当である。

河内向山系の瓦は、大阪府八尾市の向山瓦窯跡及びその周辺で生産されたもので、宇治地域に多量にもたらされている。向山瓦窯跡近くには、平等院の基幹的荘園である玉櫛荘があり、河内向山系の瓦の生産にはこの荘園が深く関与したことが想定[1]されている。河内向山系瓦の分類と年代比定につ

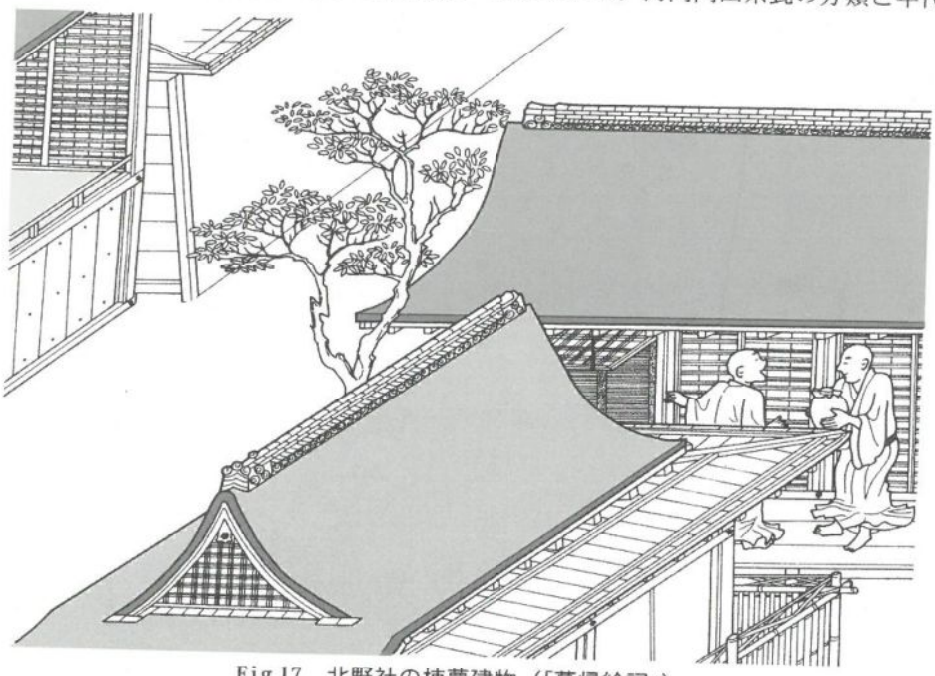


Fig.17　北野社の棟甍建物（「慕帰絵詞」）

1　杉本宏「平等院古瓦の新相－河内系軒瓦の様相・年代・背景－」『平安京歴史研究－杉山信三先生米寿記念論文集』1993。

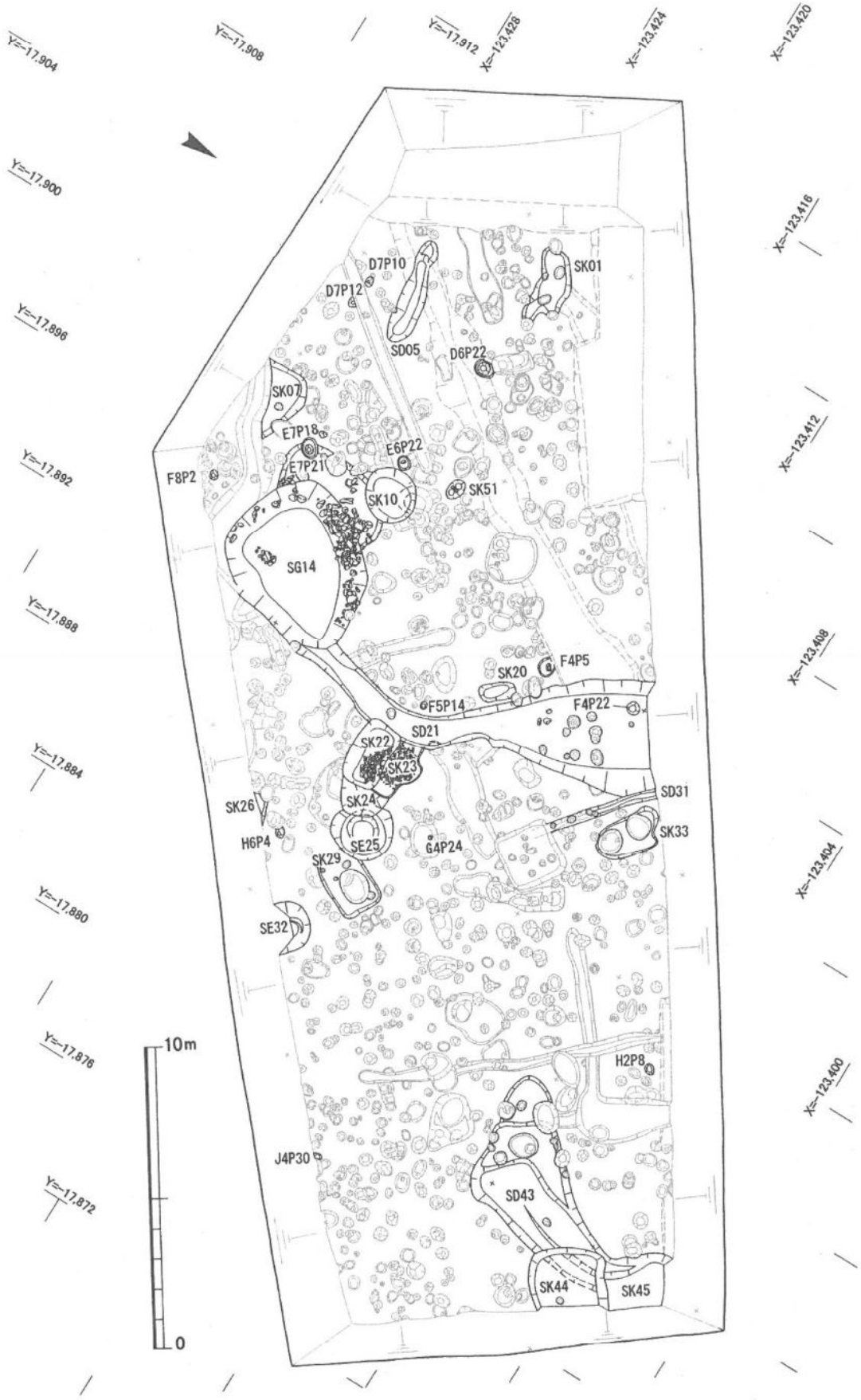


Fig.18　瓦を出土した遺構

Fig.19　焼けた壁土を出土した遺構

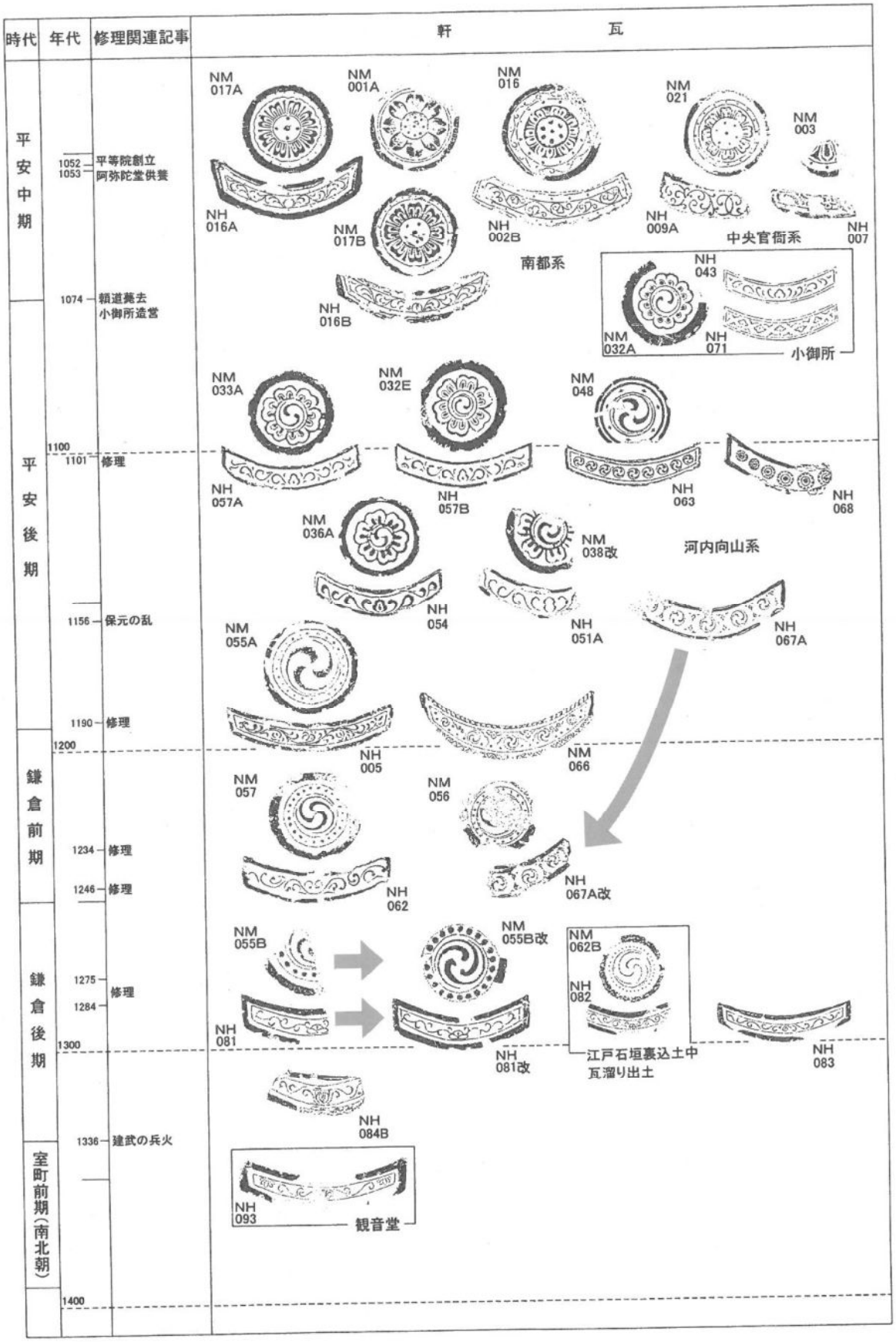


Fig.20　平等院軒瓦編年

いては、平等院出土例[1]を基に詳しく行われており、その編年の一部をFig. 20に示した。

平等院おける河内向山系の出現は、1080年ころに建てられた小御所である。その創建瓦であるＮＨ043・ＮＨ071のように、古い段階の河内向山系軒平瓦当には圏線をめぐらす特徴がある。また無圏線化するのは、この河内向山系を用いて大規模に鳳凰堂の修理が行われた12世紀初頭あたりからで、ＮＨ057系列はその初期のものであることが理解できる。この変化を踏まえて本発掘調査出土例を見れば、年代の上限は11世紀後半、下限は12世紀初頭あたりがまずはその範囲であることとなる。

掘立柱建物ＳＢ103がそうであるか否かは別として、笵傷からみればさらに11世紀末葉から12世紀前葉あたりに比定できる河内向山系瓦を棟甍に用いた邸宅建物が、当該地に建てられたことは間違いがなく、その建物には漆喰が塗られた壁が用いられていたことも、焼けた壁土の出土から理解できる。この建物（群）はまず12世紀中ごろに火災によって焼失したものがあり、さらに13世紀前半にも焼失したものがあることも、先の遺構の年代から理解できる。

園池に臨む室町期邸宅　ＳＧ14・ＳＤ21・ＳＫ22・ＳＫ23・ＳＫ24などの16世紀初頭の遺構からも、まとまって瓦が出土している。特にＳＧ14は遺構の大きさもあって、瓦全体の４分の１ほどがここからの出土である。ＳＧ14出土の平瓦は、型式的には平瓦Ａと平瓦Ｄが主体であるが、前者は当遺構の埋め立て時に混入したものであり、基本的には平瓦Ｄが当該時期のものとなる。ＳＤ21・ＳＫ22・ＳＫ23・ＳＫ24なども同様な状況である。平瓦Ｄの出土傾向からすれば、この瓦を用いた邸宅建物は園池ＳＧ14の近くに建てられていたことはほぼ間違いなく、ＳＧ14の直線的な東辺を評価すれば、まさにこの岸に沿って建物を想定すべきであろう。

棟甍は通例、最下段に装飾の軒瓦を用いる。この手法は絵画資料でも確認できるし、現在の棟甍でも同様である。前述した平安後期の軒瓦については、基本的にこの枠組みの中で使用を認識している。ただし、平瓦Ｄを用いた棟甍については、このような装飾は用いていないと考えられる。平瓦Ｄと組み合う軒瓦が出土しないのは偶然ではなく、軒瓦の使用比率が総瓦に比べて圧倒的に高い棟甍においては、やはり必然と認識すべきである。この邸宅建物が、火災で焼失したことは瓦の状態から間違いはない。しかし、ＳＧ14･ＳＤ21から焼けた壁土は出土していない。前述の平安後期の建物とは違い、この室町期宅は土壁が少ない建物であった可能性が考えられる。

第２節　遺　構　の　変　遷

今回検出した遺構について、その変遷（Fig. 21）を以下に整理する。

Ａ．古墳時代中期

中宇治の扇状地形　Fig. 23に示した地形略図の等高線の動きをみれば、中宇治地区の平地部の地形は、一つは東側の塔ノ川、もう一つは西の折居川が形成した二つの小扇状地が基本となっていることが理解できる。現在、この２本の小河川は、それぞれ谷口で東あるいは西に急激に流れを変えており、中宇治の平野に流れ込んではいない。現在の中宇治は、丘陵部から流れ出る小河川による扇状地形を基本としながら、これらの小河川による被害を被らない、いわば安定した土地となっている。このような扇状地形成がいつごろ終息し、現在に至る安定した土地利用が可能となったかについて、今回の発掘調査成果は、一つの答えを導き出すこととなった。

折居川扇状地と集落　下層遺構面で検出した自然流路ＳＤ49が、当該地の基盤層を形成した折居川

1　宗教法人平等院『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書』2003年。

の自然流路の一部と考えられるのは、Fig. 23の等高線から明らかなように当調査地が折居川扇状地の中央あたりに該当することによる。出土土器から考えて、この流路は古墳時代前期末葉から中期初頭かけてのものであり、浅く不定形な流れとして地形に合わせて流下している。埋土には有機質の痕跡が認められず、基盤層と同じ砂質土である。すなわち、このころは折居川が扇状地中央を流れ扇状地形成を行っていたのであり、この自然運動によって扇状地形中央部周辺には植生の生育が阻まれていたと想定することが可能である。ただし、折居川自体は小河川であり、その存在そのものが直ちに人の生活を阻害するものでないことは明らかである。流路内から出土した土器の残存状態を踏まえれば、付近に人の生活を想定できる。折居川扇状地を望むように築造された宇治丸山古墳の存在も、この付近に当該期集落の存在を予測させる。この集落遺構の発見は今後の課題である。注意したいのは人の生活の可否ではなく、流れの定まらない自然河川は、長期的安定的な土地利用については大きな障害用件であることである。

扇状地形成の終息　もう一つの小河川である塔ノ川については、縄文時代後期後半あるいは弥生時代後期以降には扇状地形成を終え、現在の流路に安定した可能性が周辺の発掘調査成果[1]から考えられる。折居川扇状地形成終息は、後述のように古墳時代後期のことと考えられ、これによって中宇治の地形的な安定は達成されたこととなる。このような流路の変更と安定化が、自然現象なのか人為なのかについては、今後究明すべき課題の一つとなろう。

B．古墳時代後期から平安時代前期

安定した集落形成のはじまり　上層遺構の成立が具体的にいつなのかについては、当該期は小型の遺構が多くなかなか確定が難しい。遺物から見ると、古墳時代中期以降、一定の遺物量が確認できるようになるのは陶邑ＴＫ209型式あたりで、年代的には６世紀末葉ころに比定できる。

これ以降９世紀あたりまで、遺物的には断片的ではあるものの連続しており、当該地で安定した集落形成が可能となったのは、古墳時代後期も末葉になってからであったと考えられる。上層遺構の基盤土は有機質によりその上部は褐色化しており、耕作や自然植生の影響を見て取れる。この時期、遺構・遺物の上で際立った特徴はない。全体として散在的な集落イメージが思い浮かぶ。

C．平安時代後期から鎌倉時代初期

藤原氏関係邸宅の成立　邸宅の成立を特徴とする、今回の発掘調査の中心的な時期である。前節で述べたとおり、瓦の分析から想定できる邸宅建物は、平等院と同笵の河内向山系の瓦を用いた檜皮葺棟甍であり、その建築時期は11世紀末葉から12世紀初頭と考えられる。

ちょうどこのころは、平等院では藤氏長者に着任して間もない藤原忠実が鳳凰堂の修理を沙汰しており、宇治の南の谷里白川には、藤原頼通の娘で後冷泉天皇皇后であった寛子の創建と伝える白川金色院が建立された時期にあたる。河内向山系の瓦は、これら藤原摂関家と関係深い寺院の造営に顕著に使用されており、単に平等院領玉櫛荘がこの瓦生産に関与したという以上に、藤原摂関家との強い関係をうかがわせる特徴ある遺物[2]となっている。

宇治市街遺跡においても河内向山系は従前から散見されており、記録にある小川殿・小松殿・西殿などをはじめとする、12世紀の藤原氏別業との関係を想定[3]してきた。今回、具体的建築遺構との対

1　宗教法人平等院『平等院境内発掘調査報告書』2000年。
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター「平等院旧境内遺跡・宇治市街遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第95冊　2000年。
2　杉本宏「仮想浄土としての鳳凰堂と庭園」『国宝と歴史の旅６　地獄と極楽－イメージとしての他界－』朝日新聞社　2000年。
3　杉本宏「宇治橋架橋位置変更と宇治街区の成立」『平等院旧境内多宝塔推定地第１次発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概要第24集　宇治市教育委員会　1994年。

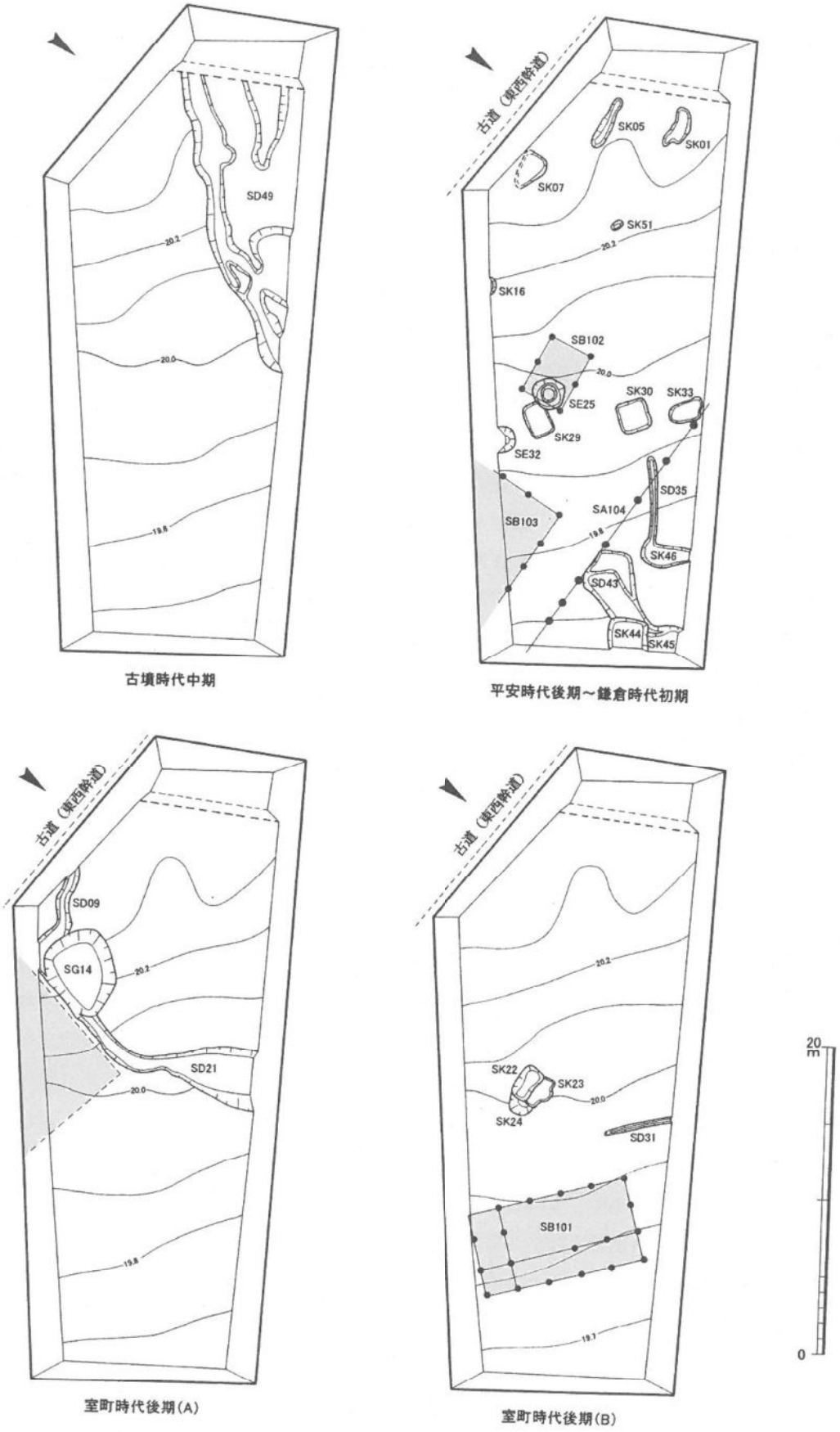


Fig.21 遺構変遷略図

応関係は明らかにしえなかったが、当該期遺構の調査地内での展開状況、顕著な貿易陶磁器の存在、そして当該期遺物の集中からして、河内向山系の瓦が「邸宅」という性格とこの調査地で関係しあっていることは明白であり、中宇治に眠る藤原氏別業の実態に曲がりなりにも手が届いたことは大きな成果の一つである。

方位に合う建物　当該期の具体的な建築遺構としては、井戸屋形のＳＢ102、建物ＳＢ103、柵ＳＡ104の３棟を析出できた。ただし、残る多数の柱穴には、幾棟もの当該期建物が未析出のままうずもれていることは間違いがないだろう。まずこれら３棟の特色として指摘できるのは、いずれも建て方位が正方位に概ね合うことである。等高線を見れば分かるように、当該地は北東下がりの自然地形であり、この地形勾配に逆らった方位設定には、やはり正方位の計画的な地割設定を予測し、これに沿った造営行為とみるのが適当であろう。この方位問題に関しては後述する。

古道と柵と井戸　当該調査地が邸宅の一部であることは、かなりの蓋然性を持って指摘できたとしても、今回の調査成果だけでは全体の様相を推測することは難しい。しかし次の２点は注意しておきたい。まず、調査地の南に接して東西方位の古道（東西幹道）が存在することである。この古道が11世紀後半から12世紀まで遡ることは、ＪＲ宇治駅を挟んだ反対側の発掘調査[1]で過去に確認している。すなわち、古道とＳＡ104との間には、幅22～23mの東西に細長い区画が存在していることになり、ＳＥ25やＳＥ32などの当該期の井戸は、いずれもこの区画内に構築されていることとなる。状況的に邸宅中心は、ＳＡ104より北側に想定すべきであろう。

もう一つは、出土遺物で見る限り、11世紀後半代から13世紀中頃にいたるまで、この邸宅は連綿と存続していたと考えられることである。すでに報告したとおり、瓦や土器には強く熱を受けた痕跡を残すものがわりあいと存在し、この時間の中で幾度かの火事に見舞われていることは明らかである。これらの火事痕跡を顕著に認めながらも、遺構や遺物の時期と種類には断絶がない。羅災しながらもその度ごとに直ちに再建され、この邸宅の機能は維持され続けたと見るべきであろう。当該時期の遺構密度の高さは、これらの状況が反映している可能性はある。出現・廃絶の唐突さと存続の有様とが強いコントラストを見せている。

Ｄ．鎌倉時代中期から室町時代中期

遺構・遺物の希薄時期　13世紀中葉以降、当該調査地では遺構・遺物がほとんど見られなくなる。この状態は15世紀末葉まで続く。いわば、11世紀末葉以来の邸宅が廃絶した後、当該地は荒地化した可能性がある。宇治市街遺跡全体としてみても、それまでとは変わって一転して遺物量が少なくなっていることは、過去の発掘調査実績を瞥見しても事実であろう。この中世後退期の実相は、今後とも注意してゆく必要がある。

Ｅ．室町時代後期

庭園のある邸宅（Ａ期）　遺構・遺物の上で中世期におけるもう一つのピークは15世紀末葉から16世紀初頭にかけての時期であり、基本となるのは園池ＳＧ14と遣水のＳＤ09・21を伴う邸宅である。邸宅建築遺構そのものは析出できなかったが、ＳＧ14の東辺に沿って建物を想定すべきことはすでに指摘したとおりである。瓦の分析で示したように、この邸宅建物は檜皮葺棟甍であったとみてよい。建物近くに小さな園池を配し、池の建物対岸に築山が構えられている様子は、Fig. 22に書き起こしを示した「慕帰絵詞」の一場面[2]を彷彿とさせるものがある。園池ＳＧ14東岸の方向とそれに対応して構

1　宇治市教育委員会『宇治市街遺跡発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概要第44集　1999年。
2　「慕帰絵詞」は本願寺３世覚如の生涯を描いたもので、観応２年（1351）に製作された。この場面は、堪解由小路中納言宗昭の誕生の場面で、京内の貴族の邸宅が描かれている。本来は広大であろう庭園はデフォルメされ狭い空間に描かれるが、かえってそのことがＳＧ14のイメージに近づけている。

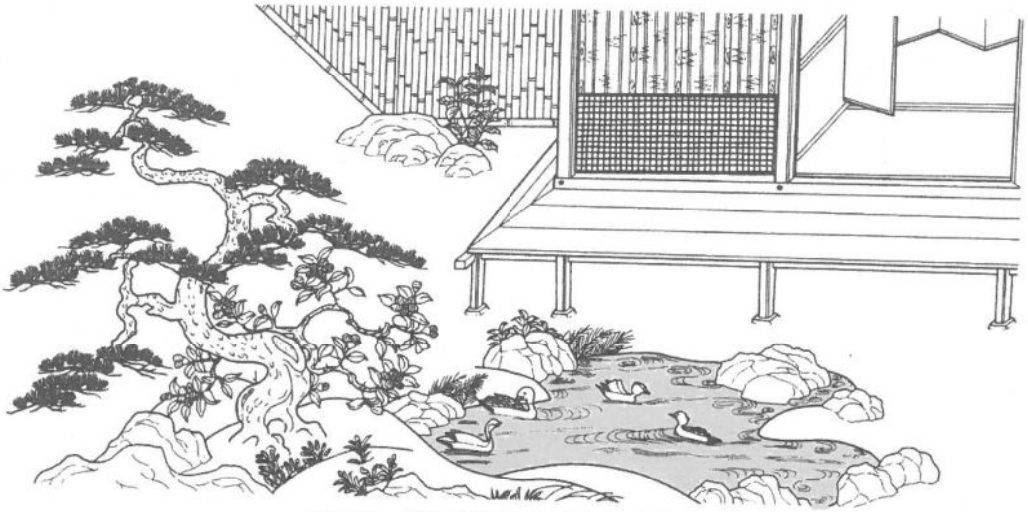


Fig.22 「慕帰絵詞」に描かれた庭園

えられていたであろう邸宅の方位は、平安時代後期と同じく正方位を指向している点は注意したい。また、この邸宅と庭園は、古道に面していたのは間違いなく、ＳＧ14への給水を担ったＳＤ09は、あるいは古道の側溝につながっていた可能性が考えられる。

遣水ＳＤ21がＳＧ14を出てすぐに等高線に沿って流れを変えつつ幅を広げるのは、穏やかな流速を確保するための工夫であると考える。出土遺物から考えて、この邸宅建物は先の年代幅のきわめて短期間存在したものであり、焼失し廃絶したものと考えられる。

方位を違えた建物と溝（Ｂ期）　この邸宅と時代的にはほぼ同時期と想定できるものの、同時存在とは考えがたい遺構として、ＳＫ22～24、ＳＤ31、ＳＢ101がある。ＳＫ22～24とＳＤ31はＳＤ21との重複関係から新しく置かれるものであり、ＳＢ101は方位の違いが根拠となる。すなわち、室町時代後期については、邸宅時代のＡ期とその後のＢ期とに区別して把握すべきだと考えるのである。

Ｂ期で注目したいのは、ＳＢ101あるいはＳＤ31の方位である。これらの方位は真北より西へ51度程度傾くものであり、地形に合わせて構えられているものである。正方位を指向しているＡ期とは異質である。この方位は、近世の地境に関係する溝ＳＤ50に全く直行するもので、明治期に鉄道が敷かれ駅ができるまで存在した、当該部分の地割方位に整合するものである。平安時時代後期以来の伝統を踏襲したＡ期と、そこから自由となり近世へと連続したＢ期との間は、土地利用をする上での意識に大きな違いがあったと見なければならないだろう。

Ｆ．江戸時代

茶畑への移行　室町時代後Ｂ期の後、人の居住痕跡は遺構の上では認められず、層序的に言えば耕作地（茶畑）へと利用されていったと認識できる。この境目は、16世紀前半ごろであったと考えられる。近世初期の宇治を描いた絵図をみると、町屋は新町通り（宇治橋通り）沿いを中心に、県通り沿いの一部、宇治川沿いの一部に伸びており、周囲には茶畑が広く認められる。当該地での発掘成果からは、このような茶畑景観が宇治に成立するのは、16世紀前半ごろに遡る可能性を提案し、今後のさらなる実態解明に期待をつなげることとしたい。

第３節　総　　括

Ａ．今回の発掘成果からみた宇治市街遺跡

今回の発掘調査の具体的な成果については、前述してきたところである。最後にこの成果と宇治市

街遺跡の全体的評価との関連について、簡単に整理してまとめにかえたい。

宇治街区と宇治橋通り街村　中宇治に方位を違える二つの町割が存在することは、第Ⅱ章でふれたところである。Fig. 23の図を基に示すと、A－B－Cの内角部にD－F・I－K・L－Oの東西道、E－R・F－Q・O－Pの南北道で区切られた東西南北の碁盤目状町割と、A－Cの宇治橋通りに沿って、通りに直行する道路によって区切られた町割とである。前者を「宇治街区」[1]、後者を「宇治橋通り街村」と呼ぶことにしたい。両者は同時成立したものではなく、宇治街区が古く宇治橋通り街村が新しいことは、発掘調査を経なくても道同士の重複関係から考えて、それなりの蓋然性を持って想定しうる。現在の中宇治は、これら二つの町割の累積集合体が伝わっているという評価が適切である。

宇治街区が平安時代に遡る可能性については、わりあいと古くから指摘されており、D－E－J－Iに小川殿、J－K－N－Mに小松殿、K－N－Oに西殿などの記録に伝えられる12世紀における藤原摂関家の別業[2]が推定されている。宇治街区内の発掘調査は少なく具体的な状況がつかめていないが、河内向山系の瓦が出土しており、当該期の藤原摂関家に関係する遺構の存在については首肯できよう。

東西幹道と泉殿　宇治街区を考える上で重要なものとして、D－E－F－G－Hと街区北辺を断続的に連なる道がある。現在は、宇治橋通りや鉄道などで寸断されているが、平等院寺域の西端であるD地点からH地点を越えて、真っすぐ西へ正方位を指向して1,000mほど続くのが現行道路と土地区画から判読できる。この道が途切れた西端に矢落遺跡がある。最近の発掘調査で11世紀後半の庭園遺構を伴う邸宅跡[3]が見つかっており、付近の地名などから頼通の娘で後冷泉皇后であった四条宮寛子の広大な別業「泉殿」の可能性が考えられている。すなわちこの東西直線道は、泉殿と平等院とを繋ぐ基幹道路である可能性が高く、この道の側溝と考えられる11世紀後半の遺構が以前の発掘調査で確かめられたことは、すでに述べたところである。この東西直線道を「東西幹道」と呼んでおきたい。

宇治街区は基本的には碁盤目状ながらも、条坊のような正方形となるものではなく、少し歪んだ偏台形となっている。詳細は別稿に譲るが、この原因は街区の外枠を形成するB－Cの県通りと東西幹道の成立に時間差があるためと考えられる。すなわち自然道であり大和大路であった山裾を通るA－Tが、平等院造営に伴うB－T間の占地によってB地点から平等院西限にそってC地点まで変更新設された時期と、東西幹道が新設された時期が異なり、両者が必ずしも直行しなかったのに加え、街区整備時においてさらに中の南北道は東西幹道に対して直角をとり、東西道は県通りを基準としたため、このようないびつな碁盤目区画となったと想定している。

宇治街区の消長と広がり　さて、今回の調査地は、この宇治街区を西にやや離れ、東西幹道に南面する場所となる。調査地の平面形は、南西角が隅切りされた格好となっている。トレンチも同様である。この隅切り状こそ現代に残る東西幹道の痕跡である。この地点で平安後期の遺構が確認できたことは、二つの点で重要な情報をもたらしている。

一つは、11世紀後半から13世紀前半に続く邸宅がこの地点に存在し、かつその建物・柵の方位が東西幹道と合致することである。この点は、とりもなおさず11世紀後半においてこの道が存在したことを証左する。すなわち、考古学的情報がまだまだ少なかった10年ほど前から描いてきた、宇治街区を中心とする平安後期宇治の空間像は、この発掘調査によって歴史学・考古学的な検討の俎上へと上がる着実な資料を得たといえる。

1　杉本宏「宇治橋架橋位置変更と宇治市街区の成立」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第24集　宇治市教育委員会　1994年。
2　杉山信三「平等院の院家」『院家建築の研究』1981年。
3　荒川　史「図版解説　矢落遺跡の庭園遺構」『古代文化』11巻12号　2002年。

Fig.23　中宇治地区の道路と地形

もう一つは、平安後期邸宅群の広がりの予測である。従来の検討過程の中では、平等院と泉殿という二つの「核」、それを結ぶ東西幹道という「線」、宇治街区という「面」、これら3要素を集約したものが復元できる平安後期の宇治の空間モデルであるという整理を、念頭に置いてきた。今回のような宇治街区を離れた場所において、当該期の邸宅遺構を確認したことは、今後、遺跡のあり方に二つの方向性を想定しなければならないことを意味しよう。すなわち宇治街区を現状よりも広いものと予測し、残存部分だけが現状で認識されていると見る立場、あるいはこのような「大宇治街区」を想定せず、東西幹道沿いにいくつかの邸宅が展開すると見る立場である。いずれにしろ、邸宅群の空間的な広がりは従来の予測を上回るものになるのは間違いない。また、これら邸宅群の終焉が、13世紀前半ごろではないかという具体的な目安を初めて持てたことも、この邸宅群の日本史的な位置付けを考究してゆく上で大きな収穫であった。

宇治橋通り街村の成立　宇治橋通り街村の軸となる、いわゆる宇治橋通りが一体いつ施設されたかについては、はっきりしない。近世以降このかた、宇治橋通りが「新町通り」とも呼ばれ、宇治街区の南辺を担うA－Bが「本町通り」と呼ばれることをもってしても、宇治橋通りが宇治街区後の新しい道であることは首肯される。前節で示した遺構の変遷と宇治橋通りの施設時期との関係で注意したいのは、室町時代後期のA期とB期との間の画期である。宇治橋通りはやや湾曲しているため方位の採り方が難しいが、真北に対して46度ほど東に偏する方位を測ることができる。室町時代B期のＳＢ101あるいはＳＤ31の方位は真北より西へ51度程度傾くものであるため、両者は直角とはならないものの近似した方位を指向していることが理解できる。

実はこの近似性の評価が難しい。Fig. 23の等高線を見ると分かるように、宇治橋通りと今回調査地は地形的に同一方向への傾斜面上に位置しているのである。いわば、この近似性は、はたして宇治橋

通り街村の成立に伴う新しい地割方位の当該調査地区への波及として位置付けられるのか、単に地形合わせでＳＢ101あるいはＳＤ31を構えた結果、偶然に宇治橋通り街村の方位と合うことになってしまったのかが判断しづらいのである。前者の可能性を念頭に置きつつも、今回の成果だけでは提案に至ることができないのが実状であろう。宇治橋通り街村の成立が中世にあることは間違いがないにしても、その具体的な時期については、今後の宇治市街遺跡内における発掘調査において、町割方位の変更時期をさらに見つけ出し、詳細に検討してゆく中で自ずと明らかになるものと考える。

B．お わ り に

今回の発掘調査は、その実施方法についても、発掘調査で得られた成果についても、前述してきたとおり、宇治市の文化財行政にとって大きなものであったと考えている。平成11年に文化財保護法の埋蔵文化財に関する権限が地方に委譲され、発掘調査に関する標準・基準が逐次検討されるなかで、埋蔵文化財保護への取り組みは、効率化を進めつつ品質をいよいよ高め、広く社会へその公益を還元することが求められている。今回の発掘調査の実施方法はその一つの具体的な試みである。結果としては、当然のこととして成否両方が存在する。反省すべき点、工夫すべき点については、今後ともさらに検討を重ね、より良い文化財保護行政の実施に取り組んでゆかねばならないと考えている。

発掘調査の成果については、ここで繰り返すまでもなく、宇治の歴史を華やかに特徴づける平安時代後期の藤原摂関家に関する遺構を、初めて具体的に宇治市街遺跡で確認し、その変遷を詳細に知ることができた。宇治市街遺跡自体は、中世遺跡の特徴の一つとして挙げられる、今につながる地域の原型が萌芽した段階の広大な遺跡である。この遺跡の大半は宇治市街地の地下に埋もれ、都市部での調査の常として、なかなかまとまった面積の発掘調査が難しいものとなっている。今回の成果だけでこの遺跡を語ることは、まだまだ時期尚早の感は否めない。しかし、やっとこの遺跡に秘められた重要な歴史情報に手が届いたことに関しては、率直に喜びたいと考える。

今回の発掘成果のみならず、これからも蓄積されるであろうこれらの情報を、発掘報告書だけに留めることなく、機会を得ながら広く発信し、本市が持つ豊かな歴史情報の公開性と透明性を高め、文化財保護に関するご理解をますますいただけるように不断に努力を続けて行きたい。

最後に、この発掘調査の実施と報告書の作成に関してご理解とご助力をいただいた多くの方々に対して衷心より感謝申し上げ、本報告の結びとする。

付　章　宇治地域出土の中世土師器編年

中　井　淳　史

A．はじめに

宇治市内の中世遺跡の調査において、これまで遺物の年代観を把握する参照軸とされてきたのは、平安京左京内膳町遺跡の土師器編年（京都府教育委員会1981『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-3)』、以下内膳町編年と記す）であった。宇治地域（以下、現代の宇治市域全体をさすものとして、このように呼称する）で出土する土師器はその器形・形態にせよ、変遷過程にせよ、京都市内で出土する土師器（以下、京都市域で流通した土師器を京都産土師器とよぶ）と同じものと認識されてきたからである。しかしながら、京都産土師器をめぐる近年の研究は、その供給圏が京都市域にほぼ限定されていたことを明らかにしている（伊野近富1995「土師器皿」、中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』など)。宇治地域の土師器についても、平等院境内苑池出土土師器が左京内膳町遺跡の資料に「極めて類似し」ている（橋本久和1997「土器研究と地域」、日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究』XII、p.1）というように、京都産土師器そのものではないとする認識が共有されつつある。つまり、宇治は京都産土師器の供給圏ではなく、京都産土師器を模倣してつくられた（おそらく地元の）製品が供給されていた地域だったというわけである。したがって、京都産土師器の年代観が年代比定のおおよその目安になったとしても、決して厳密な定点にはならない。つねに同時期の京都産土師器を模倣しているとはかぎらないからである。

平等院境内遺跡や白川金色院跡など良好な遺跡の調査例が蓄積され、比較検討に耐え得る資料がそろいつつある現在、これまで報告されてきた年代観を再検討してみる価値は十分にあるだろう。本稿では、これまでの調査で出土した資料のうち、一括性の高いものをとりあげて古代末期～中世における宇治地域の土師器の変遷を素描する。

内膳町編年との機械的な対比をいったん保留するとして、では年代比定の根拠をどこに求めたらいいのだろうか。14世紀以前の資料については、畿内産瓦器椀との共伴関係に注目してみたいと思う。というのも、近畿地方で出土する土器・陶磁器のうち、もっとも安定した年代観が得られているのがこの瓦器椀だからである（森島康雄1992「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」、大和古中近研究会『大和の中世土器Ⅰ』など)。もっとも、瓦器椀が消滅する14世紀後半以降については、年代観の安定した土器・陶磁器は少なくなってしまう。たとえば瀬戸・美濃焼などは、年代の根拠としてしばしばとりあげられる遺物であるが、宇治地域における出土状況の把握は十分になされていない。したがって、この時期の資料については暫定的に内膳町編年との対比からおおよその年代比定をおこない、今後に期したい。

B．資料の検討

まずは基礎資料として良好な一括資料を整理するが、紙幅の都合から本稿の検討に必要な情報のみ言及する。稿末に報告書一覧を付したので、詳細な情報や実測図は各報告書を参照されたい。

記述の便宜上、いくつかの用語を設定する。宇治地域の中世土師器を通観すると、京都産土師器の器形・形態を模倣した一群と、京都産土師器の技術を踏襲しているものの、器形や形態の模倣まで志向しない一群の２つに区分できる。以下では、前者を京都系土師器、後者をかりに非京都系土師器と定義する。

平等院境内苑池　平等院苑池の州浜石にはりつくような状況で検出された資料群であり、創建時のものとみてまずまちがいない。したがって、阿弥陀堂が落慶した天喜元（1053）年を中心とする11世紀中ごろに比定できる。

土師器はいずれも精良な胎土で、淡灰褐色を呈する京都系土師器である。口径10.0cm、11.0cm、13.0cm前後の２～３法量に分化しており、口縁部は２段ナデ、「て」字状の２種類がある。粘土帯をまきあげて成形したのち、底部内面をハケで整えてから底部内面の一方向ナデをおこない、さいごに体部内外面を右回りにヨコナデする順序は京都産土師器の手法と一致している。かつ調整も丁寧に施され、器壁も３mm前後と薄い。京都産土師器にきわめて近い資料といえる。このほかコースター状の皿も出土しており、組成の点でも共通性が高いのが特徴である。

平等院旧境内遺跡（多宝塔跡）ＳＸ63　四条宮寛子によって康平４（1061）年に建立された多宝塔の基壇跡（石敷遺構ＳＢ60）直下で検出された遺構で、11世紀第３四半期の定点となる一括資料である。口径11.0cm前後、13.0～14.0cmの大小２法量の京都系土師器が主体であるが、わずかながら非京都系土師器もまじるようだ。京都系土師器の口縁部は小皿が「て」字状口縁、大皿が２段ナデをもつものがほとんどであるが、ナデは概して弱い。器厚も４mm強を測るものが多く、苑池の資料群と比べると厚手である。色調も黄褐色を呈しており、口縁部の整形も粗雑な印象を受ける。これはとくに「て」字状口縁の小皿に顕著な傾向であって、端部を丸めたようにつくりあげるものや口縁部外面のナデを極端につよく施すもの、体部内面の段差を意識せず、なだらかにたちあがるように整形したものなど、さまざまなヴァリエーションがみられる。

白川金色院跡地鎮遺構群（ＳＸ4101・4302・4303）　一間四面堂跡の基盤層で検出された地鎮遺構より出土した資料である。遺構は複数検出されたが、土器の様相には大きな相違はみとめられないので、ここでは一括してあつかう。堂跡は文殊堂と考えられ、白川金色院が創建された康和４（1102）年、すなわち12世紀初頭の実年代が与えられる。土師器は京都系土師器・非京都系土師器の２種類が出土する。前者は淡橙褐色～黄褐色を呈しており、口径9.0～10.0cm前後、14.0～15.0cmのおおよそ２法量がある。ナデ調整の手法や順序は京都産土師器と同一である。口縁部は２段ナデであるが、全体的にナデは粗雑である。後者は口径値にばらつきがみられるが、おおむね大小２法量に分化する。胎土は砂粒を多く含んでおり、精良な京都系土師器とは対照的である。内面全体に不定方向ナデを施したのち、体部内外面をヨコナデするが、ナデ調整は非常によわい。共伴遺物としてＳＸ4302で１点、瓦器椀の底部片が出土している。大和型第Ⅱ段階Ａ型式の椀であろうか。

白川金色院跡ＳＫ1103　白川金色院の坊院のひとつ、蔵坊の跡地で検出された廃棄土坑がＳＫ1103である。京都系土師器と非京都系土師器はほぼ半々の比率で出土している。京都系土師器は灰白色～淡黄白色を呈するものがほとんどで、いわゆる「へそ皿」や身の深いタイプなど３法量で構成される。胎土は砂粒をわずかに含んでおり、この点から京都産土師器とは区別できる。これに対し、非京都系土師器は赤褐色～淡褐色を呈するものが多く、胎土も砂粒や赤・白色の微粒子を含んでいる。底部がやや平たく、体部が直線的にたちあがる形態が主体である。内外面のナデは非常によわく、痕跡が確認できないほど不明瞭なものが多く、口縁の歪みが著しい。これらは京都系土師器とは顕著に異なる点である。

白川金色院跡ＳＸ6801　蔵坊の跡地で検出された土器だまりＳＸ6801より、淡褐色系の京都系土師器がまとまって出土している。器種が多彩なのが特徴で、へそ皿や体部をつよく外反させる小皿、丸底で体部内面に「の」字状のナデ上げを施す丸底の皿や「２」字状のナデ上げを施す平底の皿など、15～16世紀の京都でよくみられる器種で構成される。

宇治市街遺跡（妙楽160-1）ＳＥ01　京都系土師器は口径9.0cm、13.0～14.0cm前後の大小２法量で、ともに１段ナデ、１段ナデ面取りの口縁をもつ。厚手化が著しく、形状の崩れた「て」字状口縁の小皿もわずかにみられ、同時期の京都産土師器の口縁部形態とは一致していない。１段ナデ面取り口縁の皿は、面取りを施す角度が京都産土師器と大きく異なっており、あるいは２段ナデのヴァリエーションとみることもできる。このほか、口縁部の幅広い範囲をナデて、体部が直線的な非京都系土師器が出土している。大皿は器高が高く、京都系土師器よりも身が深くなる傾向がある。共伴する瓦器椀は大和型が第Ⅲ段階Ａ新型式、楠葉型がⅢ-１期である。13世紀初頭ごろと考えられる。

宇治市街遺跡（妙楽162）ＳＥ02　ＳＥ02から出土した資料群は、口径10.0cm前後、15.0～16.0cmの２法量に分化する。京都系土師器の小皿は「て」字状口縁や２段ナデを模倣している。「て」字状口縁は内面の段差が不明瞭なものもあり、細部の模倣は忠実ではない。一方、大皿は２段ナデで構成される。こちらは口縁部外面のナデも明瞭で、上下段のナデも均等におこなわれるなど、整形は丁寧である。非京都系土師器は口縁部形態にヴァリエーションがあり、たとえば小皿の場合、短い体部を幅広くナデるものや、体部が極端に外反するものなどがみられる。大皿は丸みをおびた形状で、口縁部のごくせまい範囲のみをナデるものが確認され、口径の差によって、口縁部の形状にも差異があることがわかる。共伴する瓦器椀はいずれも楠葉型であるが、破片のため全形がわかるものはない。内外面のミガキが密に施されている点からみれば、Ⅱ-１期かそれより古いものと推測される。12世紀前半に位置づけられる。このほか、少量ながらコースター状の皿も出土している。

宇治市街（壱番29）　ＳＫ42の資料は、楠葉型Ⅲ-１期およびⅢ-２期の瓦器椀をともなっている。おおよそ13世紀前半ごろと考えられる。京都系土師器は小皿が１段ナデ、大皿が１段ナデ面取り口縁のものが中心となるが、「て」字状口縁（小皿）、２段ナデ（大皿）もわずかに出土する。「て」字状口縁は厚手化がすすみ、また形状もシャープさに欠けるなど、退化したようすが顕著にうかがえる。非京都系土師器も大小２法量出土している。体部が短く、扁平な器形である。

ＳＫ200の資料は大和型瓦器椀第Ⅲ段階Ａ古型式の資料と共伴する。京都系土師器は大小２法量で構成され、小皿は「て」字状口縁、大皿は１段ナデ口縁をもつ。このほか、コースター状の皿や、直線的な体部をもち、口縁部を幅広くナデる非京都系土師器が出土している。大和型瓦器椀の年代を考慮すれば、12世紀後半ごろの年代が考えられる。

神楽田遺跡ＳＥ01　井戸の中層から瓦器椀などと共伴したもので、一括資料として報告されている。瓦器椀は大和型・楠葉型の２種類があり、前者は第Ⅱ段階Ｂ型式ないし第Ⅲ段階Ａ古型式、後者はⅡ-２期の資料である。このような共伴例は大阪府下でも数例知られており、12世紀中ごろとみてまちがいない。土師器はすべて京都系土師器であり、「て」字状、２段ナデ口縁の小皿と１段ナデの大皿、コースター状の皿などが出土している。器壁はやや厚いものの、ナデ調整や口縁部の形態は京都産土師器を忠実に模倣している。

赤塚遺跡　土坑ＳＫ01でまとまった資料が出土している。京都系土師器は口径10.0～11.0cm、14.0cm前後の２法量で構成されている。小皿は「て」字状口縁、大皿は２段ナデ口縁をもつ。いずれも器壁は３～４mm前後と京都産土師器に近い数値をしめす。「て」字状口縁の端部はしっかりと整形されており、またナデ調整も丁寧である。口径14.0～16.0cm程度の大皿のなかには、口縁部をつよく外反させるものや、ナデ幅のせまいものなど非京都系土師器もわずかながらみることができる。共伴する瓦器椀は第Ⅱ段階Ａ型式の大和型であるから、11世紀末～12世紀前半ごろに位置づけられる。

ＳＤ03からも一定量の土器が出土している。ほとんどが京都系土師器で、赤色（赤褐色）系と白色（灰白～乳白色）系に大別される。赤色系は底部を一方向ナデしたのち、口縁部内外面をヨコナデする京

都と同一の手法が採用されている。口縁部は1段ナデである。口径9.0cm前後、11.0cm前後の2法量がある。胎土は砂粒や赤色・白色の微粒子を含み、ざらつきがある。白色系の土師器には、身の深い器形の皿やへそ皿がある。いずれもナデ調整は京都産土師器と同一で、へそ皿が口径7.0cm台、そのほかが口径12.0cm前後に集中する傾向も京都と変わりはない。赤色系・白色系ともに器壁は薄くしあげられているが、ことに後者は顕著である。胎土も精良なものが多く、京都産土師器の可能性が考えられる。内膳町編年にあてはめるならば、おおよそ13世紀後半～14世紀に位置づけられよう。高台が形骸化し、器高が低い大和型瓦器椀が共伴している。第Ⅲ段階でもかなりあたらしいもの（Ⅲ-E型式か）と考えられる。

三室戸寺子院跡　ＳＸ01より出土した土師器は京都系土師器・非京都系土師器の2種類で、口径9.0～10.0cm、12.0cmの2法量が中心となる。土師器の色調には淡褐色系・灰褐色系を呈するものがみられる。京都産土師器にみられる赤・白の差を意識した結果と考えられなくもないが、京都系土師器は外面のナデがやや不明瞭な1段ナデ口縁をもつものが過半をしめており、白色系の京都産土師器の器形を模倣したものはない。非京都系土師器は、短い体部が直線的にたちあがる器形が多い。口縁部外面の広い範囲をナデている。ＳＫ03では1段ナデ面取りを施す皿がわずかにみられるなど、やや古いタイプのものがみうけられるが、様相としてはほぼ同一といってよく、同時期のものとあつかって大過あるまい。

ＳＥ27出土土師器は瓦器鍋をともなっており、中世後期、おそらく15世紀代に位置づけられよう。土師器はすべて京都系土師器である。京都産土師器と同様、口径7.0～16.0cm程度の幅で3法量以上に分化する。ナデ手法の順序や器形、口縁部の形態はほぼ京都産土師器と共通するし、へそ皿が灰白色を呈する点など、赤・白の色調差もきわだっている。胎土に砂粒が多く含まれる点をのぞいて、京都産土師器を細部にいたるまで忠実に模倣している。

1トレンチ西壁土層断面土器溜りからは、赤褐色系で体部がやや外反する皿と灰白色系の皿が出土しており、大小2法量に分化する。ナデ調整も丁寧で、器壁も薄くしあげられており、京都産土師器にきわめて近い資料である。共伴遺物に欠けるが、14世紀代の京都の様相を忠実に反映したものであり、年代の一端が推測される。

西浦遺跡ＳＤ01　京都系土師器は1段ナデの皿のほかに、灰白色系の皿（へそ皿など）があり、赤・白の色調差がみられる。器壁は京都産土師器と比べるとやや厚手であるが、ナデ調整などは丁寧で、忠実に模倣されている。非京都系土師器には短く直線的にたちあがる体部をもつ小皿が多い。ナデ調整はよわく不明瞭であるが、順序は京都のそれを踏襲している。大和型第Ⅲ段階（Ⅲ-C型式か）、楠葉型Ⅲ-3ないしⅣ-1型式の瓦器椀が共伴している。時期幅があるが、大半の遺物は13世紀末ごろに位置づけられる。

野神遺跡ＳＫ01　中世墓ＳＫ01から若干の遺物が出土している。土師器は口径9.0cm前後、14.0cm前後の2法量出土しているが、いずれも非京都系土師器である。体部が短く、口縁部外面のナデ幅が広くなるなど、形態の面で隔たりが大きいのである。共伴する瓦器椀は大和型であるが、外面の風化が著しい。内面のミガキの密度や見込み部分の圏線ミガキの特徴からみれば、第Ⅲ段階Ｂ型式の資料であろうか。

旦椋遺跡ＳＫ11　第3次調査で瓦器椀と共伴した事例がある。ＳＫ11では第Ⅳ段階の大和型瓦器椀とともに一定量の土師器が出土した。口径8.0cm、11.0cmの2法量で、1段ナデ口縁の京都系土師器と、扁平な器形で体部の短い非京都系土師器の2種類がみられる。

西笠取遺跡1トレンチ暗黒褐色土層　包含層中からの出土であるが、比較的まとまった資料が出土

Tab. 3　中世前期（11～14世紀）における土師器と共伴瓦器椀

遺構名	京都系土師器					非京都系土師器	瓦器椀		備考
	「て」字状	2段ナデ	1段面取り	1段ナデ	コースター状		大和型	楠葉型	
平等院境内苑池	小	大・中			○				永承8(1053)年平等院創建
平等院旧境内ＳＸ63	小	大				＊			康平4(1061)年多宝塔建立
赤塚ＳＫ01	小	大			○	大	Ⅱ-A		
平等院旧境内南泉坊跡苑池	小	大			○	大・小			
白川金色院跡地鎮遺構群		大・小				大・小	Ⅱ-A		康和4(1102)年白川金色院創建
宇治市街(妙楽162)ＳＥ02	小	大・小			○	大・小		～Ⅱ-1	
神楽田ＳＥ01	小	小	大		○		Ⅱ-B/Ⅲ-A古	Ⅱ-2	
宇治市街(里尻5)ＳＥ25	＊	小	大		○	大・小	Ⅱ-B		
宇治市街(壱番29)ＳＫ200	小			大	○	大・小	Ⅲ-A古		
宇治市街(里尻5)ＳＤ43	＊	大・小	大・小	小	○	大	Ⅲ-A新	Ⅲ-1	
宇治市街(里尻5)ＳＫ45	＊	大	大・小	大・小			Ⅲ-A	Ⅱ-3/Ⅲ-1	
宇治市街(妙楽160-1)ＳＥ01	＊	＊	大・小	大・小	○	大・小	Ⅲ-A新	Ⅲ-1	
野神ＳＫ01						大・小	Ⅲ-B		
宇治市街(壱番29)ＳＫ42	＊	＊	大	大・小		大・小		Ⅲ-1・2	
宇治市街(里尻5)ＳＫ07		大	大・小	大・小		＊			
三室戸寺子院跡ＳＸ01・ＳＫ03			＊	大・小		大・小			赤色系・白色系?
西浦ＳＤ01				大・小		大・小	Ⅲ-C？	Ⅲ-3/Ⅳ-1	赤色系・白色系(へそ皿など)
赤塚ＳＤ03				大・小	○	大・小	Ⅲ-E？		赤色系・白色系(へそ皿など)
旦椋ＳＫ11				大・小		大・小	Ⅳ		

凡例：＊は微量の出土をあらわす。コースター状皿については、出土例があれば○であらわした。
瓦器椀の型式名は中世土器研究会の成果（中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』、1995）に準拠した。

している。京都系土師器と非京都系土師器の2種類がある。前者は口径8.0～9.0cm、14.0～15.0cmの2法量があり、小皿は極度に外反する体部をもつ形態、大皿は平底で側面観が逆台形をなす形態である。非京都系土師器は体部がまっすぐたちあがる形態のもので、小皿に集中する。京都系土師器は先述した白川金色院跡ＳＸ6801の様相とよく似ており、両者はほぼ同時期と推測される。

C．宇治市内遺跡群出土土師器編年

以上の事例、および今回の調査で出土した土師器のうち、瓦器椀との共伴が確認できる事例をTab. 3にまとめた。宇治地域では大和・楠葉型の2種類の瓦器椀が出土しているが、とりわけ前者が多い。大和型はおおむね第Ⅱ段階Ａ型式から第Ⅲ段階Ｂ型式、楠葉型はⅡ-1期からⅢ-1・2期が中心である。これと遺跡・遺構の状況から実年代が確実にわかる平等院境内苑池・同旧境内ＳＸ63・白川金色院跡地鎮遺構群とを考えあわせると、土師器の形態的変遷の概略が明らかとなる。大和型第Ⅱ段階Ａ型式と共伴する事例では2段ナデの大皿・「て」字状口縁の小皿という組み合わせがみられるが（赤塚ＳＫ01）、第Ⅱ段階Ｂ型式ないし第Ⅲ段階Ａ古型式の資料と共伴する事例では1段ナデ面取りの大皿と2段ナデ・「て」字状口縁の小皿（神楽田ＳＥ01）、第Ⅲ段階Ａ新型式の資料と共伴する事例では1段ナデ・1段ナデ面取りの大小皿（宇治市街[妙楽160-1]ＳＥ01）という組み合わせが確認できる。要するに、2段ナデ・「て」字状口縁が主流となる様相から1段ナデ面取り・1段ナデ口縁が主流となる様相へと変化するわけであるが、これは京都産土師器の変遷過程とほぼ一致するのである（相違点については後述）。したがって、近接した遺跡の資料を比較した場合、それぞれの口縁部の形態的差異が時期差を反映している蓋然性が高いと判断できる。

以上をふまえ、瓦器椀が共伴する時期（11～14世紀前半）における宇治地域の土師器編年の概略は次のとおりである（なお、「・」で併記しているものは、ほぼ同時期と考えられる資料である）。

平等院境内苑池（1052年前後）→平等院旧境内ＳＸ63（1066年前後）→赤塚ＳＫ01・平等院旧境内南泉坊跡苑池・白川金色院跡地鎮遺構群→宇治市街（妙楽162）ＳＥ02→神楽田ＳＥ01→宇治市街（里尻5）ＳＥ25→宇治市街（壱番29）ＳＫ200・同（里尻5）ＳＤ43→宇治市街（里尻5）ＳＫ45・同（妙楽160-1）ＳＥ01→野神ＳＫ01→宇治市街（壱番29）ＳＫ42・同（里尻5）ＳＫ07→三室戸ＳＸ01・

ＳＫ03→西浦ＳＤ01・赤塚ＳＤ03→旦椋ＳＫ11

つぎに瓦器椀消滅以後、すなわち14世紀後半以降の資料群の位置づけであるが、冒頭で述べたように年代観の安定した遺物との共伴例が少なく、現状では京都産土師器の編年と対比させるしか手だてはない。これまで検討した資料の大半は京都系土師器である。内膳町編年と比較すれば、白川金色院跡ＳＫ1103・三室戸寺子院跡１トレンチ西壁土層断面土器溜りが14世紀後半、三室戸寺子院跡ＳＥ27が15世紀前半、白川金色院跡ＳＸ6801・西笠取遺跡１トレンチ暗黒褐色土層が15世紀後半～16世紀初頭ごろに位置づけられよう。

Ｄ．ま と め

以上の検討結果をふまえ、宇治地域における土師器の変遷をFig. 24にしめした。京都系土師器と非京都系土師器の２種類があることをすでに指摘したが、そのちがいは器形や細部の形態までを模倣するか否かであって、技術的基盤となったのは京都産土師器の製作技術であった。中世を通じて、手づくね成形の土師器が生産・使用されていたのである。

それぞれの土師器の動向をあらためて整理してみよう。中世の京都系土師器のうち、もっとも古く位置づけられるのは11世紀中ごろと考えられる平等院境内苑池出土の土師器である。「て」字状口縁の小皿、２段ナデ口縁の中・大皿で構成されており、器壁の厚さやナデ調整といった細部まできわめて忠実に京都産土師器を模倣したものである。つづく平等院旧境内ＳＸ63や赤塚ＳＫ01なども同一の組成であり、これが11世紀代の基本的な様相であることがわかる。この「て」字状口縁、２段ナデ口縁の土師器はいずれも出土量を減少させながら13世紀初頭まで存続したことが確認できる。前者は口径9.0～10.0cm前後で推移してゆくが、端部の形態は変化する。すなわち、厚手で扁平になるとともに、端部の屈曲がきわめてルーズになっていくのである（Fig. 24：8・14・18・22)。後者は11世紀中ごろには口径12.0～13.0cm、16.0cm前後の２法量で構成されるが、12世紀後半以降になると口径が縮小し、単一法量へと収斂していった。

かわってあらわれるのが１段ナデ面取り口縁（20・25・26・31)、１段ナデ口縁（21・23・24・29・30）をもつ土師器である。いずれも12世紀後半に出現することが確認できる。初現期の資料は大皿しかみられないが（20・21)、12世紀末にはどちらも大小２法量で構成されるようになる。前者は13世紀前半、後者は13世紀以降まで存続することがわかる。

さらに、赤褐色系・灰白色系というように、土師器の色調が赤・白に分化してゆく点も注目される。これは13世紀後半～末ごろに顕著となる。灰白色を呈する一群は15世紀ごろまでは存続している。へそ皿とよばれる底部をくぼませた皿（36・41・47・51）と、比較的身の深い大皿（35・40）の２種類だ。どちらも時期がくだるにつれて口径が縮小し、器高が低くなる傾向がみとめられる。ただし、これらは現在のところ、木幡や宇治、白川周辺にしかみられず、旦椋遺跡など宇治川左岸の南西部地域ではまったく出土していない。灰白色系土師器の分布域は宇治市域全般におよぶものではなく、限定的であった可能性が高い。

赤褐色系の土師器は１段ナデの系譜をひく大小皿が14世紀以降も存続する。15世紀代になると、口縁部外面が極端に外反する皿（44・45・48）や、「２」字状のナデ上げをもち逆台形状の側面観をもつ大皿（46・50)、「の」字状のナデ上げをもち丸みをおびて体部がたちあがる小皿（49）など、形態的なバリエーションが著しくなるが、これは同時代の京都産土師器の組成とほぼ同一である。

このほか稀少な器種として、いわゆるコースター状の皿や高台付の皿があげられる。後者は断片的にしか出土していないために全容は把握しがたいが、前者は11～12世紀を中心に出土する。時期がくだるにつれて口径・器高の縮小化がみられるようだ。

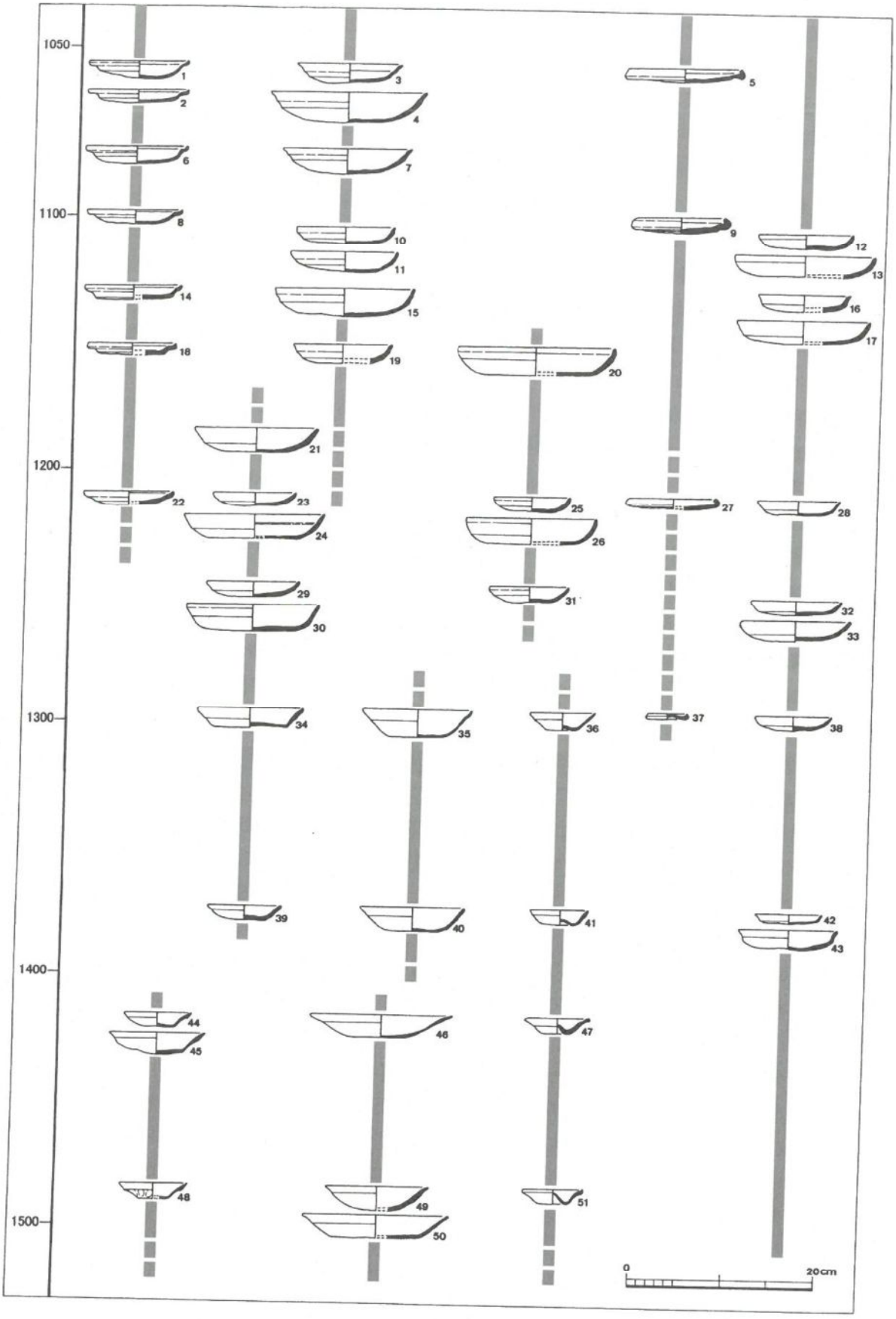


Fig. 24　宇治地域中世土師皿編年図

つぎに非京都系土師器の動向を整理してみよう。京都系土師器との相違は、京都産土師器の器形を忠実に模倣するか否かという点にあり、そのため京都系土師器との境界は必然的に曖昧にならざるを得ない。したがって、形態的なヴァリエーションも著しいのであるが、もっともめだつタイプは、底部が平たく、体部が短く直線的にたちあがる一群だ。白川金色院跡地鎮遺構群や宇治市街（妙楽162）ＳＥ02など、12世紀前半には広く出土が確認できる（12・13・16・17）。内外面のナデ調整がはなはだよわく、痕跡が不明瞭なのが共通した特徴である。このタイプはその後も各地で出土しており、14世紀以降も存続してゆくようだ（42・43）。もっとも、出土量には時期的な差異がみられ、とくに14世紀以降は京都系土師器と比べるとごく少量しかみられない。

以上がおおよその変遷過程である。宇治地域の京都系土師器が、中世を通じて京都産土師器の影響を受け続けていたことは明らかであるが、12世紀の状況においては顕著な相違点がある。すなわち、京都系土師器は京都産土師器の器形や形態、技術を模倣しているものの、同時期の様相までは完璧に再現していないのである。

ここで内膳町編年を確認してみると、12世紀代の京都産土師器は２段ナデ・２段ナデ面取り口縁の皿が主体となる段階（ＳＥ176下層、12世紀前半）から、２段ナデ面取りにかわって１段ナデ面取り・１段ナデの皿が出現する段階（ＳＥ288上層、12世紀第３四半期）、徐々に２段ナデの皿が減少してゆく段階（ＳＤ345下層、12世紀第４四半期）という経過をたどることがすでに判明している。つまり、12世紀の京都産土師器は、２段ナデから１段ナデへと口縁部形態が変化するのである。

これに対し、宇治地域でTab. 3に示したごとく、12世紀には「て」字状、２段ナデ、１段ナデ面取り、１段ナデといったさまざまな口縁部形態が存在した。京都では、「て」字状口縁はＳＤ41Ｂ段階（ＳＥ176下層の前段階にあたる）、すなわち11世紀後半に消滅してしまうから、13世紀初頭に消滅する宇治地域とは消滅時期において１世紀以上のズレが存在することになる。２段ナデ口縁も小皿は12世紀後半、大皿は13世紀初頭まで存続しているから、12世紀前半で消滅する京都と比べるとこれもズレがある。一方で、１段ナデ・１段ナデ面取り口縁の京都系土師器は12世紀後半ごろと想定されている大和型第Ⅲ段階Ａ古型式や楠葉型Ⅱ-２期の椀と共伴する例（神楽田ＳＥ01、宇治市街［壱番29］ＳＫ200）があるので、その初現は京都とほとんど時期差はなく、また13世紀にも存続している点も差はない。そして、京都産土師器にみられる２段ナデ面取り口縁は、これまでのところ宇治地域では確実な例はみられない。これまでみてきた京都系土師器は、いずれの口縁部形態にしても京都産土師器を模倣したものであり、かつ比較的丁寧につくられたものが多いが、その存続期間（とくに消滅する時期）は京都の動向と軌を一にしていない。京都では11～12世紀段階に消滅する口縁部形態が、宇治地域ではなお存続していたのである。このような口縁部形態の変遷の不一致を、この地域の京都系土師器の特徴として指摘できる。

このような不一致は、14世紀以降になるとみられなくなる。13世紀までの資料と比べると京都系土師器の出土比率が高くなる傾向がうかがわれるものの、京都系土師器・非京都系土師器という構成そのものは前代と変わらない。しかし、器形や細部の形態はかなり忠実に模倣されるものが多くなり（ただし、胎土の質は明確に異なっている）、なにより器種組成における共通性の高さがきわだつようになる。13世紀以降顕在化する赤・白の色調差と、器種のヴァリエーションをも忠実に反映するようになるのである。14世紀以降の京都系土師器生産は、同時期の京都産土師器の特徴をおおむね受容していたということになる。12世紀前後の状況と比較するならば、むしろ中世後期以降のほうが京都産土師器の変化を忠実に模倣しているのである。

E. おわりに

既報告の一括資料をもとに、11～15世紀の宇治地域の土師器様相の変遷を素描してきた。資料が蓄積されてきた12世紀の状況については、いったん受容した京都産土師器の技術（口縁部形態）を、京都よりも長く保持しつづける傾向があったことを明らかにできた。資料が十分ではなく、まだ未解明の部分ものこされているが、ともあれ京都産土師器の製作技術を受容し、それに立脚しつつも、宇治地域独自の変遷をたどっていったことを指摘できた点はひとつの成果であろう。

灰白色系の京都系土師器の有無や胎土の質、非京都系土師器の形態などといった点で、木幡（北部）、宇治・白川（中部）、大久保（南西部）の資料には地域差がみとめられることも検討の過程で明らかとなった。これは土師器の生産集団の差異を反映している可能性が高いと推測されるが、資料に偏りのある現状ではこれらを編年に反映することは困難であった。今後の資料の増加をまってあらためて検討してゆきたい。

報告書一覧

平等院境内苑池	『史跡名勝平等院庭園保存整備報告書』、2003（平等院刊行）
平等院旧境内ＳＸ63	『平等院旧境内多宝塔推定地第2次発掘調査概報』（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第26集）、1995
平等院旧境内（南泉坊跡）	『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第41集』、1998
	『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第43集』、1999
白川金色院跡	『白川金色院跡発掘調査報告書』（宇治市文化財調査報告第5冊）、2003
宇治市街（妙楽160-１）	『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第１集』、1982
宇治市街（妙楽162）	『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第16集』、1990
宇治市街（壱番29）	『宇治市街遺跡第２次発掘調査概報』（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第８集）、1985
西浦	『西浦遺跡発掘調査概報』（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第30集）、1994
赤塚	『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第39集』、1997
三室戸寺子院跡	『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第14集』、1989
野神	『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第32集』、1995
神楽田	『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第１集』、1982
旦椋	『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第25集』、1994
西笠取	『西笠取遺跡発掘調査概報』（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第42集）、1998

Fig. 24の出典

１～５：平等院境内苑地（１・３・５は７次調査、２・４は６次調査）、６・７：平等院旧境内ＳＸ63、８・９：赤塚ＳＫ01、10～13：白川金色院跡地鎮遺構群（10・11はＳＸ4303、12・13はＳＸ4101）、14～17：宇治市街（妙楽162）ＳＥ02、18～20：宇治市街（里尻５）ＳＥ25、21：宇治市街（壱番29）ＳＫ200、22～28：宇治市街（妙楽160-１）ＳＥ01、29～31：宇治市街（里尻５）ＳＫ07、32・33：三室戸寺子院跡ＳＸ01、34～38：赤塚ＳＤ03、39～43：白川金色院跡SK1103、44～47：三室戸寺子院跡ＳＥ27、48～51：白川金色院跡ＳＸ6801

Tab. 4　報告書掲載遺物一覧表

個体番号	図版番号	写真図版番号	器種	器形	型式他	出土遺構	地区	実測番号	残存率	備考
1	PL.6		白磁	椀	Ⅴ1a類	SK01	C6	C246	10%	
2	PL.6		瓦器	Ⅲ		SD04	E4	093	30%	
3	PL.6		土師器	Ⅲ		SD04	E4	094	25%	
4	PL.6		白磁	Ⅲ	Ⅴ2a類	SD04	E4	C176	5%	
5	PL.6		白磁	椀	Ⅱ1類	SD04	E4	C187	5%	
6	PL.6		土師器	Ⅲ		SK05	C・D7	097	20%	
7	PL.6		土師器	Ⅲ		SK05	C・D7	096	20%	
8	PL.6		土師器	Ⅲ		SK05	C・D7	095	10%	
9	PL.6		瓦器	椀		SK05	C・D7	098	20%	
10	PL.6		中国陶器	天目茶碗		SK10	E6	249	10%	褐色釉
11	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	294	35%	
12	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	300	45%	
13	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	289	52%	
14	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	292	45%	
15	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	288	70%	
16	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	291	40%	
17	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	290	50%	
18	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	299	40%	
19	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	295	35%	
20	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	301	30%	
21	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	296	35%	
22	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	302	30%	
23	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	293	40%	
24	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	297	40%	
25	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	298	30%	
26	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	307	20%	
27	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E8	115	90%	
28	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	303	35%	
29	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	306	40%	
30	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	305	20%	
31	PL.6		土師器	Ⅲ		SK07	E7・8	304	35%	
32	PL.6		白磁	Ⅲ		SK07	E7	C058	50%	陰青，陰刻花文，被熱
33	PL.6		土師器	製塩土器		SK17	G6・7	267	10%	被熱
34	PL.6		土師器	Ⅲ		SK16	G7	101	30%	
35	PL.6		土師器	Ⅲ		SK16	G7	102	40%	
36	PL.6		土師器	Ⅲ		SK16	G7	103	50%	
37	PL.6		土師器	Ⅲ		SD21	F4	320	50%	
38	PL.6		土師器	Ⅲ		SD21	F4	324	75%	
39	PL.6		土師器	Ⅲ		SD21	F4	322	60%	
40	PL.6		土師器	Ⅲ		SD21	F4	325	40%	
41	PL.6		土師器	Ⅲ		SD21	F4	323	45%	
42	PL.6		土師器	Ⅲ		SD21	F4	321	20%	
43	PL.6		土師器	Ⅲ		SD21	F4	317	95%	
44	PL.6		土師器	Ⅲ		SD21	G5・6	319	30%	
45	PL.6		土師器	Ⅲ		SD21	G5・6	318	26%	ロクロ成形，糸切り底
46	PL.6		土師器	Ⅲ		SD21	F4	328	15%	
47	PL.6		土師器	Ⅲ		SD21	F4	326	25%	
48	PL.6		土師器	Ⅲ		SD21	F4	327	16%	
49	PL.6		白磁	椀	Ⅱ1類	SD21	F6	C229	3%	
50	PL.6		青磁	椀		SD21	F4	C041	20%	
51	PL.6		瓦器	火鉢	奈良火鉢	SD21	G4・5, F4	329	5%	方形，口縁部にスタンプ文
52	PL.6		瓦器	火鉢		SD21	F4, G4・5	330	10%	外面にスス付着
53	PL.6		瓦器	Ⅲ		SK29	H5	150	40%	被熱
54	PL.6		土師器	Ⅲ		SK29	H5	152	90%	
55	PL.6		土師器	Ⅲ		SK29	H5	153	95%	
56	PL.6		土師器	Ⅲ		SK29	H5	151	30%	
57	PL.6		土師器	Ⅲ		SK29	H5	154	30%	
58	PL.6		土師器	Ⅲ		SK29	H5	156	完形	口縁部に油スス付着
59	PL.6		土師器	Ⅲ		SK29	H5	155	15%	
60	PL.6		土師器	Ⅲ		SK29	H5	157	20%	
61	PL.6		青磁	椀	龍泉Ⅱ類	SK29	H5	C029	8%	
62	PL.6		青磁	椀	龍泉Ⅱ類	SK29	H5	C030	5%	H6区検出時に同一破片
63	PL.7		土師器	Ⅲ		SG14	E6～F7	144	30%	
64	PL.7		土師器	Ⅲ		SG14	E6～F7	143	50%	
65	PL.7		土師器	Ⅲ		SG14	E6～F7	145	20%	
66	PL.7	PL.32	土師器	Ⅲ		SG14	E6～F7	146	95%	
67	PL.7	PL.32	土師器	Ⅲ		SG14	F7	001	完形	口縁部に油スス付着

個体番号	図版番号	写真図版番号	器種	器形	型式他	出土遺構	地区	実測番号	残存率	備考
68	PL.7		土師器	皿		SG14	E6～F7	148	25%	
69	PL.7	PL.32	土師器	皿		SG14	E6～F7	147	95%	
70	PL.7	PL.32	土師器	ミニチュア桶		SG14	F7	003	完形	
71	PL.7	PL.32	土師器	ミニチュア桶		SG14	F7	004	完形	
72	PL.7		陶器	すり鉢	備前	SG14	F7	254	8%	
73	PL.7		陶器	すり鉢	信楽	SG14	F7	258	10%	被熱，使用痕
74	PL.7		陶器	すり鉢	信楽	SG14	F7	257	5%	外面にスス付着，使用痕
75	PL.7		青磁	杯	龍泉Ⅲ4類	SG14	F7	C035	2%	
76	PL.7		青磁	椀	線刻蓮弁文	SG14	F7	C033	5%	
77	PL.7		青磁	椀		SG14	E・F7	C038	5%	
78	PL.7		白磁	椀	Ⅴ類	SG14	F7	C113	30%	
79	PL.7	PL.32	白磁	椀	Ⅳ1a類	SG14	F7	C090	30%	SE25出土破片と接合
80	PL.7		中国陶器	壺		SG14	E6～F7	250	10%	
81	PL.7	PL.32	土師器	ミニチュア茶釜		SG14	E6～F7	005	完形	
82	PL.7	PL.32	土師器	ミニチュア壺		SG14	F7	002	85%	被熱
83	PL.7	PL.32	土師器	ミニチュア三足釜		SG14	E6～F7	011	20%	外面にスス付着
84	PL.7		瓦器	香炉		SG14	E6～F7	149	25%	内面にスス付着
85	PL.7	PL.32	瓦器	香炉		SG14	F7	009	完形	スタンプ文，内面にスス付着
86	PL.7		瓦器	火鉢		SG14	E・F7	255	5%	
87	PL.7		須恵器	鉢	東播系	SG14	F7	256	8%	
88	PL.7		土師器	皿		SD35	H2・3～G3	185	5%	ロクロ成形，糸切り底
89	PL.7		土師器	皿		SD35	H2・3～G3	183	15%	
90	PL.7		土師器	皿		SD35	H2・3～G3	182	22%	
91	PL.7		土師器	甕		SD35	H2・3～G3	184	15%	
92	PL.7		白磁	椀	Ⅴ4a類	SD35	H2・3～I2	C080	10%	SD43に同一破片
93	PL.7	PL.36	須恵器	鉢	東海系	SD35	H3	083	25%	
94	PL.7		青磁	大椀	同安Ⅰ1c類	SD35	H2・3	C353	3%	I2区に同一破片
95	PL.7		白磁	椀	Ⅱ類	SK24	G5	C107	15%	
96	PL.7		瓦器	香炉		SK24	G・H5	266	30%	
97	PL.7		瓦器	かまど		SK24	G5	264	10%	内面にスス付着
98	PL.7		瓦器	かまど		SK24	G5	265	20%	内面にスス付着
99	PL.8		青磁	椀	龍泉Ⅰ6a類	SK22	G5	C031	3%	
100	PL.8		須恵器	杯		SK23	G5	069	45%	
101	PL.8		土師器	皿		SD31	G4	158	完形	
102	PL.8		土師器	皿		SD31	G4	159	35%	
103	PL.8		白磁	皿	Ⅱ類	SD31	G4	C136	10%	
104	PL.8		土師器	皿		SK33	F・G3	165	45%	
105	PL.8		瓦器	椀	大和型第Ⅲ段階A新	SK33	F・G3	166	15%	
106	PL.8		土師器	皿		SE32	H・I5	160	20%	
107	PL.8		土師器	皿		SE32	H・I5	161	45%	混入品
108	PL.8		白磁	椀	Ⅴ1a類	SE32	H・I5	C247	8%	
109	PL.8		瓦器	椀	楠葉型Ⅰ期	SE32	H・I5	162	15%	
110	PL.8		土師器	皿		SK46	H・I2	170	30%	
111	PL.8	PL.35	土師器	皿		SK46	H・I2	168	完形	
112	PL.8		土師器	皿		SK46	H・I2	169	25%	
113	PL.8		土師器	皿		SK46	H・I2	172	20%	
114	PL.8		土師器	皿		SK46	H・I2	174	15%	
115	PL.8		土師器	皿		SK46	H・I2	173	10%	
116	PL.8	PL.32	土師器	皿		SE25	H5	179	50%	
117	PL.8		土師器	皿		SE25	H5	188	25%	
118	PL.8		土師器	皿		SE25	H5	189	30%	
119	PL.8		土師器	皿		SE25	G・H5	175	25%	
120	PL.8	PL.32	土師器	皿		SE25	G・H5	180	40%	
121	PL.8		土師器	皿		SE25	G・H5	187	15%	全面にスス付着，内面墨書様痕
122	PL.8		土師器	皿		SE25	G・H5	176	20%	
123	PL.8		土師器	皿		SE25	H5	186	10%	
124	PL.8		土師器	皿		SE25	H5	191	20%	
125	PL.8	PL.32	土師器	皿		SE25	G・H5	177	30%	
126	PL.8		土師器	皿		SE25	H5	190	5%	
127	PL.8	PL.32	土師器	皿		SE25	H5	181	15%	
128	PL.8	PL.32	土師器	皿		SE25	H5	178	25%	
129	PL.8	PL.32	瓦器	椀	大和型第Ⅱ段階B	SE25	H5	196	35%	
130	PL.8		白磁	皿	Ⅵa類	SE25	H5	C161	13%	
131	PL.8	PL.32	白磁	皿	Ⅱ類	SE25	H5	C132	8%	

個体番号	図版番号	写真図版番号	器種	器形	型式他	出土遺構	地区	実測番号	残存率	備考
132	PL.8	PL.32	白磁	Ⅲ	Ⅱ類	SE25	H5	C131	30%	J3区包含層に同一破片
133	PL.8	PL.32	土師器	台付耳Ⅲ		SE25	H5	010	60%	精良品
134	PL.8		白磁	椀	Ⅳ1b類	SE25	H5	C097	20%	外面にスス付着
135	PL.8	PL.32	白磁	壺		SE25	G・H5	C007	10%	排土中出土破片と接合
136	PL.8	PL.32	白磁	椀	Ⅴ類	SE25	G・H5	C252	8%	
137	PL.8	PL.32	灰釉陶器	椀		SE25	G・H5	192	25%	
138	PL.8		灰釉陶器	壺		SE25	G・H5	071	5%	
139	PL.8		須恵器	甕		SE25	H5	242	10%	
140	PL.8		須恵器	鉢		SE25	H5	193	10%	内面使用痕顕著
141	PL.8	PL.32	灰釉陶器	長頸壺		SE25	G・H5	070	15%	SD43・H5区・I2区・H・G区出土破片と接合，被熱
142	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	278	20%	
143	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	275	60%	
144	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	283	40%	
145	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	280	35%	
146	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	282	20%	
147	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	277	35%	
148	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	286	35%	被熱
149	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	279	20%	
150	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	276	35%	
151	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	105	完形	
152	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	104	完形	被熱
153	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	285	30%	
154	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	284	40%	
155	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	271	15%	
156	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	269	15%	
157	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	272	20%	
158	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	273	15%	被熱
159	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	268	35%	口縁部に油スス付着
160	PL.9		土師器	Ⅲ		SK30	G3・4	270	30%	
161	PL.9		白磁	椀	Ⅱ1類	SK30	G3・4	C106	5%	
162	PL.9		瓦器	椀	大和型第Ⅲ段階A	SK30	G3・4	015	70%	
163	PL.9		瓦器	椀	大和型第Ⅲ段階A新～B	SK30	G3・4	274	15%	被熱
164	PL.9		瓦器	椀	大和型第Ⅲ段階A古	SK30	G3・4	247	10%	
165	PL.9		瓦器	椀	大和型第Ⅱ段階B～第Ⅲ段階A古	SK30	G3・4	248	10%	
166	PL.9		瓦器	椀	楠葉型？	SK30	G3・4	287	55%	被熱
167	PL.9		土師器	Ⅲ		SK34	G・H4	163	30%	
168	PL.9		土師器	Ⅲ		SK34	G・H4	116	40%	
169	PL.9		土師器	Ⅲ		SK34	G・H4	164	10%	
170	PL.9		白磁	Ⅲ	Ⅵ1b類	SK48	I3	C149	15%	
171	PL.9		白磁	Ⅲ	Ⅵb類	SK48	I3	C150	5%	
172	PL.9		白磁	Ⅲ	Ⅵ類	SK48	I3	C159	5%	
173	PL.9		土師器	Ⅲ		SK48	I3	245	30%	
174	PL.9		土師器	Ⅲ		SK48	I3	244	30%	
175	PL.9		土師器	Ⅲ		SK48	I3	246	10%	
176	PL.9		土師器	Ⅲ		SK44	J1・2	339	85%	
177	PL.9	PL.33	土師器	Ⅲ		SK44	J1・2	340	75%	
178	PL.9	PL.33	土師器	Ⅲ		SK44	J1・2	342	60%	
179	PL.9	PL.33	土師器	Ⅲ		SK44	J1・2	341	70%	
180	PL.9		土師器	Ⅲ		SK44	J1・2	348	35%	
181	PL.9		土師器	Ⅲ		SK44	J1・2	350	20%	
182	PL.9	PL.33	土師器	Ⅲ		SK44	J1・2	352	55%	
183	PL.9	PL.33	瓦器	ミニチュア椀		SK44	J1・2	007	95%	
184	PL.9	PL.33	瓦器	ミニチュア椀		SK44	J1・2	006	95%	
185	PL.9	PL.33	瓦器	Ⅲ		SK44	J1・2	008	98%	
186	PL.9		瓦器	椀	大和型第Ⅲ段階A新～B	SK44	J2	263	20%	
187	PL.9		瓦器	椀	楠葉型Ⅱ-3期～	SK44	J2	262	25%	
188	PL.9	PL.33	瓦器	椀	大和型第Ⅲ段階A新	SK44	J2	260	40%	
189	PL.9	PL.33	瓦器	椀	大和型第Ⅲ段階A新～B？	SK44	J2	261	40%	
190	PL.9		白磁	椀	Ⅴ4b類	SK44	J1・2	C082	20%	
191	PL.9		白磁	椀	Ⅳ類	SK44	J2	C221	3%	I1区出土破片と接合

個体番号	図版番号	写真図版番号	器種	器形	型式他	出土遺構	地区	実測番号	残存率	備考
192	PL.9		白磁	椀	Ⅱ1類	SK44	J1・2	C186	8%	SD21・I2区包含層出土破片と接合
193	PL.9	PL.33	須恵器	鉢	東幡系	SK44	J2	243	50%	糸切り底
194	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	206	40%	被熱
195	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	203	30%	
196	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	204	25%	
197	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	209	25%	
198	PL.10	PL.33	土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	197	50%	
199	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	210	35%	
200	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	205	20%	被熱
201	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	208	25%	
202	PL.10	PL.33	土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	198	45%	
203	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	207	20%	被熱
204	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	213	15%	被熱
205	PL.10	PL.33	土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	199	30%	
206	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	223	80%	
207	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	211	20%	
208	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	212	25%	
209	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	200	15%	
210	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	201	18%	
211	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	202	16%	
212	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	J2	396	5%	
213	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	221	10%	
214	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	215	20%	
215	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	216	18%	被熱
216	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	220	15%	
217	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I2～J3	120	10%	
218	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	218	20%	
219	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	219	15%	
220	PL.10	PL.33	土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	214	40%	
221	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	217	20%	
222	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	397	10%	
223	PL.10		土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	222	13%	
224	PL.10	PL.33	白磁	椀	Ⅳ類	SD43	I・J2	C218	5%	
225	PL.10	PL.33	白磁	椀	Ⅱ1類	SD43	I・J2	C206	3%	
226	PL.10		白磁	椀	Ⅳ類	SD43	I・J2	C211	5%	
227	PL.10	PL.33	白磁	椀	Ⅴ1a類	SD43	I1	C245	25%	被熱
228	PL.10	PL.33	白磁	椀	Ⅷ2類	SD43	I・J2	C121	20%	試掘中出土破片に同一個体
229	PL.10		白磁	椀	Ⅴ4b類	SD43	I・J2	C070	3%	
230	PL.10	PL.33	白磁	壺	四耳壺？	SD43	I・J2	C002	5%	
231	PL.10	PL.33	瓦器	Ⅲ		SD43	I・J2	226	50%	
232	PL.10	PL.33	瓦器	Ⅲ		SD43	I・J2	225	55%	
233	PL.10		瓦器	Ⅲ		SD43	I・J2	224	20%	
234	PL.10		瓦器	Ⅲ		SD43	I・J2	227	30%	
235	PL.10	PL.33	瓦器	椀	楠葉型Ⅲ-1期	SD43	I・J2	228	20%	
236	PL.10	PL.33	瓦器	椀	大和型第Ⅲ段階A新	SD43	I・J2	229	20%	
237	PL.10	PL.33	土師器	Ⅲ		SD43	I・J2	230	35%	ロクロ成形，糸切り底
238	PL.10	PL.33	須恵器	鉢	東幡系	SD43	I・J2	251	20%	外面にスス付着，糸切り底状
239	PL.10		須恵器	鉢	東幡系	SD43	I・J2	252	5%	
240	PL.10		土師器	羽釜		SD43	I・J2	259	5%	外面にスス付着
241	PL.10	PL.33	土師器	羽釜		SD43	I・J2	231	20%	SK44に同一破片，外面にスス付着
242	PL.10		土師器	羽釜		SD43	I・J2	253	10%	外面にスス付着
243	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	I・J1	369	75%	
244	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	I・J1	343	8%	
245	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	I・J1	370	20%	
246	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	I・J1	365	35%	
247	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	I・J1	358	30%	
248	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	I・J1	347	45%	
249	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	I・J1	360	30%	
250	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	I・J1	359	35%	
251	PL.11	PL.34	土師器	Ⅲ		SK45	I・J1	354	80%	
252	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	I・J1	346	65%	
253	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	I・J1	376	35%	
254	PL.11	PL.34	土師器	Ⅲ		SK45	I・J1	013	完形	

個体番号	図版番号	写真図版番号	器種	器形	型式他	出土遺構	地区	実測番号	残存率	備考
255	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	345	85%	外面にスス付着
256	PL.11	PL.34	土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	344	70%	
257	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	375	30%	
258	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	377	20%	
259	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	367	40%	
260	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	357	35%	
261	PL.11	PL.34	土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	012	完形	
262	PL.11	PL.34	土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	014	完形	
263	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	353	55%	
264	PL.11	PL.34	土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	351	85%	
265	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	355	50%	
266	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	364	40%	
267	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	368	45%	
268	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	379	10%	
269	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	383	40%	
270	PL.11	PL.34	土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	362	85%	
271	PL.11	PL.34	土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	363	95%	
272	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	381	15%	
273	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	380	15%	
274	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	374	45%	
275	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	372	35%	
276	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	371	60%	
277	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	382	25%	
278	PL.11	PL.34	土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	361	80%	
279	PL.11	PL.34	土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	356	80%	
280	PL.11		土師器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	373	45%	
281	PL.11	PL.34	白磁	Ⅲ	Ⅲ2類	SK45	Ⅰ・J1	C130	45%	被熱
282	PL.11		白磁	Ⅲ	Ⅱ類	SK45	Ⅰ・J1	C137	5%	被熱
283	PL.11	PL.34	白磁	椀	Ⅱ1類	SK45	I1	C109	15%	
284	PL.11	PL.34	白磁	椀	Ⅳ1a類	SK45	I1	C089	30%	Ⅰ2区包含層出土破片と接合
285	PL.11		白磁	椀	Ⅳ類	SK45	I1	C079	5%	
286	PL.11	PL.34	瓦器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	331	60%	
287	PL.11		瓦器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	332	30%	
288	PL.11		瓦器	Ⅲ		SK45	Ⅰ・J1	333	18%	
289	PL.11	PL.34	瓦器	椀	楠葉型Ⅱ-3期	SK45	Ⅰ・J1	338	20%	
290	PL.11	PL.34	瓦器	椀	楠葉型Ⅱ-3期	SK45	Ⅰ・J1	334	20%	
291	PL.11	PL.34	瓦器	椀	大和型第Ⅲ段階A新？	SK45	J1	335	40%	
292	PL.11	PL.34	瓦器	椀	楠葉型Ⅲ-1期	SK45	Ⅰ・J1	016	70%	
293	PL.11	PL.34	瓦器	椀	楠葉型Ⅲ-1期	SK45	Ⅰ・J1	336	25%	
294	PL.11	PL.34	瓦器	椀	楠葉型Ⅱ-3期	SK45	Ⅰ・J1	337	15%	
295	PL.11	PL.34	須恵器	甕		SK45	J1	233	5%	
296	PL.11		土師器	羽釜		SK45	Ⅰ・J1	232	5%	外面にスス付着
297	PL.11		瓦器	火舎		SK45	Ⅰ・J1	234	5%	
298	PL.12		土師器	高杯		SD49	C7	384	10%	
299	PL.12	PL.35	土師器	小型丸底壺		SD49	C6～F4	194	75%	底部に二つの穿孔，黒
300	PL.12	PL.35	土師器	甕		SD49	C6～F4	195	70%	
301	PL.12		土師器	甕	布留式	SD49	E5	385	20%	試掘出土
302	PL.12	PL.35	土師器	甕		SD49	D6	386	30%	黒斑あり
303	PL.12		白磁	Ⅲ	Ⅳ2a類	SK51	E6	058	20%	1片出土
304	PL.12		白磁	Ⅲ	Ⅳ2a類	SK51	E6	056	40%	4片出土，接合後2片，被熱
305	PL.12		白磁	Ⅲ	Ⅳ1b類	SK51	E6	057	50%	6片出土，接合後3片，E6P14出土破片と接合
306	PL.12		白磁	輪花Ⅲ	Ⅳ2a類	SK51	E6	061	30%	7片出土，接合後5片，被熱，陰青
307	PL.12		白磁	輪花Ⅲ	Ⅳ2b類	SK51	E6	062	20%	6片出土，接合後4片，被熱，陰青
308	PL.12		白磁	輪花Ⅲ	Ⅳ2b類	SK51	E6	060	30%	9片出土，接合後6片，被熱，陰青
309	PL.12		白磁	椀	Ⅴ4b類	SK51	E6	053	20%	2片出土，接合後1片，被熱
310	PL.12		青磁	大椀	龍泉・同安0類	SK51	E6	029	20%	13片出土，接合後6片，E6P14出土破片と接合
311	PL.12		青磁	椀	同安Ⅰ1b類	SK51	E6	028	30%	3片出土，被熱，E6P14に同一破片

個体番号	図版番号	写真図版番号	器種	器形	型式他	出土遺構	地区	実測番号	残存率	備考
312	PL.12		青磁	椀	同安Ⅰ1a類	SK51	E6	027	60%	4片出土，接合後3片，被熱
313	PL.12		白磁	椀	Ⅳ1a類	SK51	E6	054	30%	4片出土，接合後3片，被熱
314	PL.12		白磁	椀	Ⅴ4a類	SK51	E6	055	10%	4片出土
315	PL.12		白磁	椀	Ⅴ4a類	SK51	E6	049	30%	7片出土，接合後3片，被熱，G5区包含層出土破片と接合
316	PL.12		白磁	壺	Ⅲ1類	SK51	E6	063	5%	
317	PL.12		須恵器	壺		SK51	E6	065	5%	外面墨掛け
318	PL.12		陶器	大甕	渥美	SK51	E6	025		
319	PL.12		陶器	大甕		SK51	E6	026	5%	D6区包含層出土破片と接合，混入品か
320	PL.13		白磁	椀	Ⅱ1類	P1	C7	C205	8%	
321	PL.13		白磁	皿		P11	C7	C177	30%	
322	PL.13		土師器	皿		P1	D5	131	50%	
323	PL.13		土師器	皿		P4	D6	130	50%	
324	PL.13		土師器	皿		P13	D5	134	35%	
325	PL.13		土師器	皿		P6	D6	132	40%	
326	PL.13		須恵器	杯蓋		P14	D7	078	20%	
327	PL.13	PL.35	土師器	皿		P24	D7	127	完形	
328	PL.13		土師器	盤		P22	D6	117	10%	
329	PL.13		須恵器	甕		P16	D5	387	30%	
330	PL.13		土師器	土馬		P14	E6	086	20%	
331	PL.13	PL.36	青磁	椀	線刻蓮弁文	P22	E6	C032	5%	
332	PL.13		白磁	四耳壺		P14	E6	064	5%	
333	PL.13	PL.36	白磁	合子蓋		P24	E6	C347	40%	陰青，E6P25出土破片と接合
334	PL.13	PL.35	土師器	皿		P12	E7	126	80%	
335	PL.13		瓦器	椀	楠葉型Ⅰ-2期	P12	E7	111	15%	
336	PL.13	PL.35	土師器	皿		P1	F3	122	95%	
337	PL.13		白磁	椀	Ⅳ2a類	P2	F3	C102	10%	
338	PL.13	PL.35	土師器	皿		P15	F5	121	95%	
339	PL.13		瓦器	椀	楠葉型Ⅰ-2期	P6	G3	109	20%	
340	PL.13	PL.36	白磁	椀	Ⅴ2a類	P3	G4	C111	40%	
341	PL.13		瓦器	椀	楠葉型Ⅱ-1期	P14	G4	113	10%	
342	PL.13		白磁	椀	Ⅴ2a類	P27	G4	C251	5%	
343	PL.13		土師器	皿		P37	G4	118	30%	被熱
344	PL.13		土師器	皿		P37	G4	119	45%	被熱
345	PL.13		陶器	甕		P29	G4	084	30%	
346	PL.13	PL.35	土師器	皿		P5	G5	125	90%	
347	PL.13		土師器	皿		P7	G5	133	15%	
348	PL.13		黒色土器	椀	A類	P11	G5	106	25%	
349	PL.13		瓦器	椀	楠葉型Ⅰ-3期	P4	G6	112	15%	
350	PL.13	PL.35	土師器	皿		P22	G6	124	完形	
351	PL.13		白磁	椀	Ⅳ類	P22	G6	C209	20%	SE25出土破片と接合
352	PL.13		白磁	壺		P24	G6	C001	5%	表土・SGI4出土破片と接合
353	PL.13		瓦器	鍋		P24	G6	085	20%	包含層に同一破片
354	PL.13		黒色土器	椀	B類	P4	K3	107	20%	外面にスス付着
355	PL.13	PL.36	須恵器	鉢	東海系	P2	K2	081	40%	包含層出土破片と接合，内底面使用痕
356	PL.13	PL.36	須恵器	鉢	東播系	P1	K2	080	20%	使用痕
357	PL.14	PL.36	瓦器	椀	大和型第Ⅰ段階B	P11	H2	110	20%	
358	PL.14		土師器	皿		P16	H4	128	70%	
359	PL.14		白磁	椀	Ⅷ2類	P30	H4	C256	10%	
360	PL.14		白磁	椀	Ⅴ4b類	P30	H4	C081 C086	4%	
361	PL.14	PL.35	土師器	皿		P31	H4	123	完形	被熱
362	PL.14	PL.35	土師器	蓋		P31	H4	099	完形	黒斑あり
363	PL.14		土師器	皿		P2	H5	129	50%	
364	PL.14		須恵器	椀		P2	H5	079	40%	糸切り底
365	PL.14	PL.36	黒色土器	椀	B類	P10	H5	100	75%	
366	PL.14		灰釉陶器	椀		P15	H5	398	20%	
367	PL.14		土師器	皿		P2	I1	400	40%	
368	PL.14		土師器	皿		P2	I1	138	50%	内面にスス付着
369	PL.14	PL.35	土師器	皿		P2	I1	137	完形	内面にスス付着
370	PL.14		土師器	皿		P2	I1	399	30%	外面にスス付着

個体番号	図版番号	写真図版番号	器種	器形	型式他	出土遺構	地区	実測番号	残存率	備考
371	PL.14		土師器	Ⅲ		P2	I1	139	50%	
372	PL.14	PL.35	土師器	Ⅲ		P2	I1	136	完形	
373	PL.14		須恵器	杯		P3	I3	077	40%	
374	PL.14		土師器	Ⅲ		P9	I5	135	20%	
375	PL.14		白磁	椀	Ⅳ類	P17	I4	C208	20%	I3区包含層・H4P42に同一破片
376	PL.14	PL.36	瓦器	椀	楠葉型Ⅱ-2期	P3	J2	108	40%	
377	PL.14		白磁	Ⅲ	Ⅲ1類		表土掘削中	C128	15%	
378	PL.14		白磁	Ⅲ	Ⅵ2b類		I2包含層	C125	60%	I3・4区包含層出土破片と接合
379	PL.14		白磁	Ⅲ	Ⅱ類		F4検出時	C134	8%	
380	PL.14		白磁	Ⅲ	Ⅵ1b類		I2包含層	C148	60%	全体にスス付着
381	PL.14		青磁	椀	龍泉Ⅱc類		B6北西側壁近く	C028	25%	
382	PL.14		白磁	椀	Ⅱ類		G5包含層	C104	15%	
383	PL.14		白磁	椀	Ⅱ類		I3検出時	C103	20%	
384	PL.14		青磁	鉢			I1断割り時	C122	10%	I1区検出時に同一破片
385	PL.14		白磁	椀	Ⅳ2a類		I2褐色土	C099	20%	H4区包含層・F4区検出時出土破片と接合
386	PL.14		白磁	椀	Ⅴ2a類		J2包含層	C250	15%	J2区検出時出土破片と接合
387	PL.14		白磁	椀	Ⅴ4a類		I2包含層	C078	5%	
388	PL.14		白磁	椀	Ⅴ4b類		H3検出時	C068	2%	
389	PL.14		白磁	椀	Ⅴ4b類		表土掘削中	C069	8%	
390	PL.14		白磁	椀	Ⅴ4a類		F4検出時	C074	3%	
391	PL.14		白磁	椀	Ⅴ4a類		F6褐色土	C076	2%	
392	PL.14		白磁	椀	Ⅳ類		J1包含層	C214	5%	
393	PL.14		白磁	椀	Ⅳ類		表土掘削中	C210	10%	
394	PL.14		白磁	椀	Ⅳ類		褐色土包含層	C213	5%	
395	PL.14		青磁	壷	越州か		G6検出時	C004	3%	
396	PL.14		白磁	壷			I2褐色土	C009	5%	
397	PL.14		白磁	壷			表土掘削中	C006	5%	C26と同一か
398	PL.14		土師器	Ⅲ			表土掘削中	310	40%	
399	PL.14		土師器	Ⅲ			表土掘削中	309	45%	
400	PL.14		須恵器	杯	TK209		F7包含層	066	10%	
401	PL.14		須恵器	杯	TK209		I3・4包含層	068	10%	
402	PL.14		須恵器	杯			表土掘削中	073	30%	
403	PL.14		須恵器	杯			G5包含層	072	40%	
404	PL.14		土師器	椀			表土掘削中	311	45%	近世か
405	PL.14		瓦器	すり鉢			包含層（表土）	142	30%	
406	PL.14		瓦器	茶釜			包含層	140	20%	把手に鉄環痕跡
407	PL.15	PL.36	瓦	軒平瓦	南都系	SE25	H5	017		薬師寺に同笵有り，被熱，スス付着
408	PL.15	PL.36	瓦	軒平瓦	河内系		I1中世包含層	022		平等院NH059と同文，被熱
409	PL.15	PL.36	瓦	軒平瓦	河内系	SG14	F7	020		下居遺跡に同笵有り，スス付着
410	PL.15	PL.36	瓦	軒平瓦	河内系	SK44	J1・2	018		平等院NH057系と同文，被熱
411	PL.15	PL.36	瓦	軒平瓦	河内系		G4・5褐色包含層	019		平等院NH063と同笵
412	PL.15		瓦	軒平瓦			E8表土	021		
413	PL.15		瓦	平瓦	Aa類	SK10	E6	031		表面にスス付着，焼け痕
414	PL.15		瓦	平瓦	Aa類	SK45	I1	034		
415	PL.15		瓦	平瓦	Aa類	SD43	I・J2	030		
416	PL.15		瓦	平瓦	Ab類	SE25	H5	036		表面にスス付着
417	PL.15		瓦	平瓦	Ab類	SD43	I・J2	037		表面にスス付着
418	PL.15		瓦	平瓦	Ac類	SK10	E6	041		
419	PL.15		瓦	平瓦	Bd類	SE25	H5	046		
420	PL.15		瓦	平瓦	Ba類	P22	D6	043		
421	PL.15		瓦	平瓦	Bb類		F6褐色包含層	044		
422	PL.15		瓦	平瓦	Bc類	SD43	J1～I・J2	045		
423	PL.15		瓦	平瓦	Be類		G4	092		
424	PL.16		瓦	平瓦	C類	SG14	F7	047		
425	PL.16		瓦	平瓦	E類	SG14	F7	052		被熱
426	PL.16		瓦	平瓦	D類	SG14	F7	050		被熱
427	PL.16		瓦	平瓦	D類	SG14	F7	051		表面にスス付着
428	PL.16		瓦	丸瓦	A類	SE25	H5	087		被熱
429	PL.16		瓦	丸瓦	B類	SG14	F7	088		内面にスス付着
430	PL.16		瓦	丸瓦	C類	SD21	F4	090		内面にスス付着

個体番号	図版番号	写真図版番号	器種	器形	型式他	出土遺構	地区	実測番号	残存率	備考
431	PL. 16		瓦	丸瓦	B類	SK51	E6	089		
432	PL. 16	PL. 36	瓦	不明		SG14	E6～F7	024		
433	PL. 16	PL. 36	瓦	不明			褐色土包含層	023		
434	PL. 17	PL. 37	石製品	砥石			包含層	236		荒砥？　砂岩
435	PL. 17	PL. 37	石製品	砥石		SG14	F7	394		仕上げ砥？　チャート
436	PL. 17	PL. 37	石製品	砥石		P6	G5	237		仕上げ砥？　頁岩
437	PL. 17	PL. 37	石製品	砥石		SK45	I・J1	391		荒砥？　砂岩
438	PL. 17	PL. 37	石製品	砥石			I3・4包含層	239		中砥？　砂岩
439	PL. 17	PL. 37	石製品	砥石			包含層	238		仕上げ砥？　泥岩
440	PL. 17	PL. 37	石製品	砥石			包含層	235		仕上げ砥？　頁岩
441	PL. 17	PL. 37	石製品	砥石		SD36	I3	388		荒砥？　砂岩
442	PL. 17	PL. 37	石製品	石鍋		SK07	E7・8	395		滑石
443	PL. 17	PL. 37	石製品	石鍋		SG14	F7	393		滑石
444	PL. 17	PL. 37	石製品	不明石製品		SG14	F7	392		滑石，石鍋再利用
445	PL. 17	PL. 37	瓦	硯		SD31	G4	241		内面に墨付着
446	PL. 17	PL. 37	石製品	硯			包含層	240		頁岩，表面に墨付着
447	PL. 17		石製品	部材片		SE32	I5	390		凝灰岩，焼痕有り
448	PL. 17		石製品	部材片		SE32	I5	389		凝灰岩，焼痕有り
449	PL. 17	PL. 37	鉄製品	鍋		P12	D6	082		
450	Fig. 12		土師器	塩壷			包含層	316	70%	
451	Fig. 12		土師器	皿			包含層	312	65%	
452	Fig. 12		土師器	皿			包含層	315	30%	
453	Fig. 12		土師器	皿			包含層	314	70%	
454	Fig. 12		土師器	皿			包含層	313	70%	
455		PL. 35	土師器	皿		SK46	H・I2	167	90%	写真のみ
456		PL. 36	須恵器	鉢		P11	C7	実測無し		写真のみ

Tab. 5　遺構別出土平瓦型式一覧表

	Aa 縄叩 (5-7/cm)	Ab 縄叩 (3-4/cm)	Ac 縄叩 (1-2/cm)	B 幾何学文	C 離れ砂	D ナデ	E 糸切り	合計
D 2			1					1
D 6 P22				1		1		2
D 7 P10	1							1
D 7 P12		1						1
D 7, 8		1						1
E 6 P22		1						1
F 4 P22				1				1
F 4 P 5		1						1
F 5						3		3
F 6				1				1
F 7						1		1
F 7 P 2						1		1
F 8 P 2		1				1		2
G 4				1		1		2
G-4 P24	1							1
G 5	1	1			1			3
H 2		1						1
H-2 P 8	2							2
H 4	1							1
H 4 P30	1							1
H 6 P 4	1							1
I 2	1					1		2
J 2		2						2
SD05	1							1
SD21	1				1	3		5
SD43	6	8	1	2				17
SE25	4	3		1		2	1	11
SG14	12	9			3	11	1	36
SK07	1			1				2
SK10	2		1	1				4
SK13						2		2
SK22						4		4
SK23	2	1	1			5		9
SK24	2	2				2		6
SK26	1							1
SK31	1							1
SK33				1				1
SK44							1	1
SK45	5			1	1			7
表記なし	3							3
表土	2					1		3
合計	52	32	4	11	6	39	3	147

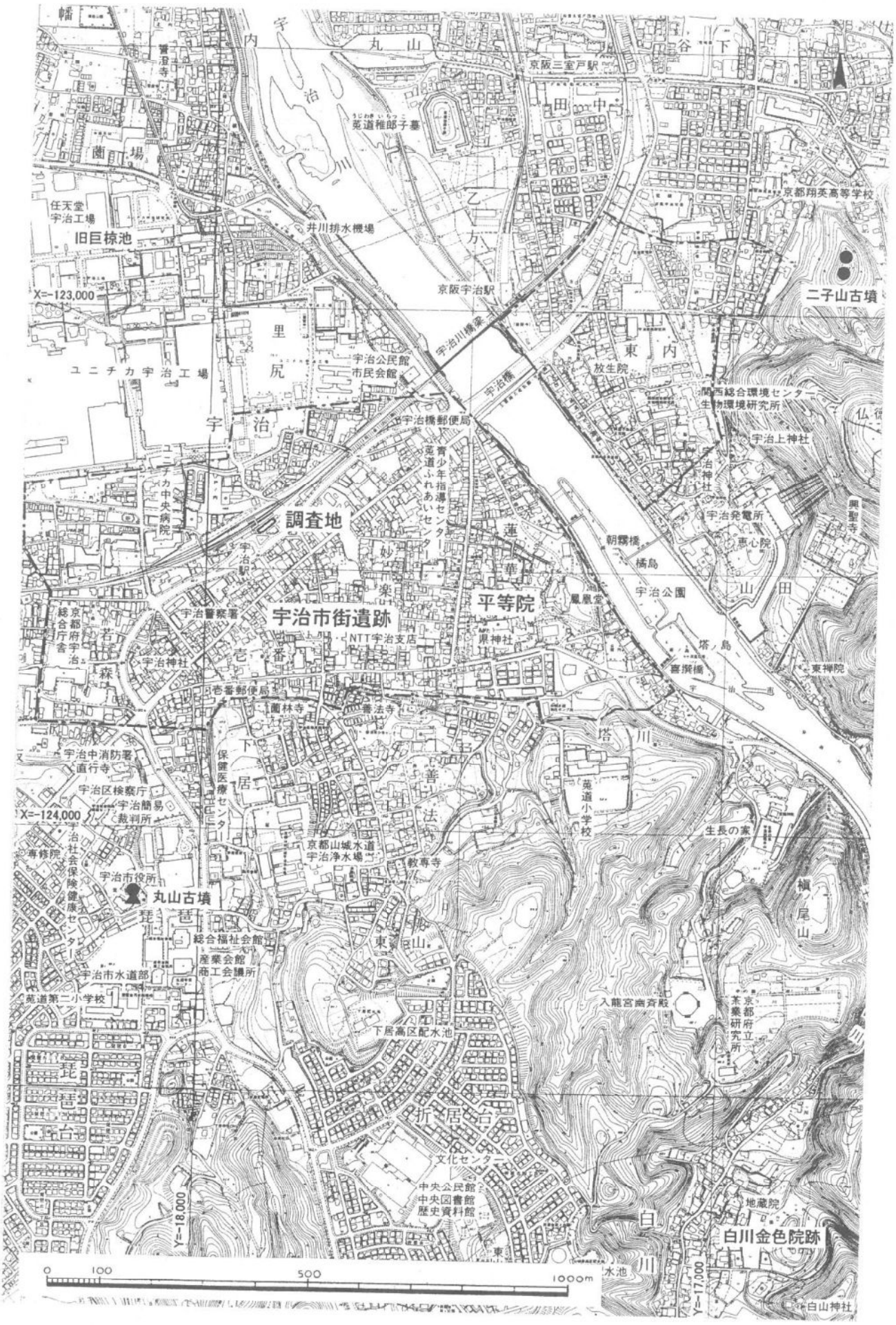
図　面　図　版

遺跡の位置関係図……ＰＬ．１・２

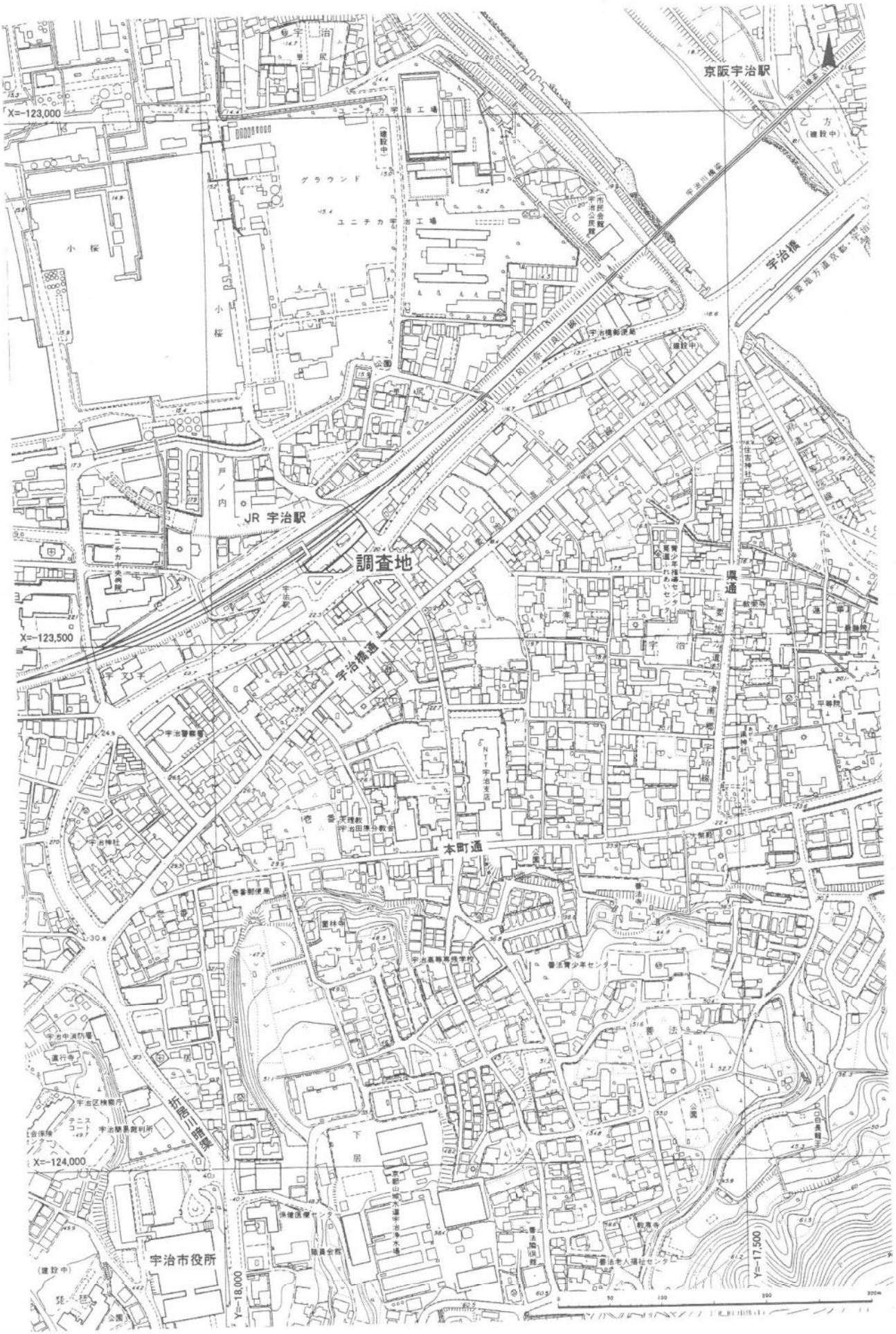
遺構実測図……ＰＬ．３～５

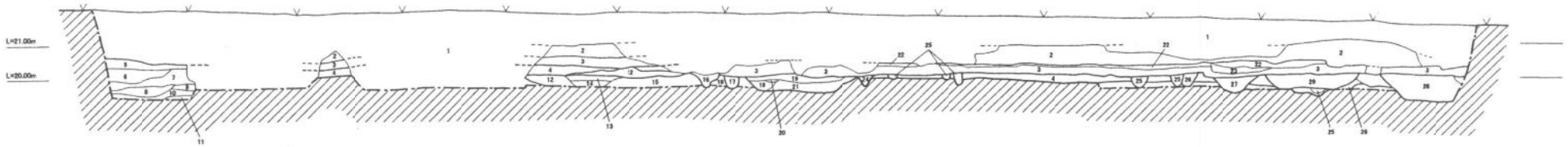
出土土器実測図……ＰＬ．６～14

出土瓦実測図他……ＰＬ．15～17

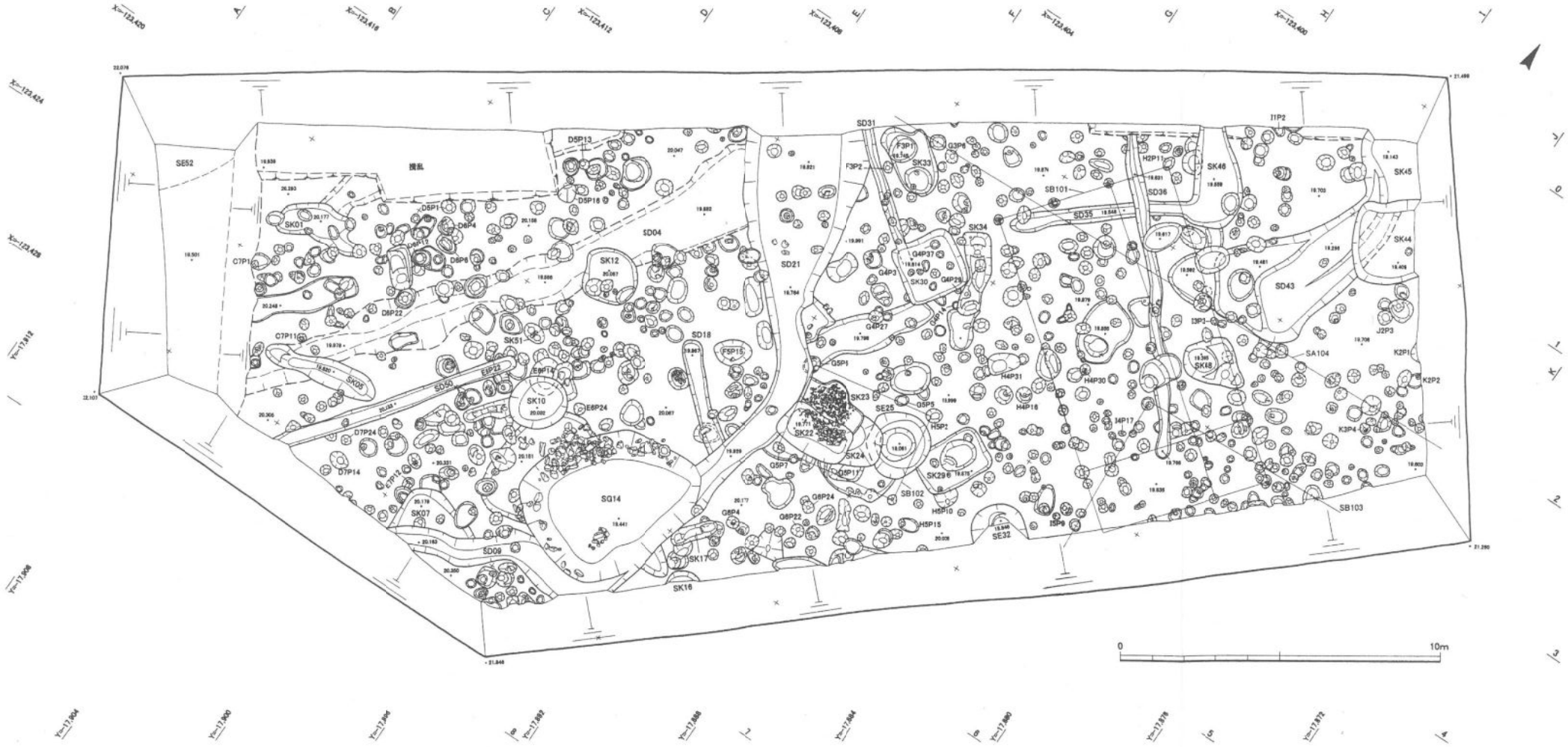

宇治市街遺跡
調査地
平等院
丸山古墳
二子山古墳
白川金色院跡
旧巨椋池
京阪宇治駅
京阪三室戸駅
宇治橋郵便局
宇治公民館
市民会館
宇治警察署
宇治神社
宇治上神社
宇治発電所
宇治公園
宇治中消防署
宇治区検察庁
宇治簡易裁判所
宇治市役所
宇治市水道部
総合福祉会館
産業会館
商工会議所
宇治中央病院
ユニチカ宇治工場
京都翔英高等学校
入龍宮幽斉殿
宇治川橋梁
宇治橋
X=-123,000
X=-124,000
Y=-118,000
Y=-117,000
0
100
500
1000m

ＰＬ．２　　調査地周辺地形図

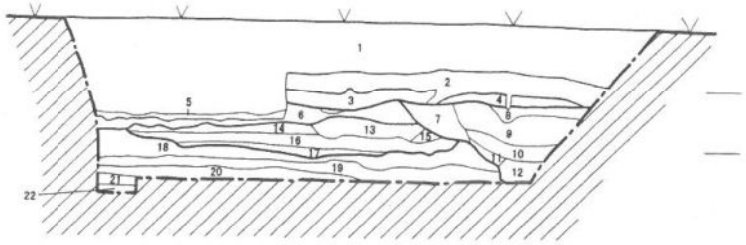


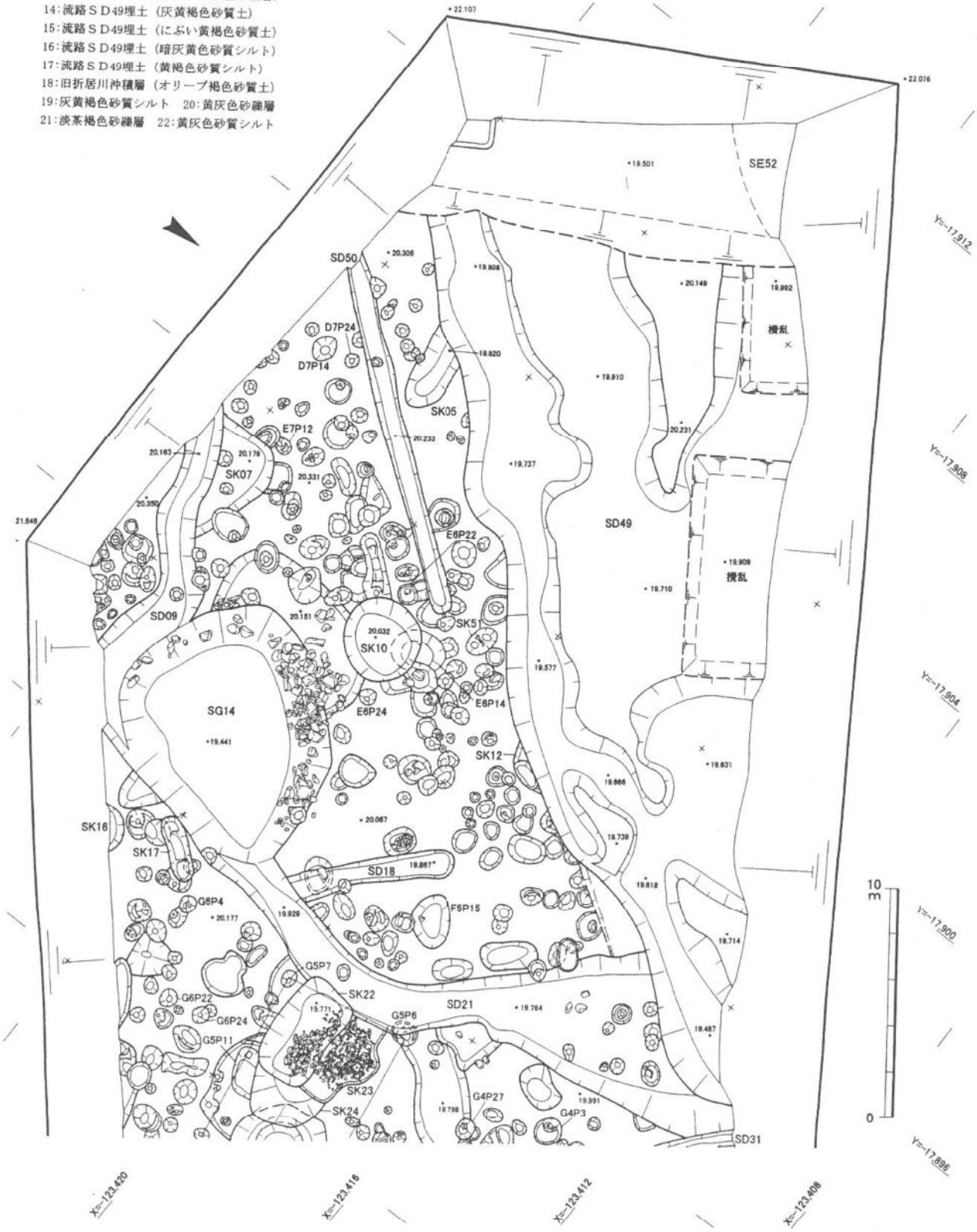


1：現代盛土　2：旧駅ホーム盛土　3：茶畑耕作土（黒褐色砂質シルト）　4：遺物包含層（黒褐色砂質土）　5：井戸ＳＥ52埋土（黒褐色砂質土）　6：井戸ＳＥ52埋土（暗褐色砂質土）　7：井戸ＳＥ52埋土（にぶい黄褐色砂質土）
8：井戸ＳＥ52埋土（褐灰色砂質シルト）　9：井戸ＳＥ52埋土（にぶい黄褐色砂質土）　10：井戸ＳＥ52埋土（にぶい黄色砂質土）　11：井戸ＳＥ52埋土（灰黄色砂質土）　12：流路ＳＤ49埋土（黒褐色砂礫層）
13：流路ＳＤ49埋土（浅黄色砂質シルト）　14：流路ＳＤ49埋土（灰黄色砂質シルト）　15：流路ＳＤ49埋土（灰黄褐色砂礫層）　16：柱穴埋土（黒色砂質土）　17：柱穴埋土（暗褐色砂質土）　18：溝ＳＤ21埋土（黄褐色砂質土）
19：溝ＳＤ21埋土（灰黄褐色砂質土）　20：溝ＳＤ21埋土（灰黄褐色砂質土）　21：溝ＳＤ21埋土（黒褐色砂質土）　22：茶畑耕作土（褐灰色砂質土）　23：茶畑耕作土（灰黄色砂質シルト）　24：溝ＳＤ31埋土（暗灰黄色砂質土）
25：柱穴埋土（暗褐色砂質土）　26：柱穴埋土（黒褐色砂質土）　27：土坑ＳＫ46埋土（暗褐色砂質土）　28：土坑ＳＫ45埋土（褐色砂質土）　29：黒褐色砂質土

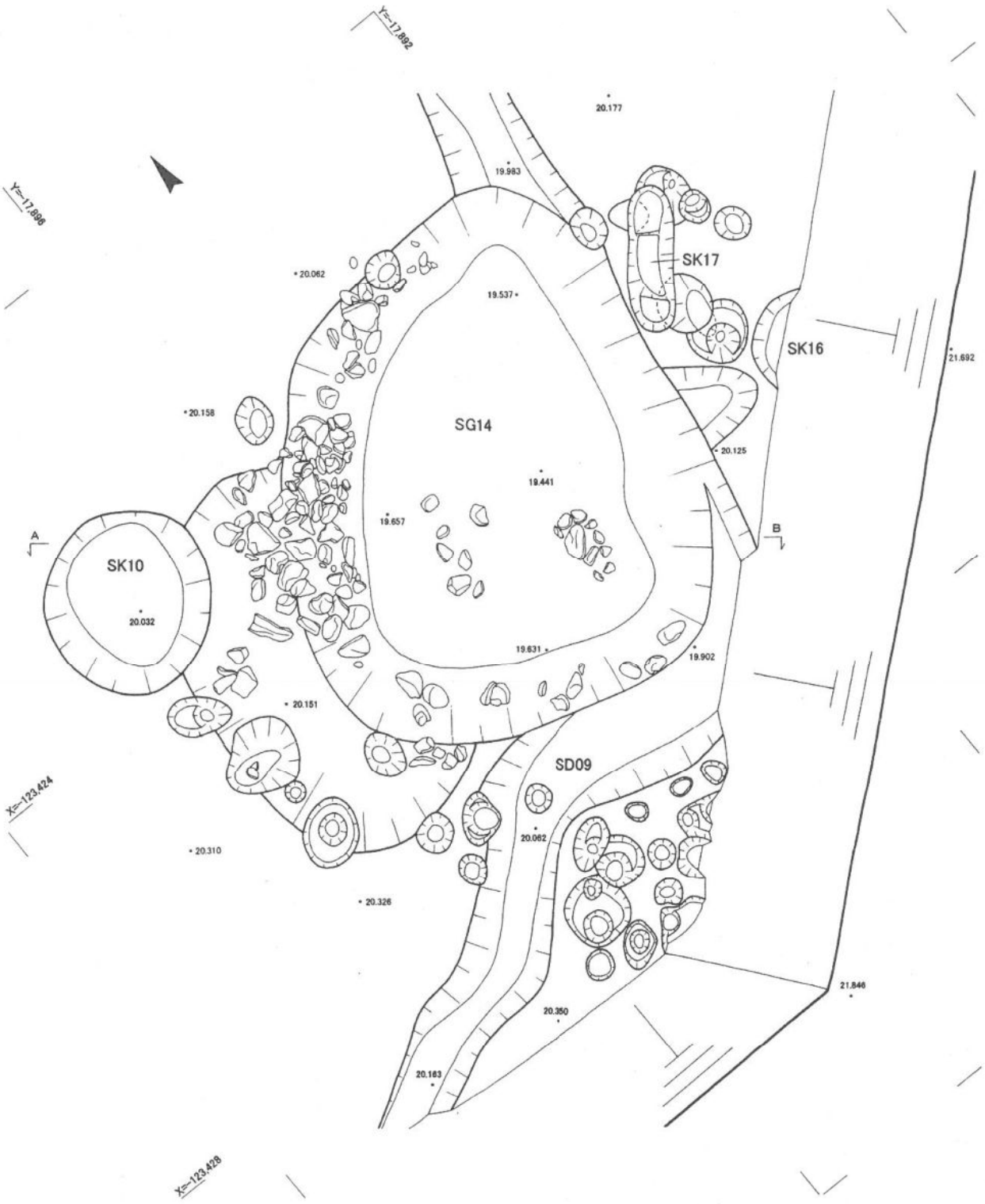


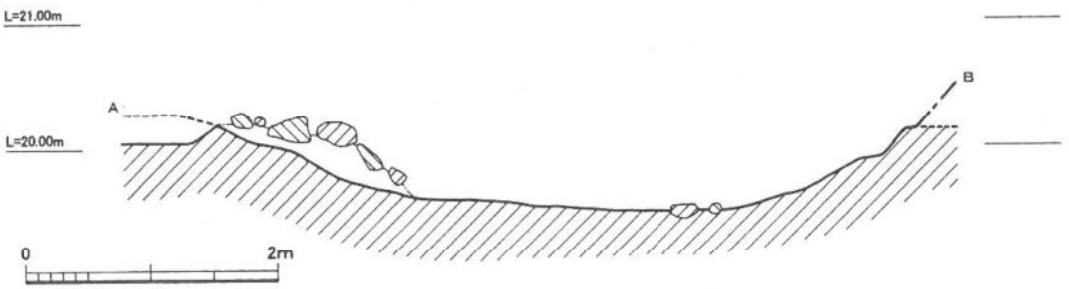
1:現代盛土　2:旧駅ホーム盛土
3:旧駅ホーム盛土　4:旧駅ホーム盛土
5:旧鉄道敷整地土
6:遺物包含層（黒褐色砂質土）
7:井戸ＳＥ52埋土（黒褐色砂質土）
8:井戸ＳＥ52埋土（黒褐色砂質土）
9:井戸ＳＥ52埋土（暗褐色砂質土）
10:井戸ＳＥ52埋土（にぶい黄褐色砂質土）
11:井戸ＳＥ52埋土（黒褐色砂質土）
12:井戸ＳＥ52埋土（褐灰色砂質シルト）
13:流路ＳＤ49埋土（オリーブ灰色砂礫層）
14:流路ＳＤ49埋土（灰黄褐色砂質土）
15:流路ＳＤ49埋土（にぶい黄褐色砂質土）
16:流路ＳＤ49埋土（暗灰黄色砂質シルト）
17:流路ＳＤ49埋土（黄褐色砂質シルト）
18:旧折居川沖積層（オリーブ褐色砂質土）
19:灰黄褐色砂質シルト　20:黄灰色砂礫層
21:淡茶褐色砂礫層　22:黄灰色砂質シルト

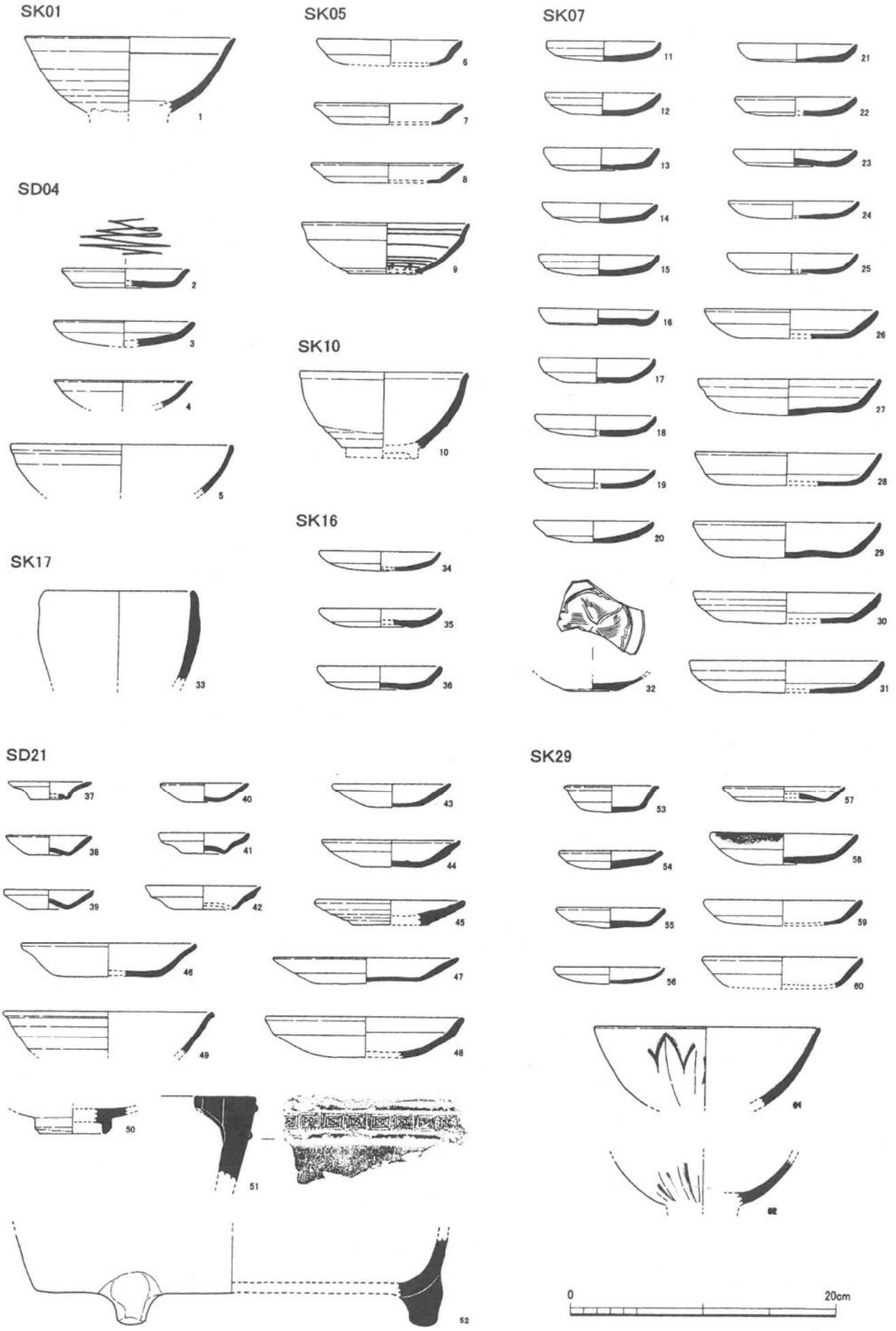




ＰＬ．５　園池ＳＧ14実測図

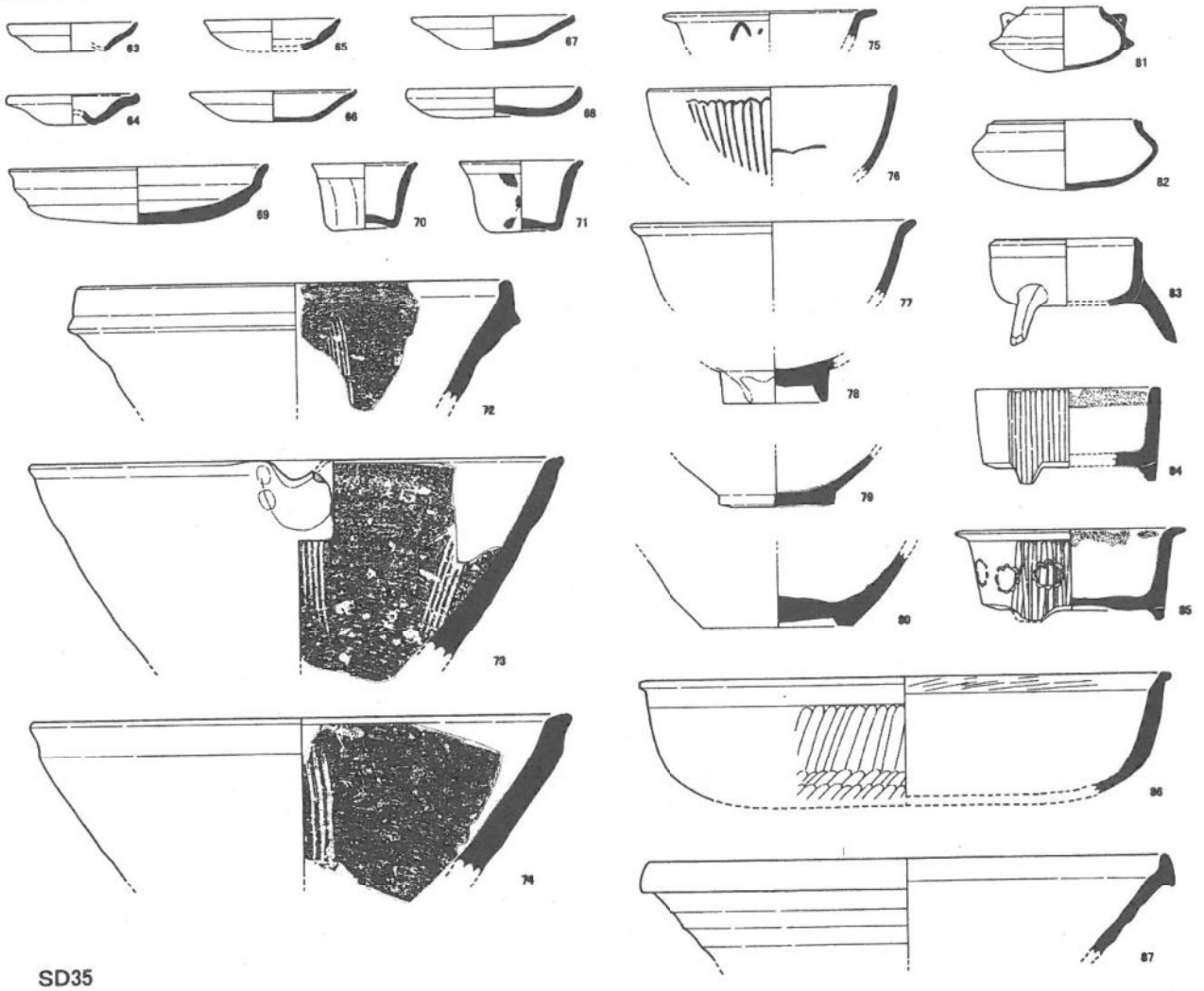




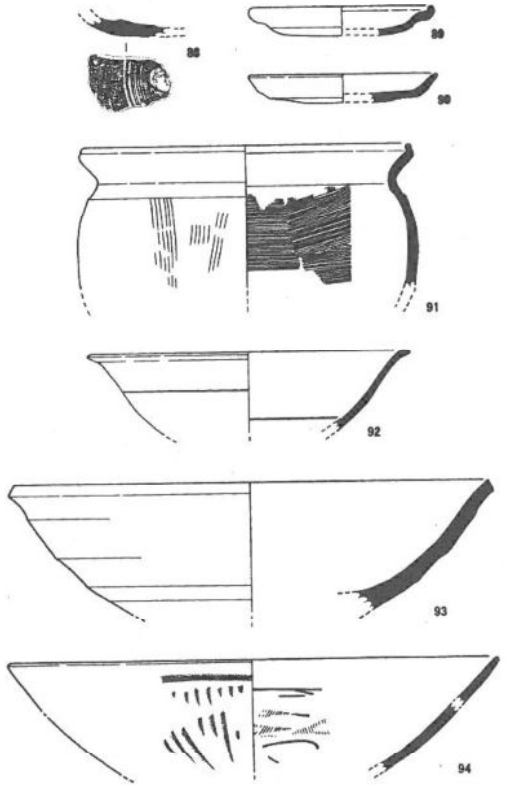

SK01
SK05
SK07
SD04
SK10
SK16
SK17
SD21
SK29
0
20cm

ＰＬ．７　出土土器実測図（2）

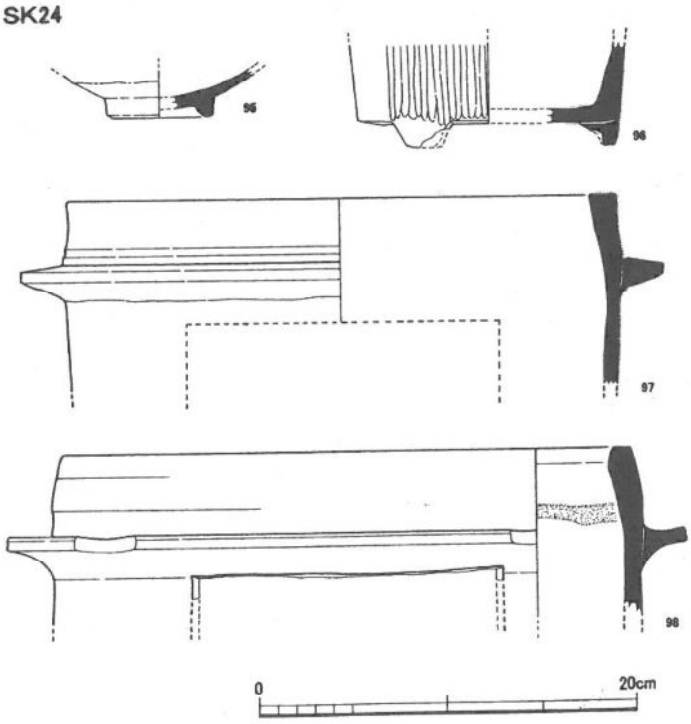
SG14

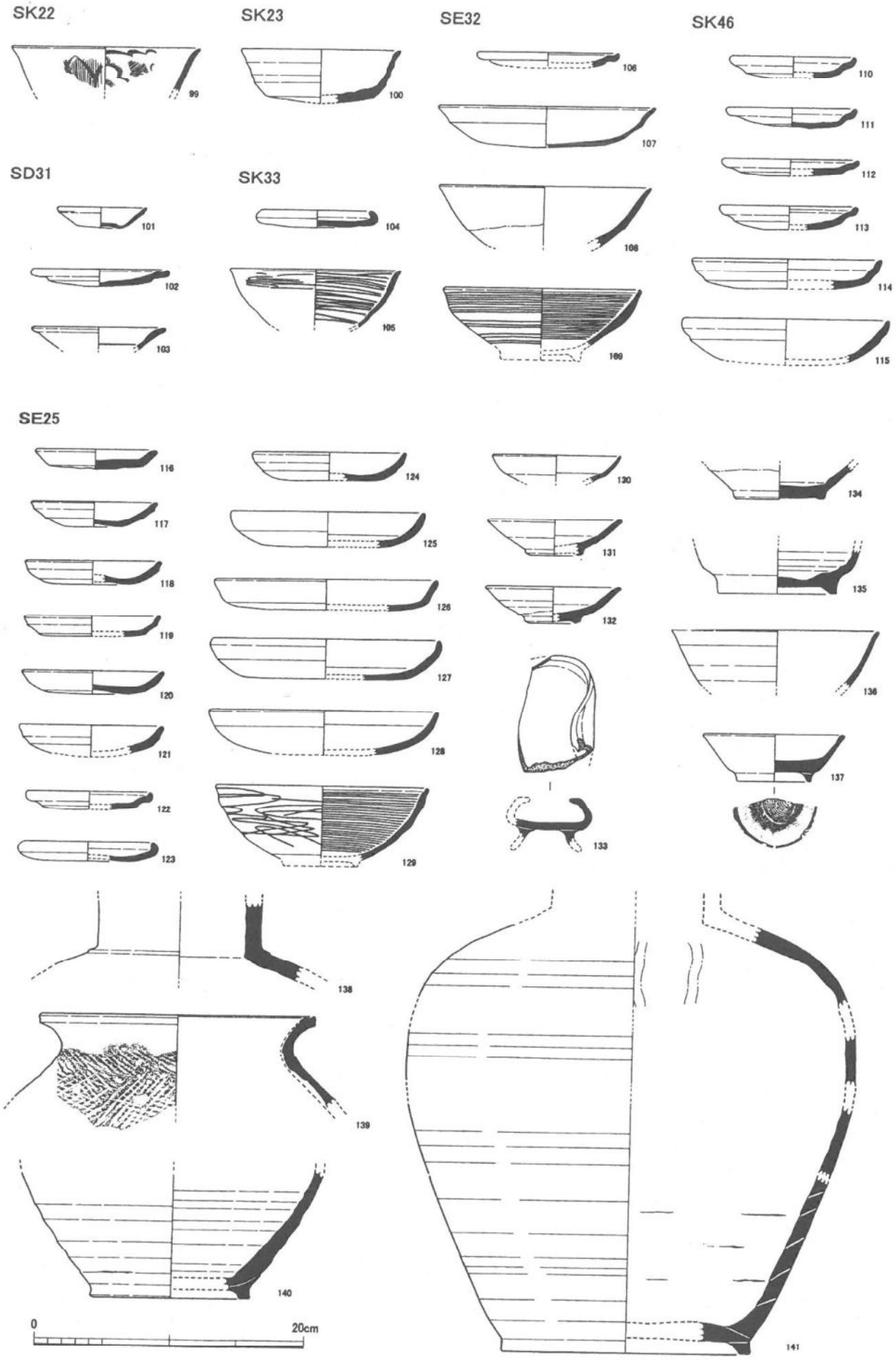


SD35



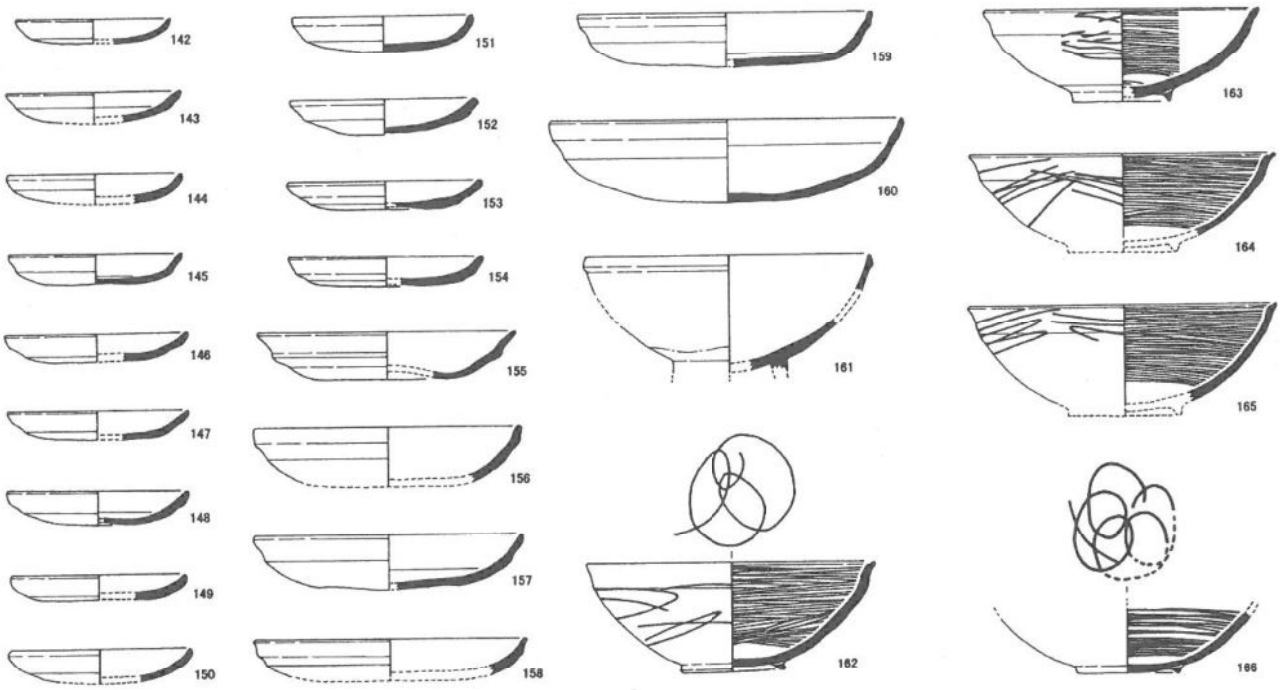
SK24



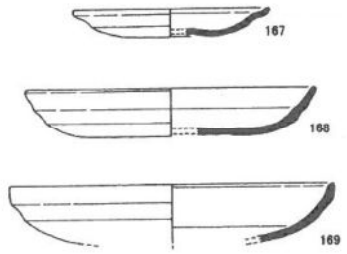

SK22
SK23
SE32
SK46
SD31
SK33
SE25
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
0
20cm

ＰＬ．９　出土土器実測図（4）

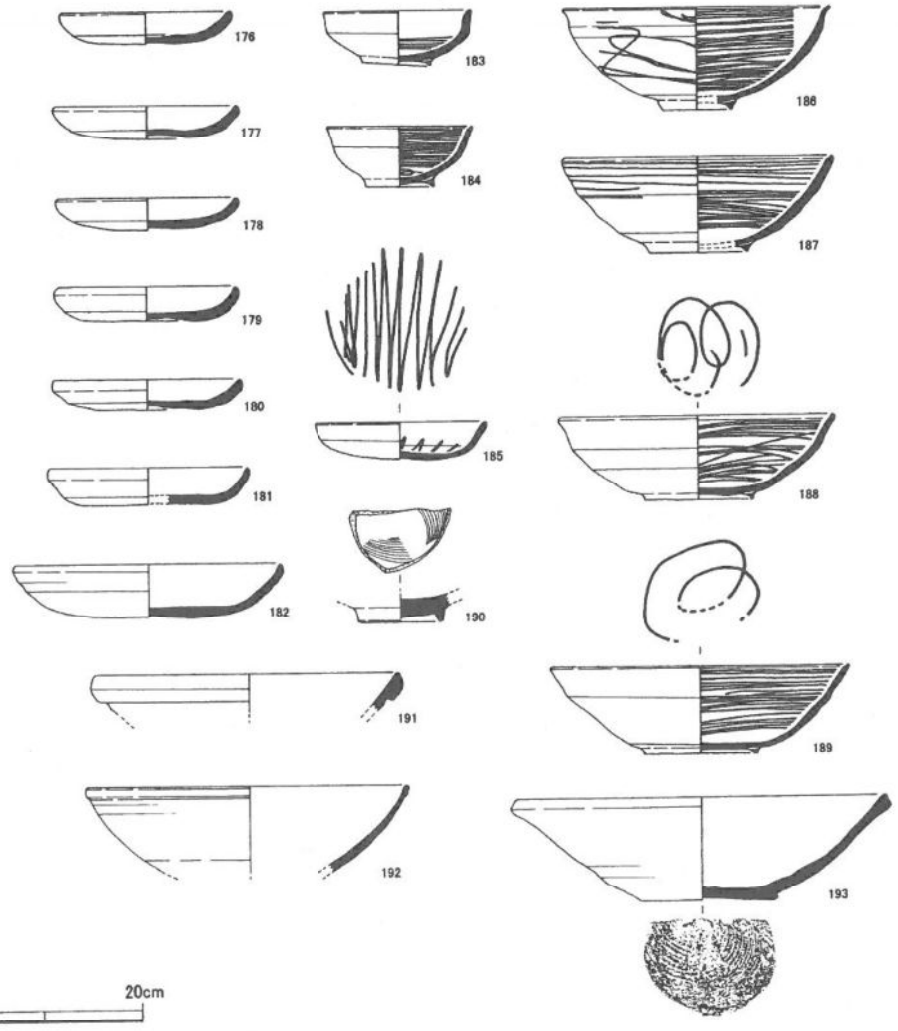
SK30



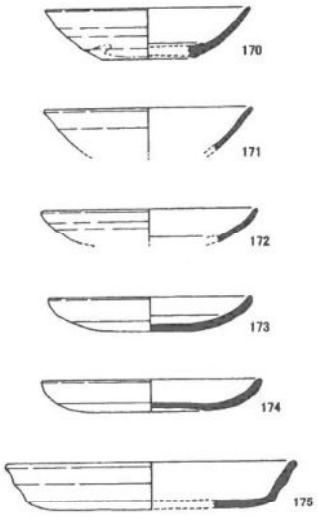
SK34



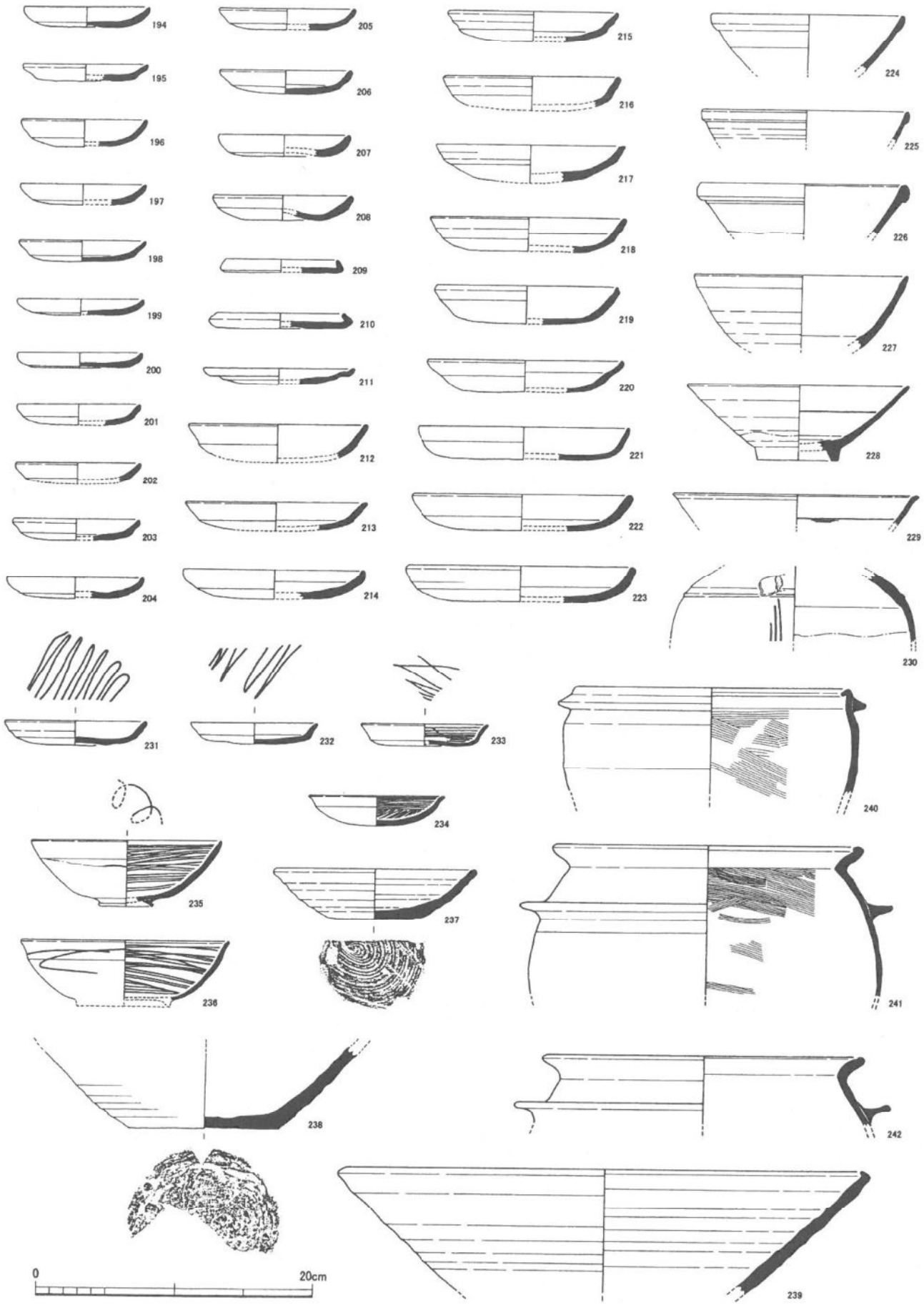
SK44



SK48

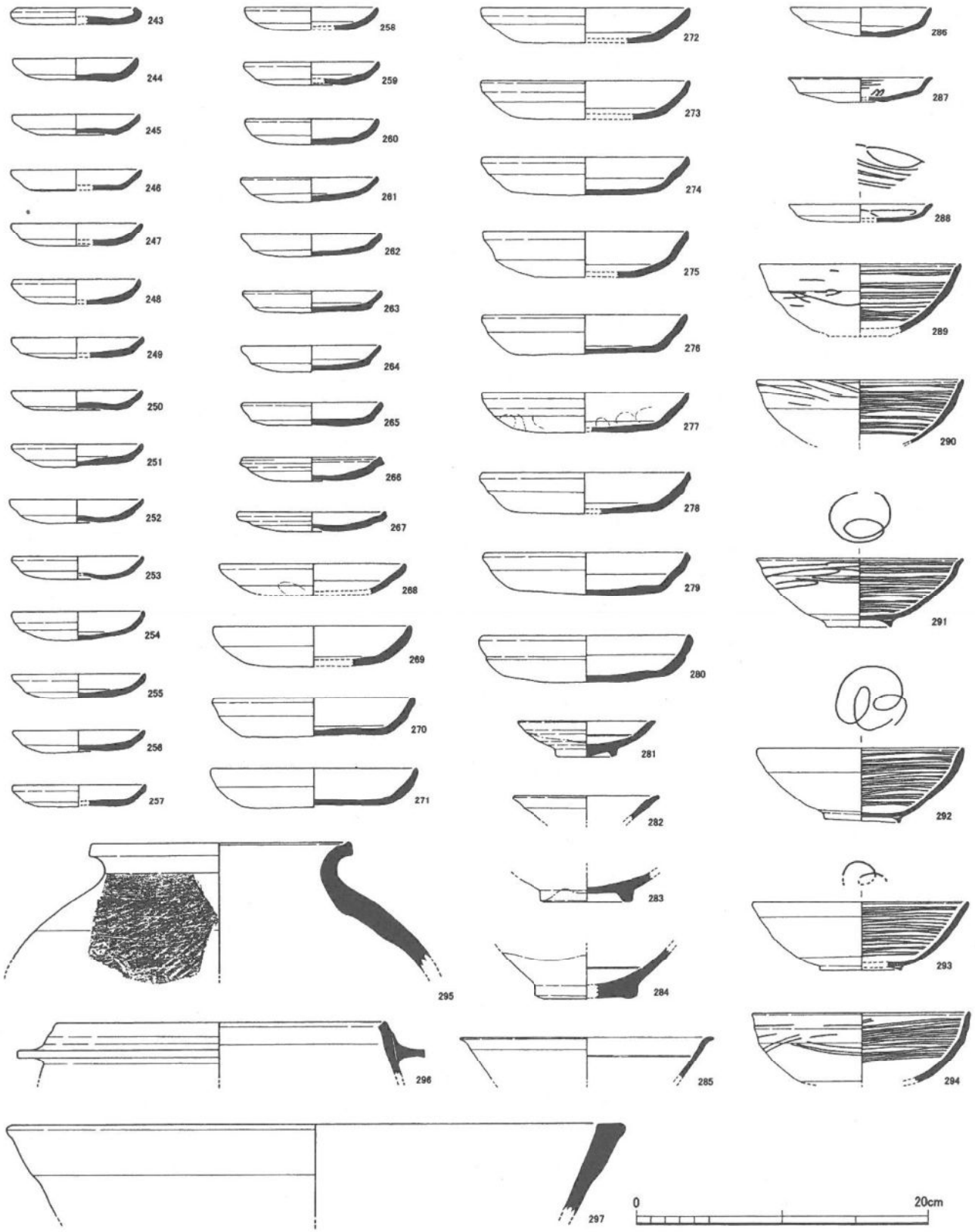


SD43

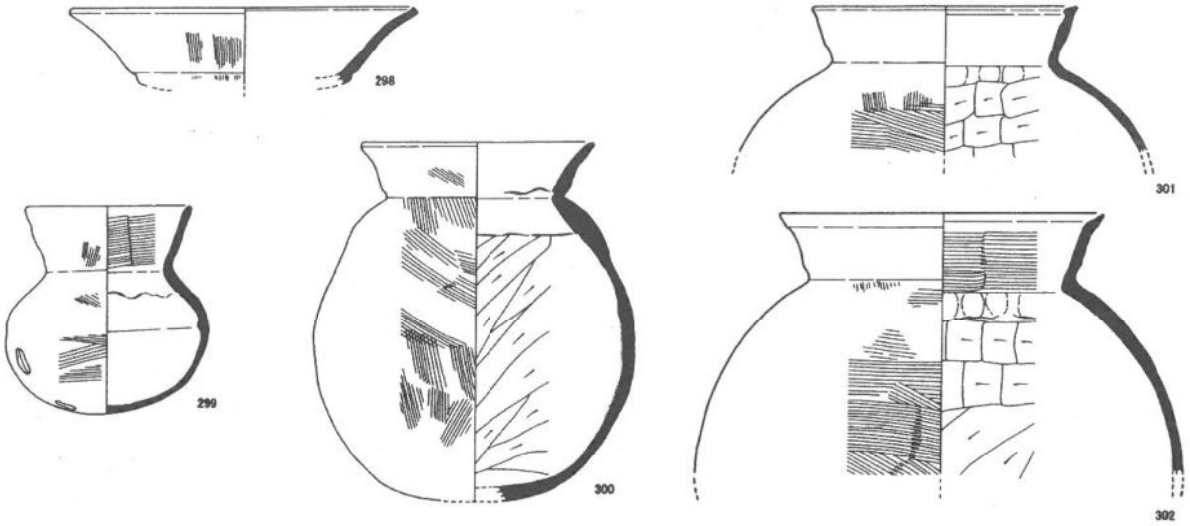

194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
0
20cm

ＰＬ．１１　出土土器実測図（6）

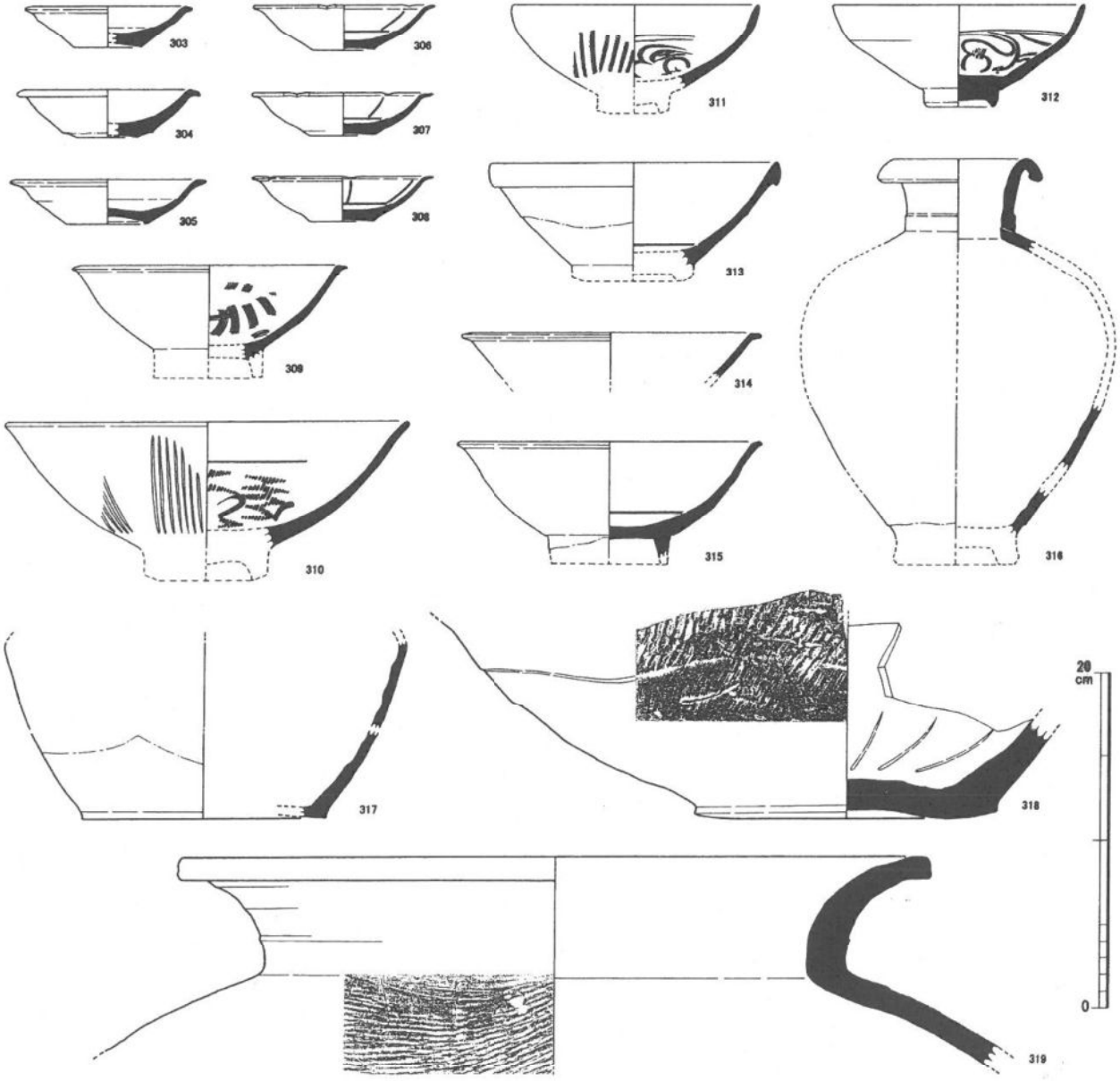
SK45



SD49

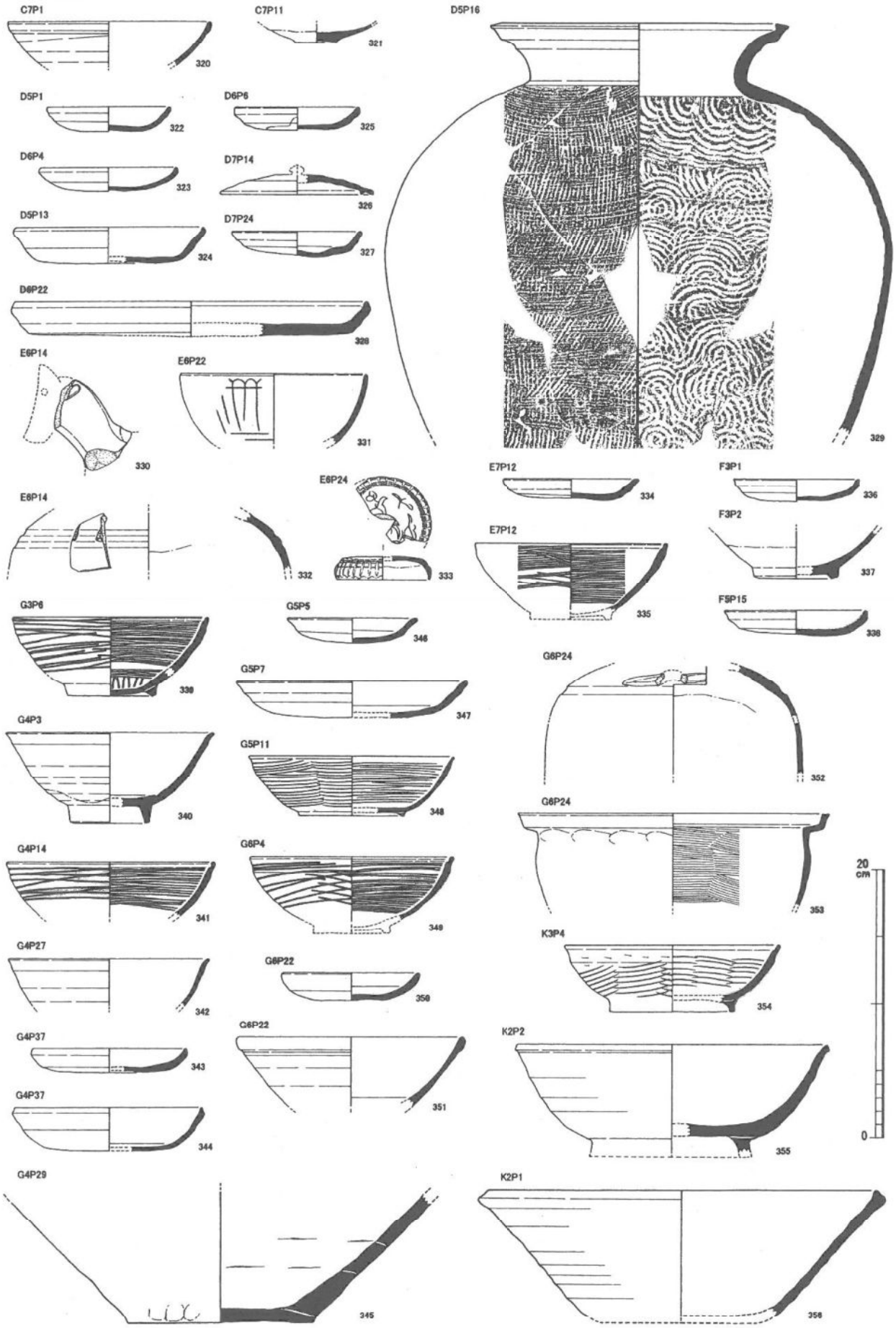

298
299
300
301
302

SK51

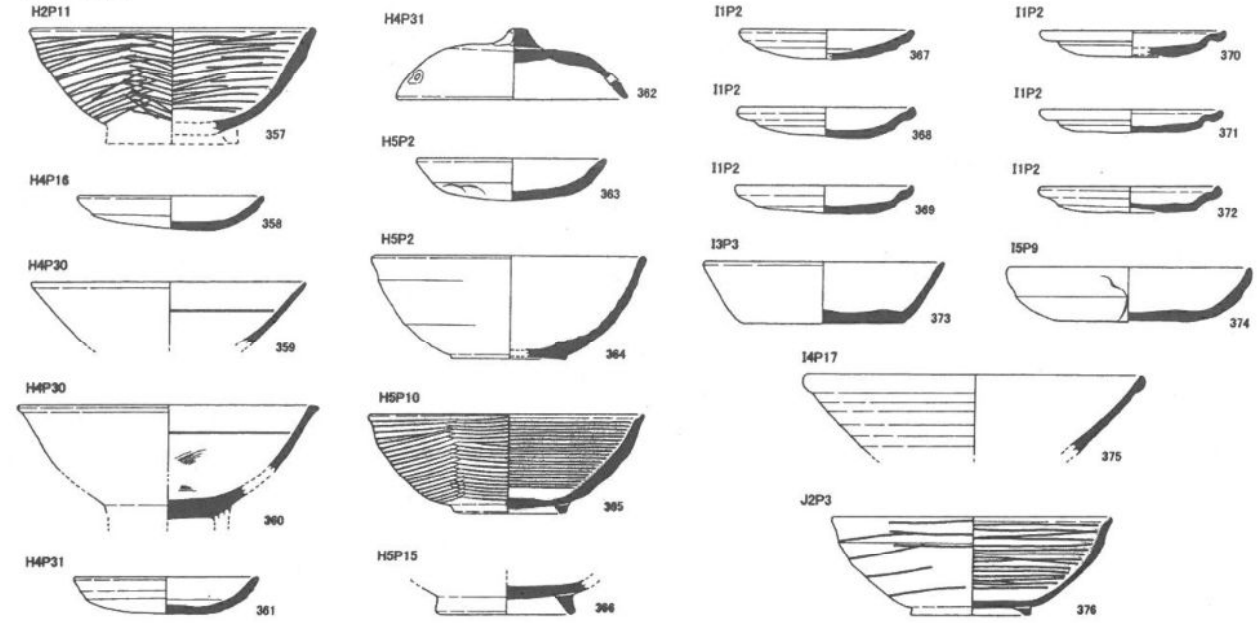

303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
20
cm
0

ＰＬ．１３　出土土器実測図（8）

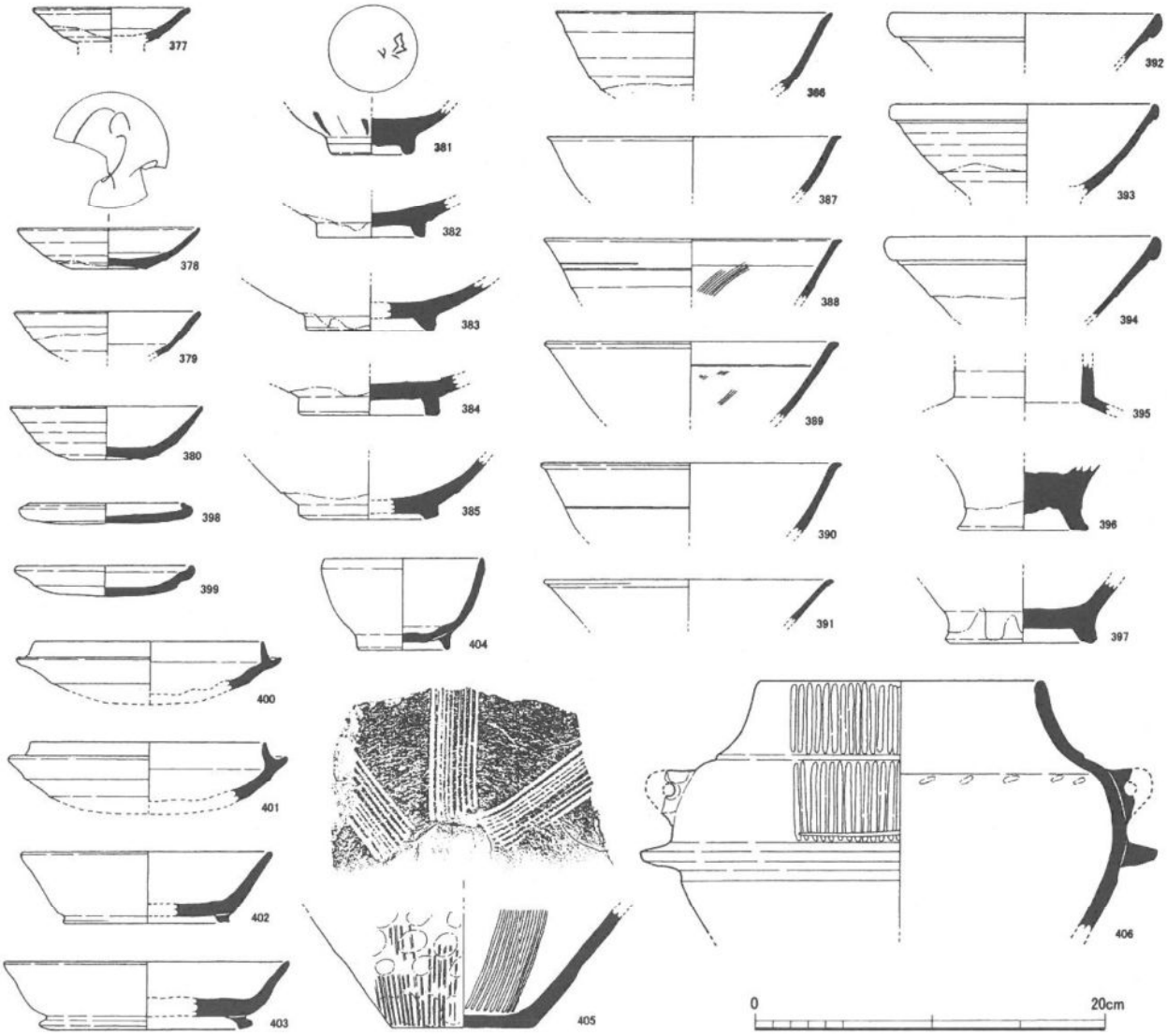
各地区柱穴



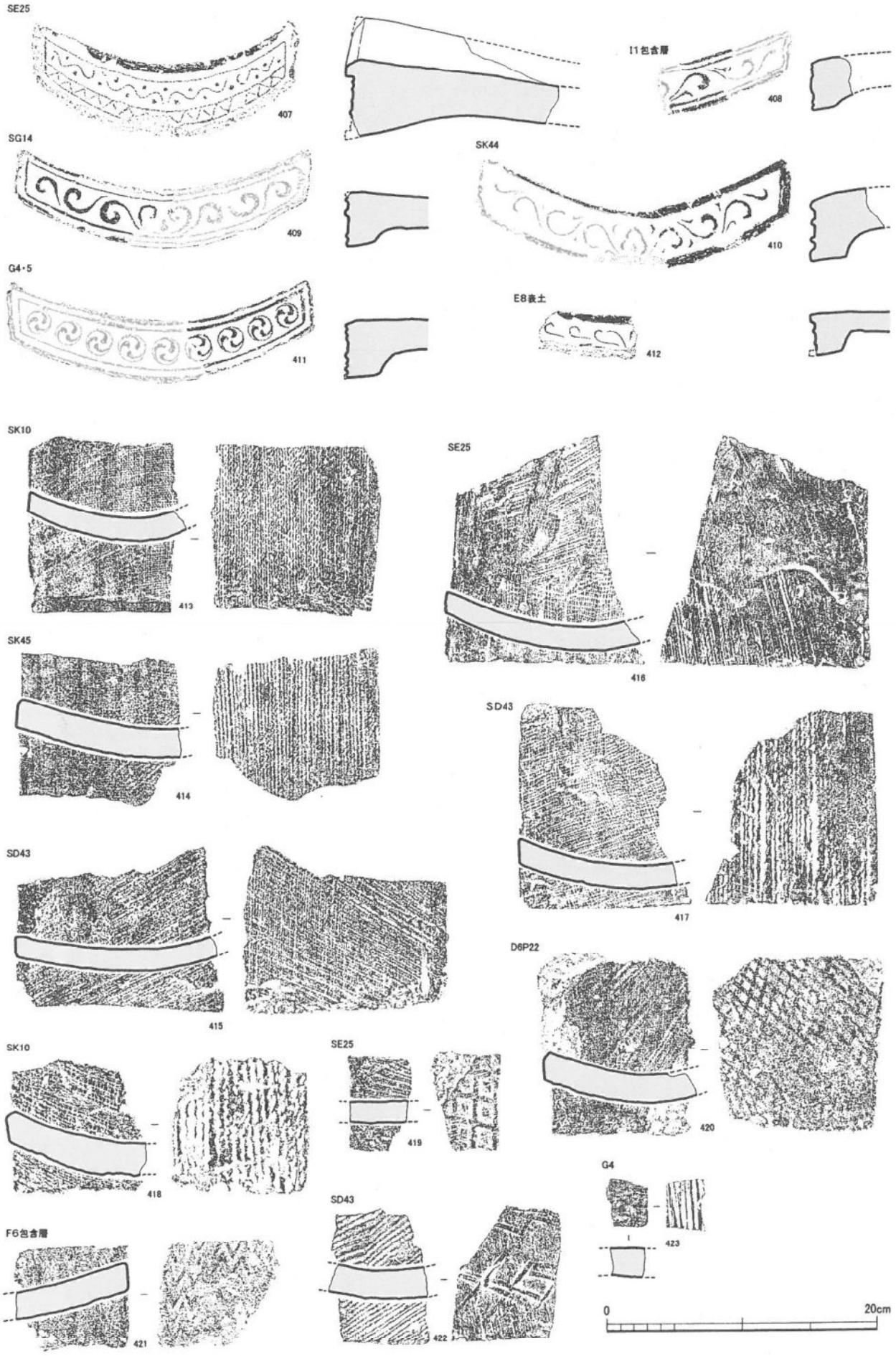
各地区柱穴

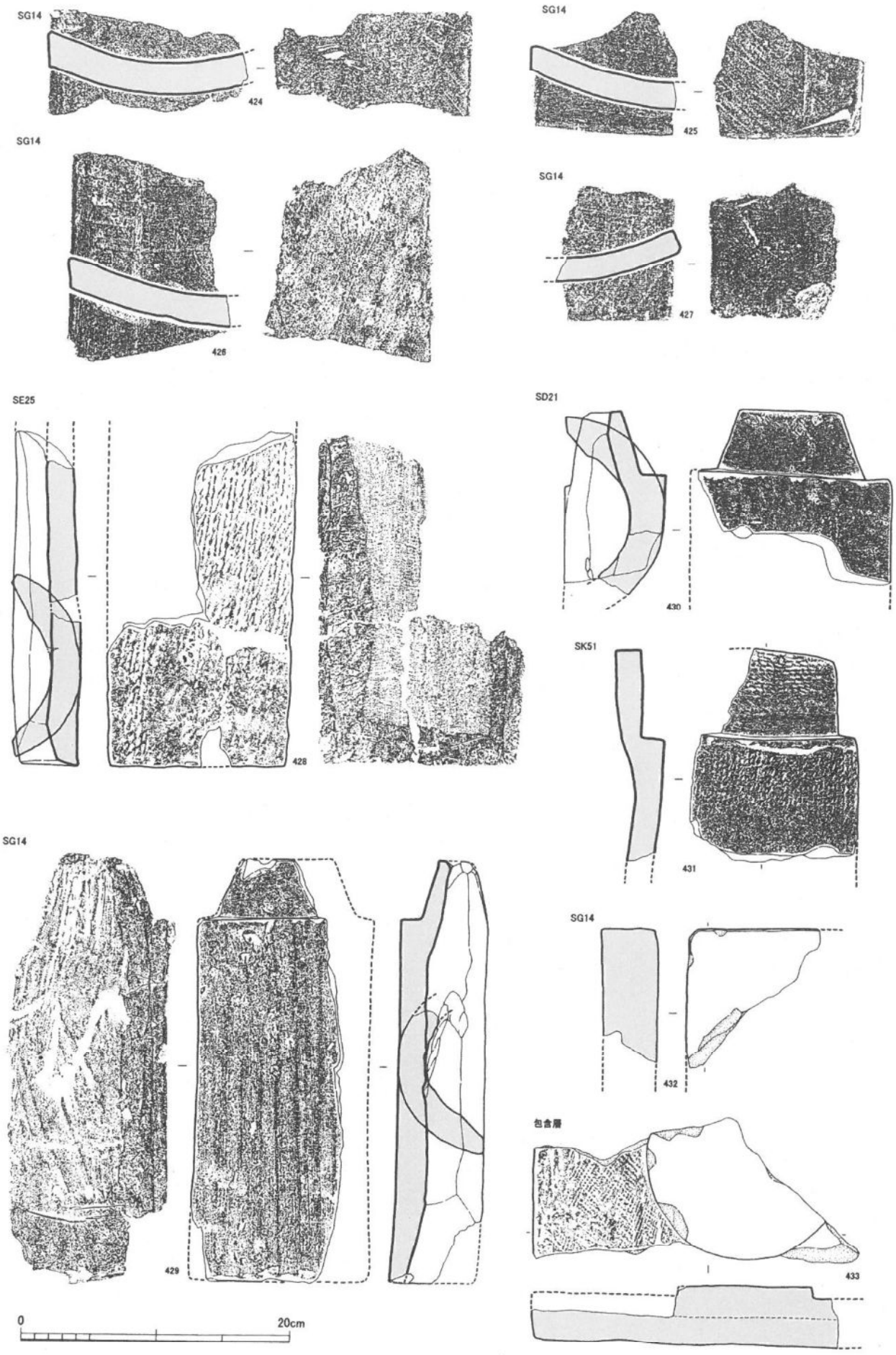

H2P11
357
H4P16
358
H4P30
359
H4P30
360
H4P31
361
H4P31
362
H5P2
363
H5P2
364
H5P10
365
H5P15
366
I1P2
367
I1P2
368
I1P2
369
I1P2
370
I1P2
371
I1P2
372
I3P3
373
I5P9
374
I4P17
375
J2P3
376

包含層他

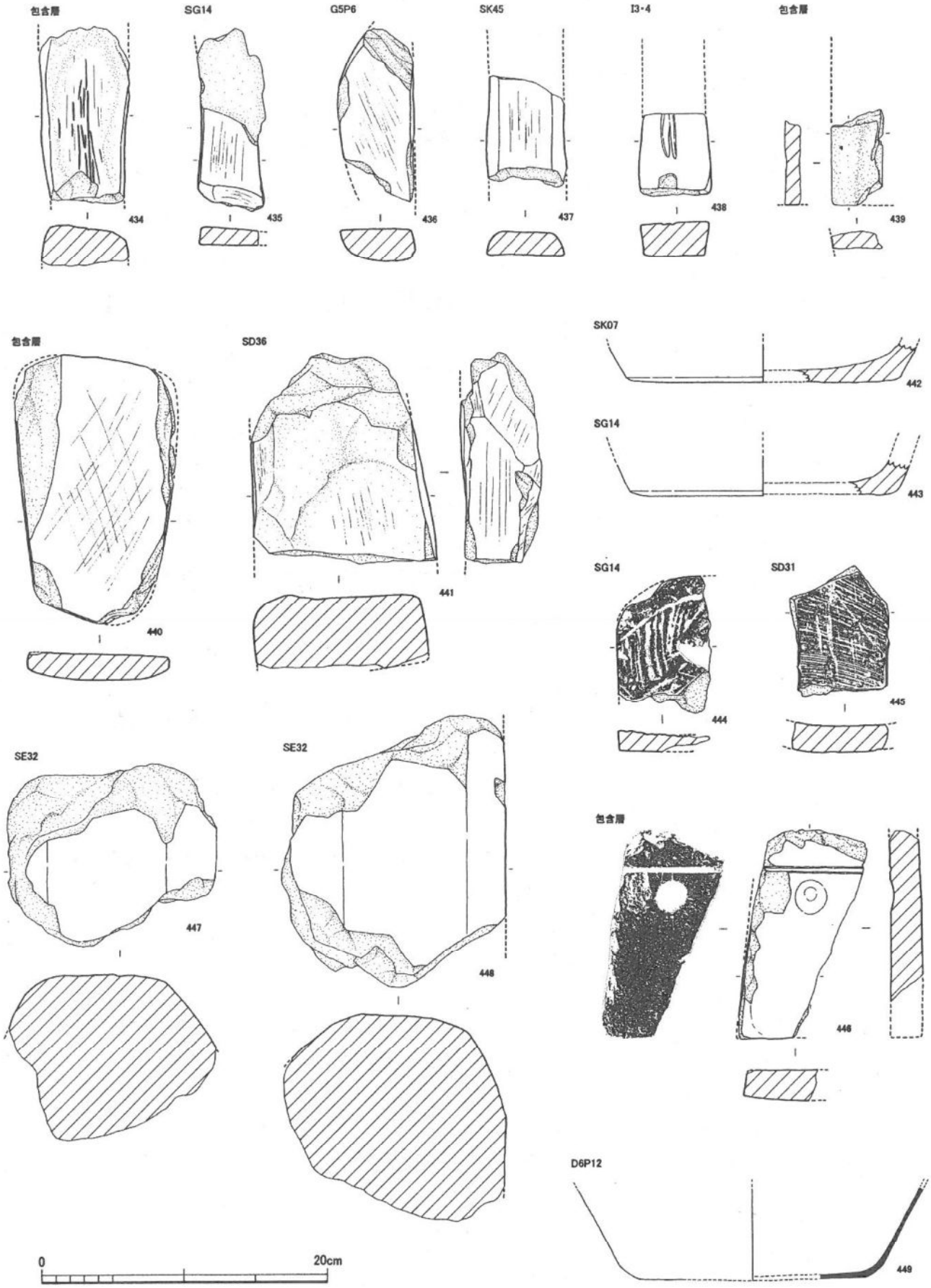

377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
0
20cm

ＰＬ．１５　出土瓦実測図（1）




SG14
424
SG14
425
SG14
426
SG14
427
SE25
428
SD21
430
SK51
431
SG14
429
SG14
432
包含層
433
0
20cm

ＰＬ．１７　出土石製品・鉄製品実測図



写　真　図　版

遺跡現状写真……ＰＬ．18・19

遺構全体写真……ＰＬ．20・21

遺構部分写真……ＰＬ．22・23

園池ＳＧ14写真……ＰＬ．24～26

井戸ＳＥ25写真……ＰＬ．27

土坑ＳＫ45他写真……ＰＬ．28

土坑ＳＫ51写真……ＰＬ．29

その他……ＰＬ．30・31

出土遺物写真……ＰＬ．32～37

1．調査地遠景（東から）

2．調査地近景（西南から）

3．調査前の状況（西から）

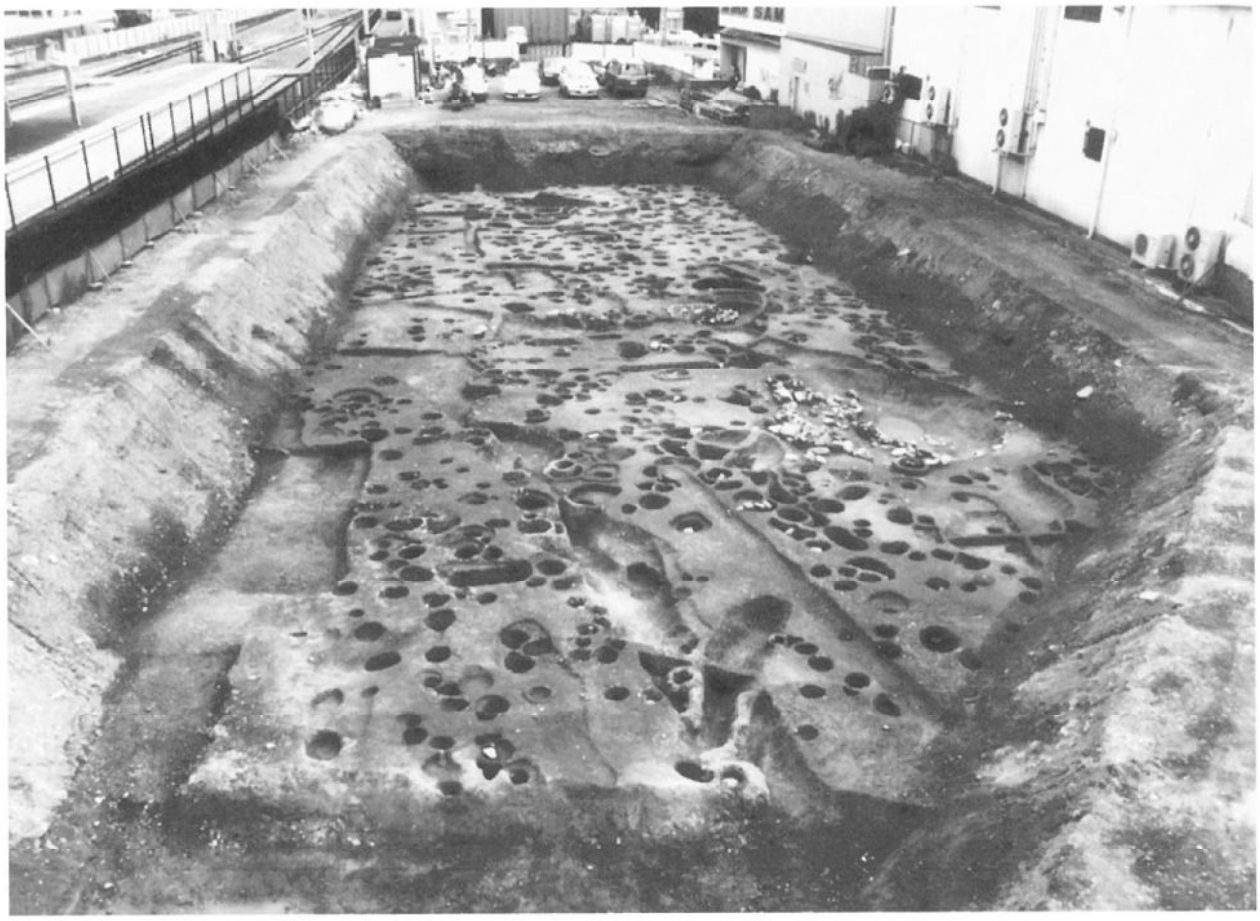
1．調査前の状況（東から）

2．調査地の安全柵と看板

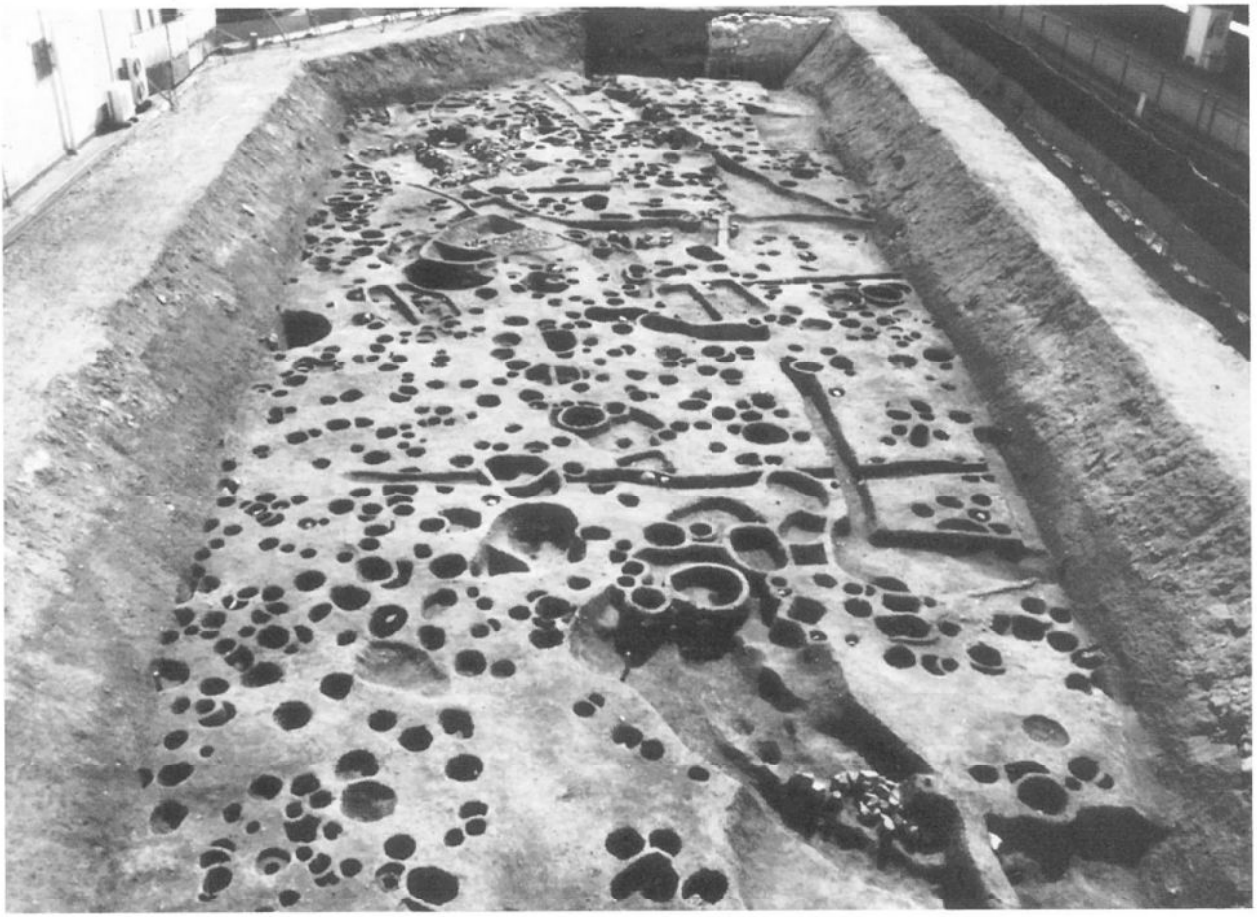
3．表土排除状況（北西から）

1．調査地全景（西から）

2．調査地全景（東から）



1．検出遺構全景（西から）



2．検出遺構全景（東から）

1．Ｃ・Ｄ区検出遺構（北から）

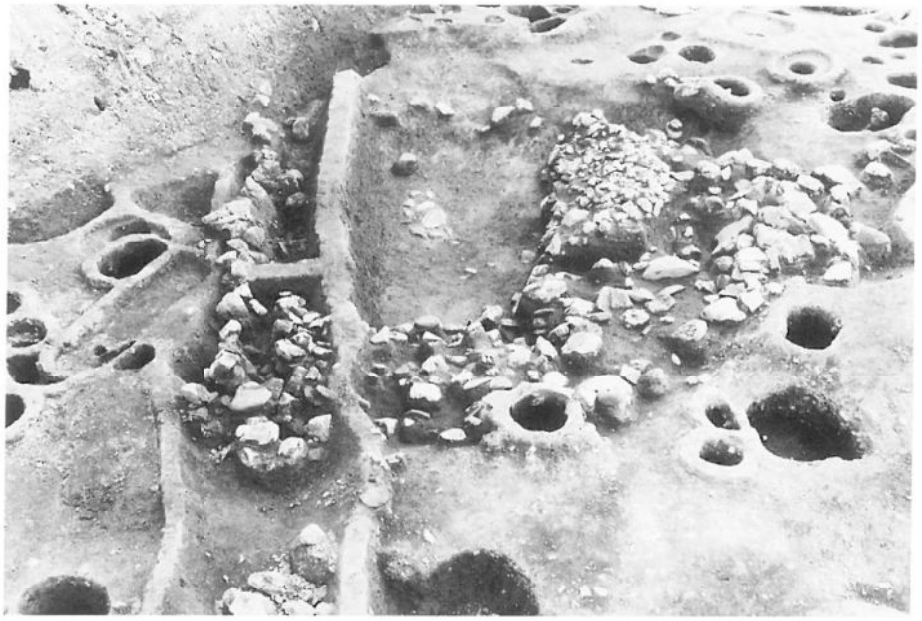
2．Ｄ・Ｅ区検出遺構（北から）

3．Ｅ・Ｆ区検出遺構（北から）

1．Ｇ・Ｈ区検出遺構（北から）

2．Ｈ・Ｉ区検出遺構（北から）

3．Ｉ・Ｊ区検出遺構（北から）



1．ＳＧ14掘削初期（北から）

2．ＳＧ14転落川原石（東から）

3．ＳＧ14転落川原石（北から）

1．ＳＧ14池底転落川原石除去状況（東から）

2．ＳＧ14池底転落川原石除去状況（北から）

3．ＳＧ14池底転落川原石部より出土した香炉（85）

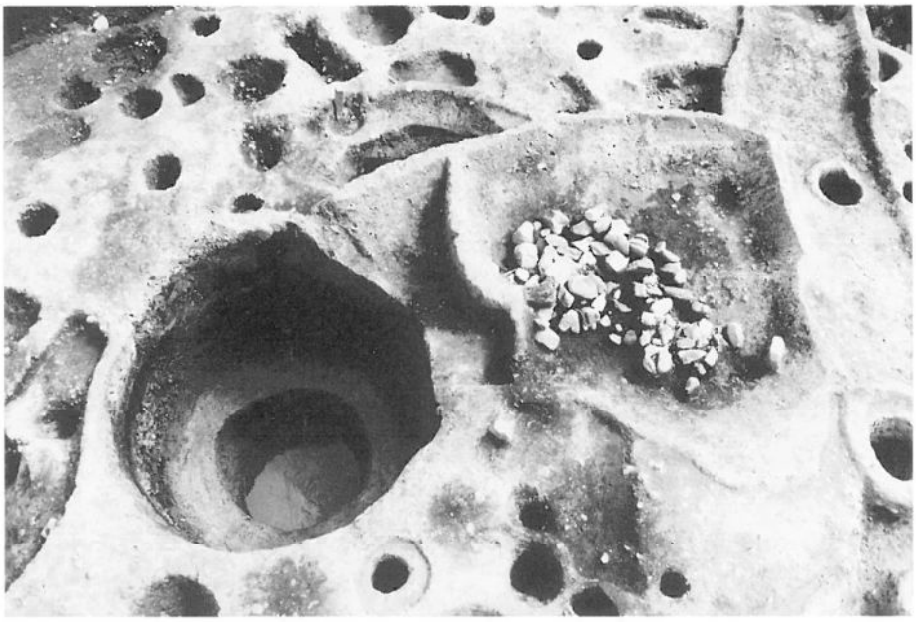
1．ＳＧ14・ＳＤ09全景(東から)

2．ＳＧ14完掘状況（南から）

3．ＳＤ21全景（北から）

1．ＳＥ25上面検出状況（北から）

2．ＳＥ25半割状況（北東から）

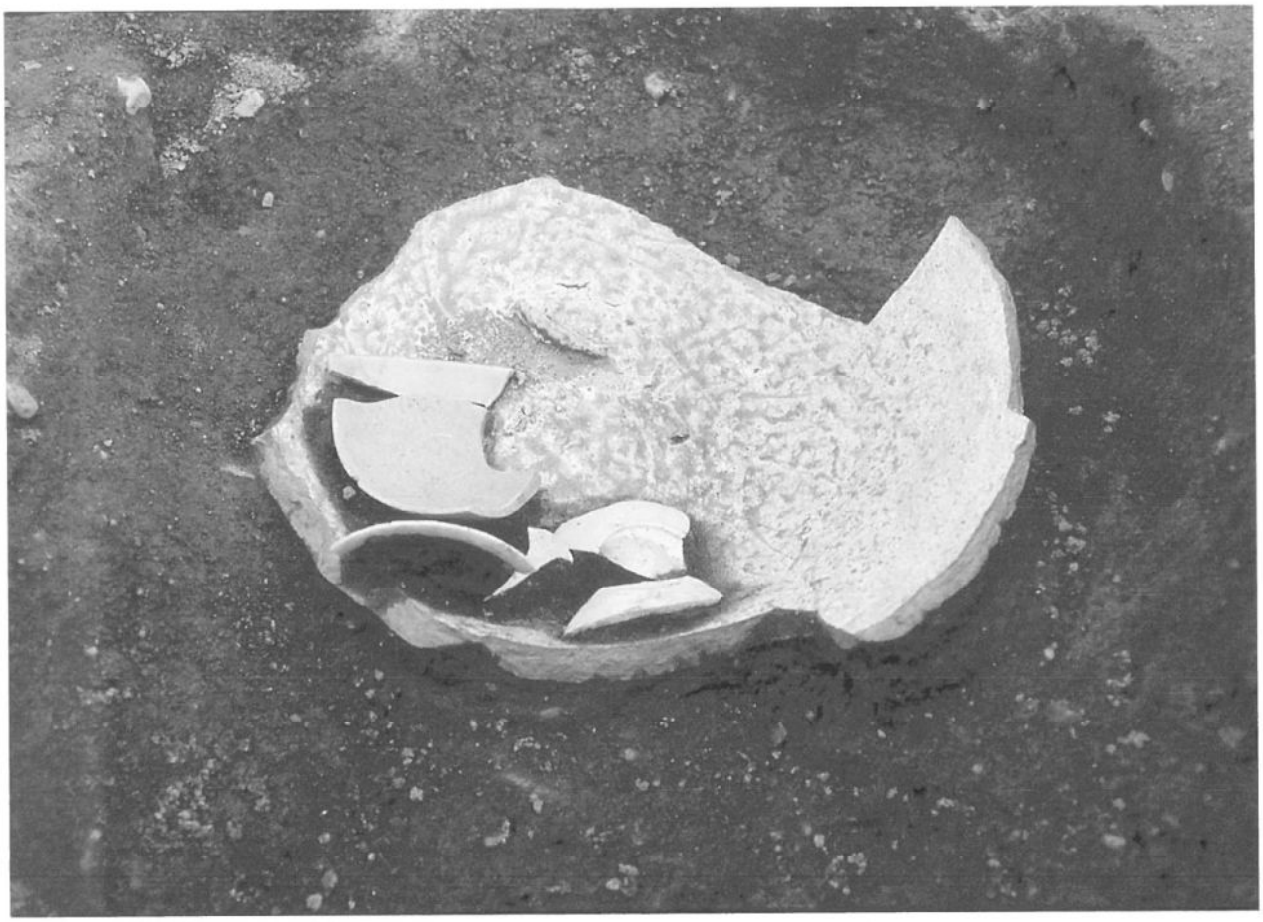


3．ＳＥ25・ＳＫ22～24完掘状況
（北から）

1．ＳＤ43・ＳＫ44・ＳＫ45全景
（北から）

2．ＳＫ45全景（西から）

3．ＳＫ45土師皿出土状況
（西から）



1．ＳＫ51検出状況（北から）

2．ＳＫ51出土遺物

１．Ｇ４区Ｐ３検出状況（東から）

２．Ｉ１区Ｐ２検出状況（南から）

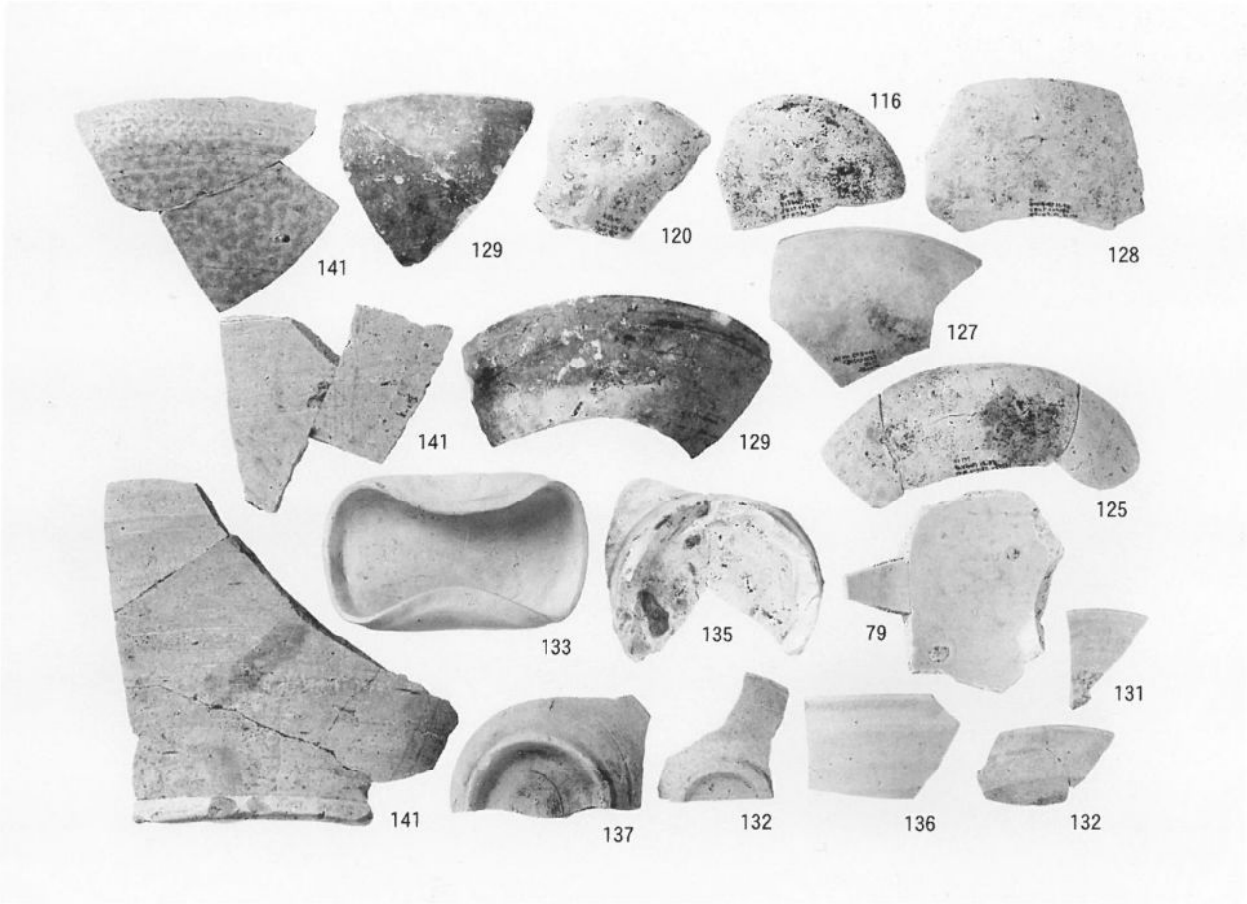
３．Ｄ７区柱根石の状況（西から）

1．ＳＤ49全景（西から）

2．トレンチ西壁土層（東南から）

3．トレンチ北壁土層（東南から）

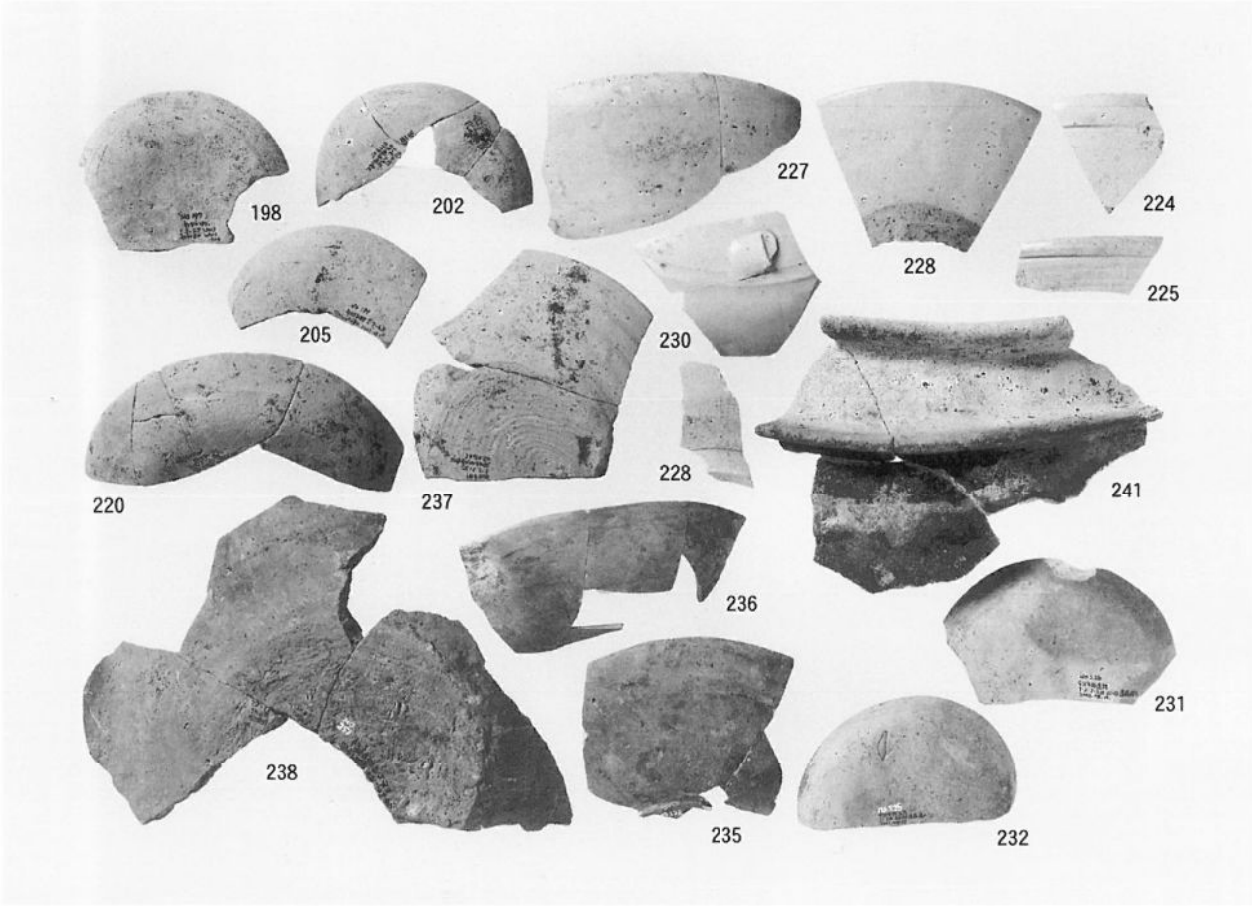
1．ＳＧ14



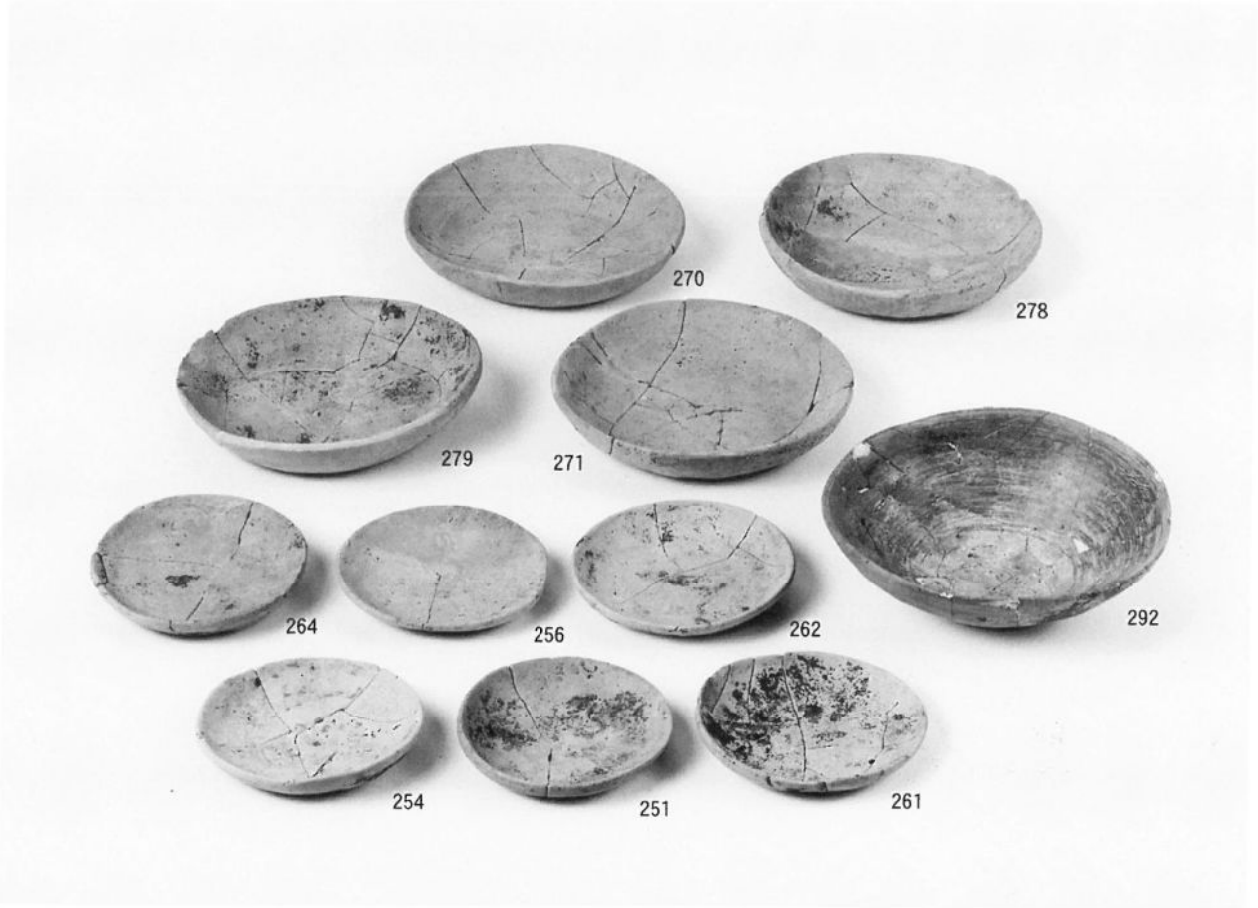
2．ＳＥ25（但し79はＳＧ14）

189
193
188
185
184
183
182
177
178
179

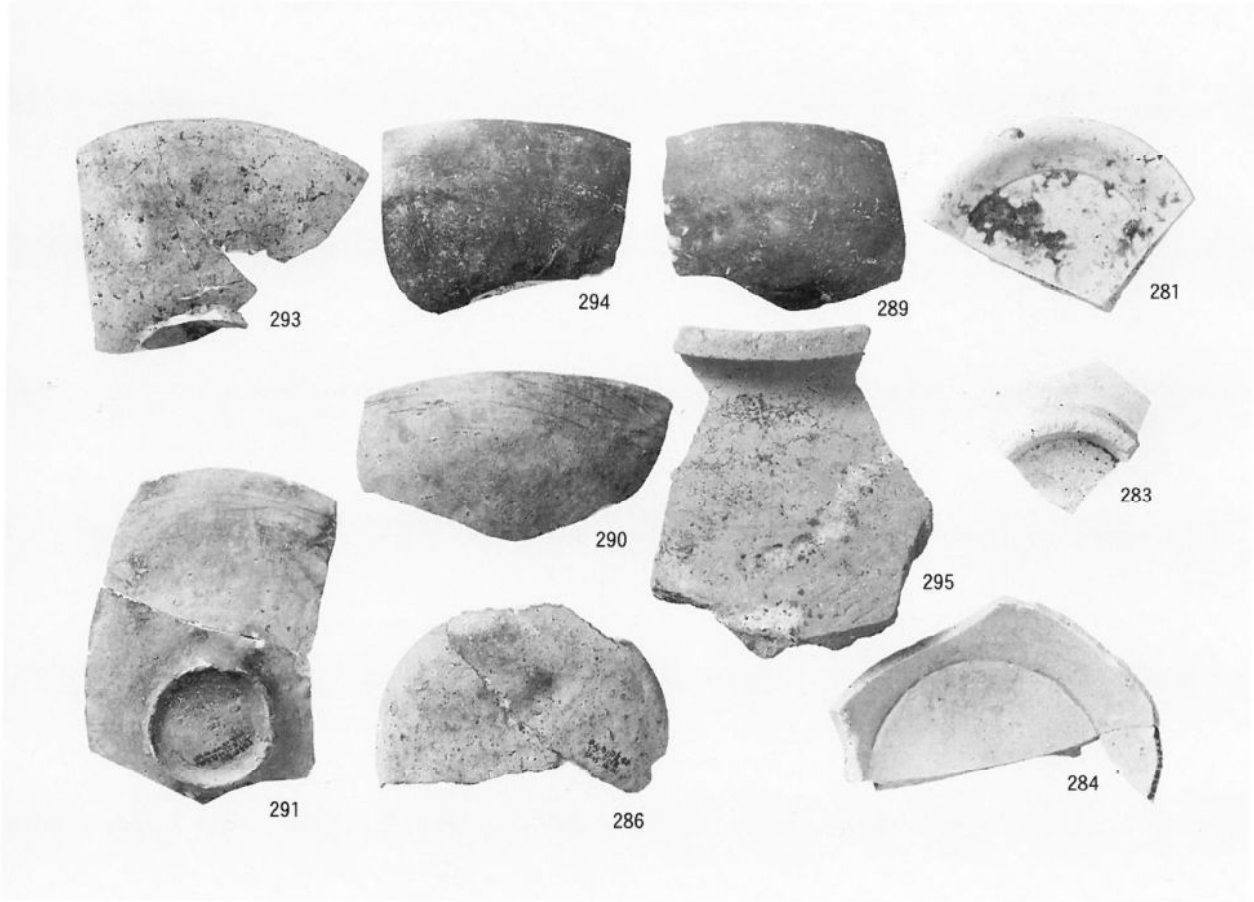
1．ＳＫ44


198
202
227
224
228
225
205
230
220
237
228
241
236
231
238
235
232

2．ＳＤ43

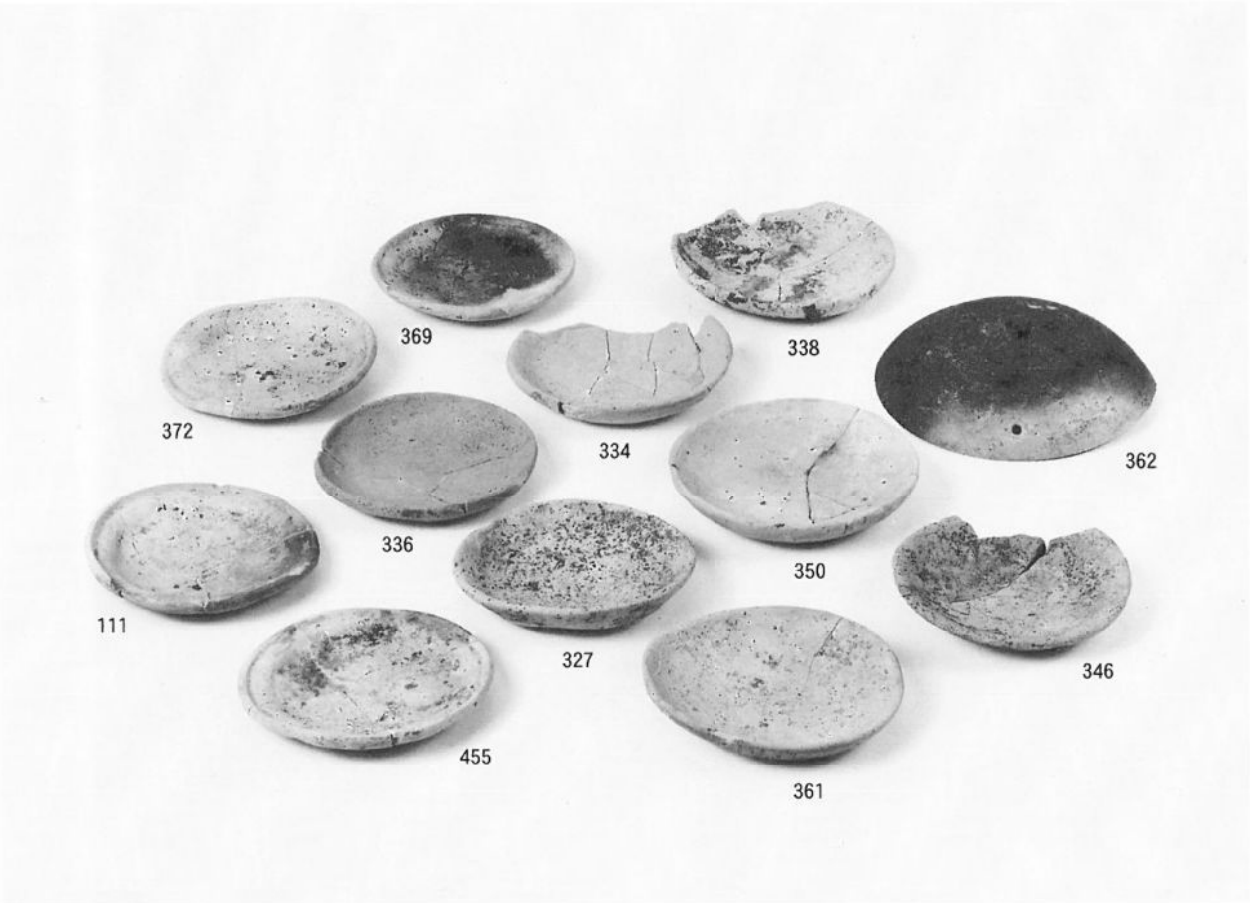

270
278
279
271
264
256
262
292
254
251
261

1．SK45

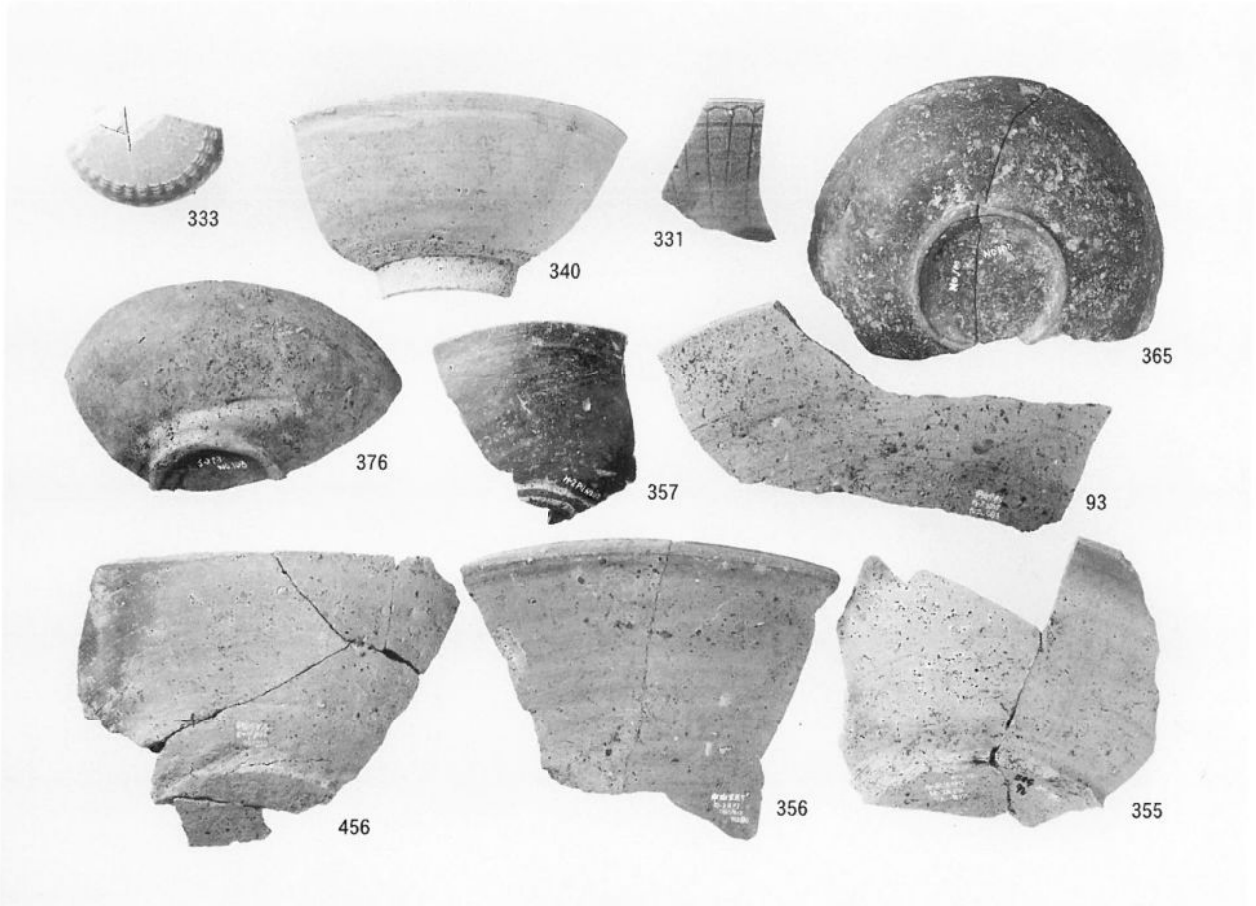

293
294
289
281
290
283
295
291
286
284

2．SK45

1．ＳＤ49

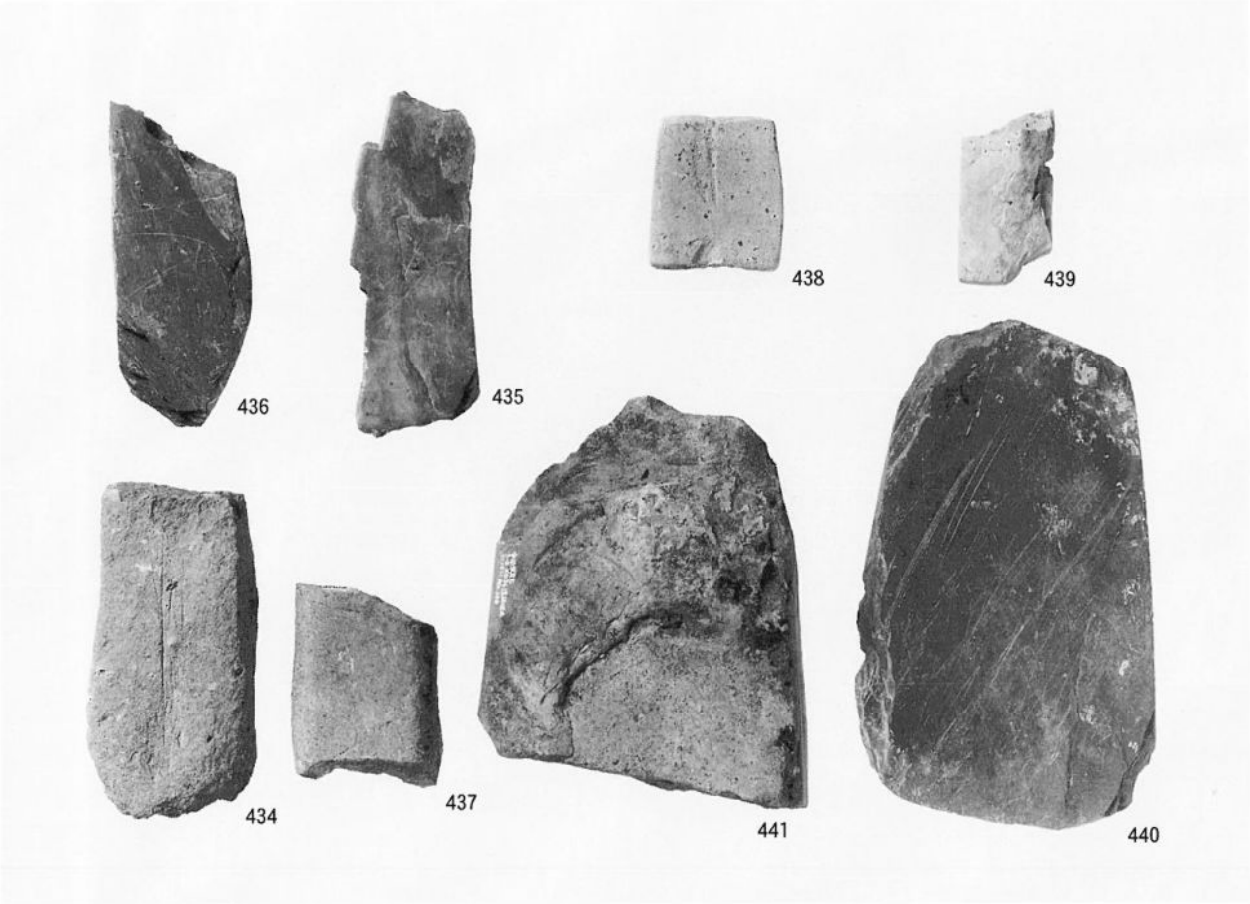


2．ＳＫ46（111・455），各地区柱穴（327・334・336・338・346・350・361・362・369・372）

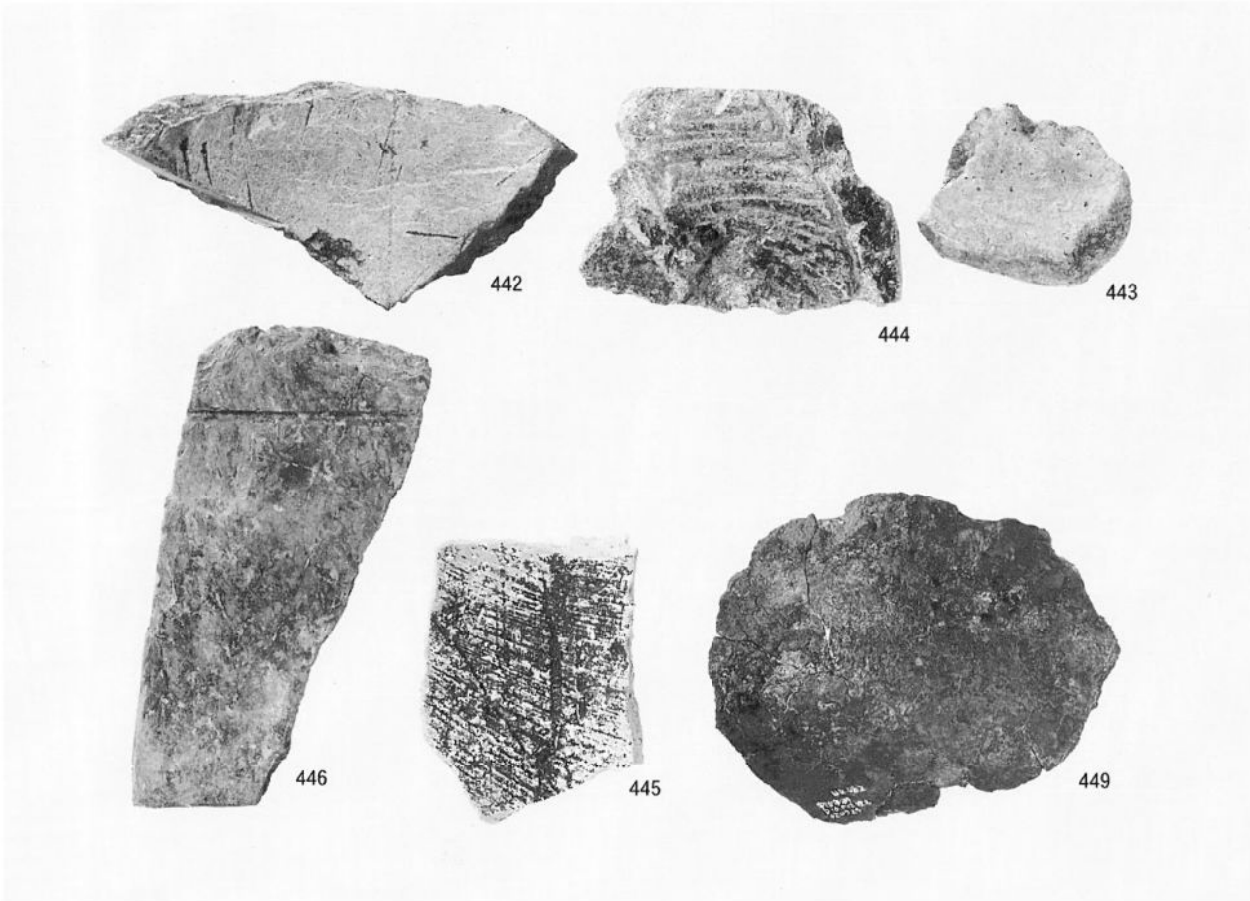


1．ＳＤ35（93），各地区柱穴（331・333・340・355～357・365・376・456）

2．ＳＥ25（407），Ｉ１区（408），ＳＧ14（409・432），ＳＫ44（410），Ｇ４・５区（411），包含層（433）



1．包含層（434・439・440），ＳＧ14（435），Ｇ５区Ｐ６（436），ＳＫ45（437），Ｉ３・４区（438），ＳＤ36（441）



2．ＳＫ07（442），ＳＧ14（443・444），ＳＤ31（445），包含層（446），Ｄ６区Ｐ12（449）

抄　　録

ふりがな	うじしがいいせき　（うじさとじり ご ほか）　はっくつちょうさほうこくしょ
書名	宇治市街遺跡（宇治里尻５他）発掘調査報告書
副書名	ＪＲ宇治駅前市民交流プラザ建設に伴う発掘調査
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第55集
編著者名	杉本　宏、中井淳史
編集機関	宇治市歴史資料館
所在地	〒611-0023　京都府宇治市折居台１-１
発行者	宇治市教育委員会
所在地	〒611-8501　京都府宇治市宇治琵琶33
発行年月日	西暦2004年３月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	調査原因
宇治市街遺跡	宇治市宇治里尻５他	26204	108	34°53'13"	135°48'16"	020614～020920	500㎡	ＪＲ宇治駅前市民交流プラザ建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇治市街遺跡	集落	古墳・平安・室町	建物３、柵１、園池１、井戸３、溝９、土坑35、柱穴593	土師器、須恵器、瓦器、貿易陶磁器、国産陶磁器、瓦、石器、鉄器、コンテナバット40箱	平安期邸宅、室町期庭園、平等院同笵瓦、多数の貿易陶磁器

成果要約	宇治市街遺跡は、宇治の古くからの市街地であり平等院を含む観光中心地である、中宇治地区一帯に埋蔵する遺跡で、面積54万㎡を測る。中心的な時代は、ここに藤原摂関家が別業を構えた平安後期以降、江戸時代に至る。 今回の発掘は、当該遺跡の発掘調査の中で、面積的に最もまとまったものである。今回の発掘成果で注意すべきは、平安時代後期のおそらく藤原摂関家に係わる邸宅の一部が、遺構・遺物の上から析出できたことである。平等院と同笵の平安後期河内向山系瓦、多量の貿易陶磁器の存在は注目に値する。現在の土地割の中から想定できる、平安時代後期に成立した碁盤目状町割である宇治街区の一端を、今回の邸宅の位置と方位から具体的に窺えるようになったのは、大きな成果である。この邸宅は13世紀前半に焼失する。 また、室町時代後期に再び園池・遣水を配する邸宅が出現する。この庭園遺構は、中世後半の邸宅庭園の実相を窺う上で重要である。

宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書　第55集

宇治市街遺跡（宇治里尻５他）発掘調査報告書

－ＪＲ宇治駅前市民交流プラザ建設に伴う発掘調査－

発行日　2004年３月31日
発行者　宇治市教育委員会
〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33

編　集　宇治市歴史資料館
〒611-0023 京都府宇治市折居台１－１
TEL 0774-３９-９２６０
FAX 0774-３９-９２６１
eメール shiryoukan@city.uji.kyoto.jp

製　作　有限会社　新進堂印刷所
〒611-0021 京都府宇治市宇治妙楽９